

齒科医師国家試験出題基準

平成30年版

厚生労働省医政局歯科保健課

目 次

平成 30 年版歯科医師国家試験出題基準改定の概要

歯科医師国家試験出題基準改定部会委員名簿

ブループリント（歯科医師国家試験設計表）

必修の基本的事項	1
歯科医学総論	
総論Ⅰ 保健・医療と健康増進	12
総論Ⅱ 正常構造と機能、発生、成長、発達、加齢	15
総論Ⅲ 病因、病態	18
総論Ⅳ 主要症候	20
総論Ⅴ 診察	21
総論Ⅵ 検査	23
総論Ⅶ 治療	25
総論Ⅷ 歯科材料と歯科医療機器	28
歯科医学各論	
各論Ⅰ 成長・発育に関連した疾患・病態	32
各論Ⅱ 歯・歯髄・歯周組織の疾患	36
各論Ⅲ 顎・口腔領域の疾患	39
各論Ⅳ 歯質・歯・顎顔面欠損と機能障害	46
各論Ⅴ 高齢者等に関連した疾患・病態・予防ならびに歯科診療	49
主な検査項目の表記	51
索 引	
欧文索引	60
邦文索引	61
参 考	
歯科医師国家試験制度改善検討部会報告書	81

平成 30 年版歯科医師国家試験出題基準改定の概要

1. 歯科医師国家試験出題基準改定の経緯

歯科医師国家試験出題基準は、昭和 60 年に策定されて以来、歯科医療・歯学教育の変化に合わせて 4 年毎に改定し、内容の見直しを継続的に行っている。今回の改定は、平成 28 年 3 月に取りまとめられた「歯科医師国家試験制度改善検討部会報告書」の提言を踏まえて行った。

2. 歯科医師国家試験出題基準改定部会

「歯科医師国家試験出題基準改定部会」において、平成 28 年 9 月 5 日から計 5 回の会議を開催し、現行（平成 26 年版）の歯科医師国家試験出題基準について議論のうえ改定作業を行った。

3. 改定の基本的な考え方

- (1) ブループリントの出題数は、平成 28 年 3 月に取りまとめられた「歯科医師国家試験制度改善検討部会報告書」の提言を踏まえる。
- (2) 平成 28 年度改訂版歯学教育モデル・コア・カリキュラムとの整合性や歯科医師臨床研修の到達目標とも整合性を図った。
- (3) 社会情勢の変化に合わせて、次の項目の充実を図った。
 - ・ 高齢化等による疾病構造の変化に伴う歯科診療の変化に関する内容
 - ・ 地域包括ケアシステムの推進や多職種連携等に関する内容
 - ・ 口腔機能の維持向上や摂食機能障害への歯科診療に関する内容
 - ・ 医療安全やショック時の対応、職業倫理等に関する内容
- (4) 歯科医師国家試験において、歯科医師として具有すべき知識及び技能を適切に評価する出題ができるよう、可能な限り包括化・簡素化に努めた。

4. 採用時期と問題の出題

今回、改定した出題基準は、第 111 回歯科医師国家試験（平成 30 年）から採用するが、改定当初は特に、出題基準の改定による受験者の混乱がないよう、現在の歯学部における授業内容等を考慮し、歯科医師試験委員会で問題の内容等について十分に議論を行ったうえで出題する。

5. おわりに

本出題基準が正しく理解され、歯科医師試験委員によって活用されることにより、歯科医師国家試験が妥当な範囲と適切な水準で行われることを期待する。

歯科医師国家試験出題基準改定部会 委員名簿

部会長	矢谷 博文	大阪大学大学院歯学研究科教授
副部会長	前田 健康	新潟大学大学院医歯学総合研究科教授
○	朝田 芳信	鶴見大学歯学部教授
	有地 榮一郎	愛知学院大学歯学部教授
○	池邊 哲郎	福岡歯科大学教授
○	石川 博之	福岡歯科大学長
○	磯崎 篤則	朝日大学歯学部教授
○	市川 哲雄	徳島大学大学院医歯薬学研究部教授
○	一戸 達也	東京歯科大学副学長
○	井上 富雄	昭和大学歯学部教授
○	植田 耕一郎	日本大学歯学部教授
○	興地 隆史	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科教授
○	勝又 明敏	朝日大学歯学部教授
	苅部 洋行	日本歯科大学生命歯学部教授
○	川浪 雅光	北海道大学名誉教授
	菊谷 武	日本歯科大学教授
	北村 知昭	九州歯科大学教授
	倉澤 郁文	松本歯科大学教授
	小松崎 明	日本歯科大学新潟生命歯学部教授
○	小松澤 均	鹿児島大学大学院医歯学総合研究科教授
○	斎藤 隆史	北海道医療大学歯学部教授
	坂下 英明	明海大学歯学部教授
	佐藤 聡	日本歯科大学新潟生命歯学部教授
	澤瀬 隆	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授
○	嶋田 昌彦	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科教授
○	杉山 芳樹	岩手医科大学歯学部教授

○	高田 隆	広島大学大学院医歯薬保健学研究院教授
	筑波 隆幸	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授
	内藤 徹	福岡歯科大学教授
	仲野 和彦	大阪大学大学院歯学研究科教授
	中村 誠司	九州大学大学院歯学研究科教授
	丹羽 均	大阪大学大学院歯学研究科教授
	馬場 一美	昭和大学歯学部教授
○	平田 雅人	九州大学大学院歯学研究科教授
○	細川 隆司	九州歯科大学教授
	松島 潔	日本大学松戸歯学部教授
	三浦 宏子	国立保健医療科学院国際協力研究部部長
	溝口 到	北海道医療大学歯学部教授
	宮本 洋二	徳島大学大学院医歯薬学研究部教授
	宮脇 正一	鹿児島大学大学院医歯学総合研究科教授
○	森田 学	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授
	山本 一世	大阪歯科大学主任教授
	吉田 和市	神奈川歯科大学教授
○	米山 隆之	日本大学歯学部教授
○	若森 実	東北大学大学院歯学研究科教授
	渡邊 郁哉	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授
●	奈良 信雄	順天堂大学特任教授

(○幹事委員、●オブザーバー、五十音順、敬称略)

歯科医師国家試験出題基準の利用法

はじめに

歯科医師国家試験は、歯科医師法第9条に基づいて、「臨床上必要な歯科医学及び口くう衛生に関して、歯科医師として具有すべき知識及び技能について」行われる。第9条にいう「知識と技能」とは、臨床研修歯科医師として歯科医療に第一歩を踏み出し、指導歯科医の下でその任務を果たすのに必要な基本的知識及び技能であると考えられる。

その内容を具体的な項目によって示したのが、歯科医師国家試験出題基準（ガイドライン）（以下「出題基準」という。）である。歯科医師国家試験の妥当な内容、範囲及びレベルを確保するため、歯科医師試験委員（以下「試験委員」という。）は、この基準を踏まえて出題する。ただし、出題内容に関する最終的な判断は、試験委員会が行うものとする。

したがって、出題基準は歯学部卒前の歯学教育で扱われる内容の全てを網羅するものでなく、これらの教育のあり方を拘束するものでもない。

利用方法

1. 「必修の基本的事項」、「歯科医学総論」及び「歯科医学各論」の関係性

「必修の基本的事項」は「歯科医師として必ず具有すべき基本的最低限度の知識及び技能」であることから、歯科医師として必要な基本的知識及び技能（土台となる知識及び技能）とする。「歯科医学総論」と「歯科医学各論」は、「必修の基本的事項」を土台として構成される、歯科医師として必要な専門的・臨床的知識及び技能とする。このような関係性を基本とする。

2. 大・中・小項目、備考

（1）大項目は、中項目を束ねる見出しを示している。

（2）中項目は、疾患や事項等の包括的な概念等、又は、小項目を束ねる見出しを示している。

出題範囲という観点から配列されているため、必ずしも学問的な分類体系と一致するものではない。

（3）小項目は、疾患や事項等中項目より詳細な内容を示している。

小項目の記載がない場合は、中項目について標準的な学生用教科書に記載されている程度の内容が出題範囲となる。また、教科書等に記載がない場合においても、臨床現場で必要とされる新しい情報等については、試験委員会の判断で出題できるものとする。

（4）備考は、小項目に関する内容のうち、特に重要な事項や補足的な説明等とする。ただし、必ずしも出題範囲を限定するものではない。

3. 出題範囲の考え方について

歯科医師国家試験の妥当な内容、範囲及びレベルを確保するため、試験委員は、この基準を踏まえて出題する。ただし、出題内容に関する最終的な判断は、試験委員会が行うものとする。

4. ブループリント（歯科医師国家試験設計表）

（1）必修の基本的事項

「必修の基本的事項」では、各大項目に出題割合を記載している。これは、「必修の基本的事項」における全問題のうち、当該大項目に関する出題割合を示している。

（2）歯科医学総論、歯科医学各論

「歯科医学総論」と「歯科医学各論」では、各章に出題割合を記載している。これは、「歯科医学総論」または「歯科医学各論」における全問題のうち、当該章に関する出題割合を示している。

5. その他

（1）同一事象に対し異なる表現がある場合には、括弧書き等によってどちらも使用可能とした。試験委員会の判断で、括弧内・外の語を適宜使用できる。なお、括弧は以下のルールに基づいている。

- （ ） 直前の語の説明 例；SOAP（主観的所見、客観的所見、評価、計画）
- < > 直前の語の同義語 例；国際生活機能分類<ICF>
- [] 新旧語の並列 例；自閉スペクトラム症[自閉症スペクトラム障害]
- { } 省略しても意味または分類の変わらない語
例；Blandin-Nuhn{腺}嚢胞

【例】 「主な検査項目の表記」における表示の例示

例；Gram 染色 【例】喀痰の Gram 染色標本

（2）人名を含む語の表記は、原則、原文表記を行う。

ブループリント（歯科医師国家試験設計表）

「必修の基本的事項」（約 22%）

1	医の倫理と歯科医師のプロフェッショナリズム	約	2%
2	社会と歯科医療	約	11%
3	チーム医療	約	3%
4	予防と健康管理・増進	約	5%
5	人体の正常構造・機能	約	16%
6	人体の発生・成長・発達・加齢	約	5%
7	主要な疾患と障害の病因・病態	約	12%
8	主要な症候	約	10%
9	診察の基本	約	7%
10	検査・臨床判断の基本	約	11%
11	初期救急	約	2%
12	治療の基礎・基本手技	約	13%
13	一般教養的事項	約	3%

「歯科医学総論」（約 28%）

総論Ⅰ	保健・医療と健康増進	約	21%
総論Ⅱ	正常構造と機能、発生、成長、発達、加齢	約	17%
総論Ⅲ	病因、病態	約	9%
総論Ⅳ	主要症候	約	4%
総論Ⅴ	診察	約	7%
総論Ⅵ	検査	約	13%
総論Ⅶ	治療	約	16%
総論Ⅷ	歯科材料と歯科医療機器	約	13%

「歯科医学各論」（約 50%）

各論Ⅰ	成長・発育に関連した疾患・病態	約	20%
各論Ⅱ	歯・歯髄・歯周組織の疾患	約	24%
各論Ⅲ	顎・口腔領域の疾患	約	24%
各論Ⅳ	歯質・歯・顎顔面欠損と機能障害	約	24%
各論Ⅴ	高齢者等に関連した疾患・病態・予防ならびに歯科診療	約	8%

※ 歯科医学各論において、出題割合の約 6%を歯科疾患の予防・管理に関する項目から出題する。

必修の基本的事項

基準値を理解すべき検査項目 (基準値を明記しない検査項目)

○ 血液学検査

分 類	項 目
血球検査	赤血球
	ヘモグロビン<Hb>
	ヘマトクリット<Ht>
	白血球
	白血球分画
	血小板
・凝固・線溶 能検査	プロトロンビン時間<PT>(PT-INRを含む)

○ 免疫血清学検査

分 類	項 目
マーカー 炎症	C反応性タンパク<CRP>

○ 生体機能検査

分 類	項 目
ガス分析 動脈血	pH
	PaCO ₂
	PaO ₂
機能呼吸	経皮的動脈血酸素飽和度<SpO ₂ >

○ 生化学検査

分 類	項 目
タンパク分画	総タンパク<TP>
	アルブミン<Alb>
色素生体	総ビリルビン
	直接ビリルビン
酵素、アイム ソザイム	AST
	ALT
成分 含窒素	尿素窒素<BUN>
	クレアチニン<Cr>
糖代謝関連	{随時}血糖
	空腹時血糖<FBS>
	HbA1c
脂質代謝 謝関連	総コレステロール<TC>
	トリグリセリド<TG>
電解質・ 酸塩基平衡	Na
	K
微量元素 重金屬、	Fe

○ 栄養学検査

分 類	項 目
血液生化学 検査	総タンパク<TP>
	アルブミン<Alb>

大 項 目	中 項 目	小 項 目
1 医の倫理と歯科医師のプロフェッショナルリズム 約2%	ア 医の倫理、生命倫理	a 患者の人権と医療
		b 医療者の倫理(ニュルンベルグ綱領、ジュネーブ宣言など)
	イ 歯科医師と患者・家族との関係	a 患者中心の歯科医療(インフォームド・コンセント、セカンドオピニオンなど)
		b 患者の権利
2 社会と歯科医療 約11%	ア 患者・障害者のもつ心理社会的問題と背景	a 疾病・障害の概念・構造(社会的関わり)
		b QOL<quality of life>
		c リハビリテーションの理念
		d ノーマライゼーション、バリアフリー
		e 患者・障害者の心理と態度
		f 国際生活機能分類<ICF>、国際障害分類<ICIDH>
		g 疾病構造、健康格差
	イ 保健・医療・福祉・介護の制度と医療経済	a 歯科医師法、歯科衛生士法、歯科技工士法
		b 医療法
		c 介護保険法
		d 医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律
		e 保健・医療・福祉・介護の制度と職種
		f 地域包括ケアシステム
		g 地域歯科保健活動での職種の連携
		h 国民医療費、社会保障費
	ウ 臨床試験・治験と倫理	a 臨床研究、疫学研究の倫理指針
		b GCP<医薬品の臨床試験の実施の基準>
	エ 医療の質の確保	a 患者満足度
		b 患者説明文書、同意書
		c クリニカルパス
	オ 医療事故の防止	a 医療事故と医療過誤
		b 医療事故の発生要因
		c 患者の安全管理(誤飲、誤嚥、誤薬、出血、外傷、感染、被曝、目の保護)
		d 医療者の安全管理
		e 医療危機管理<リスクマネジメント>
		f ヒヤリハット、アクシデント、インシデント、医療事故報告書、インシデントレポート
		g 医療安全対策(医薬品・医療機器の安全管理)
		h 医療事故調査制度
	カ 院内感染対策	a 標準予防策<standard precautions>
		b 抗菌薬の適正使用<antimicrobial stewardship ; AMS>と薬剤耐性<antimicrobial resistance ; AMR>
		c 医療廃棄物処理
		d 院内感染対策委員会
	キ 医療裁判	a 医事紛争、賠償
		b 医療訴訟(刑事裁判、民事裁判)
	ク 医薬品医療機器による健康被害	a 副作用・有害事象への対応(報告義務、治療、補償)

大 項 目	中 項 目	小 項 目
	ケ 血液・血液製剤の安全性	a 保管、管理
	コ 診療録、診療情報の記録と管理	a 診療に関する記録(診療録、処方箋、検査所見記録、画像記録、手術記録、入院診療計画書、退院時要約、技工指示書、模型)の管理・保存
		b SOAP(主観的所見、客観的所見、評価、計画)
		c 個人情報の保護
		d 診療情報の開示
3 チーム医療 約3%	ア チーム医療の意義	a 多職種連携
		b 医科歯科連携
		c 病診連携
		d 医療チームの構成員と役割
	イ チーム医療における歯科の役割	a かかりつけ歯科医
		b 在宅医療(訪問歯科診療を含む)
		c 情報提供
		d セカンドオピニオン
4 予防と健康管理・増進 約5%	ア 健康増進と疾病予防	a 概念
		b プライマリヘルスケア
		c ヘルスプロモーション
		d 健康日本21(第二次)
		e メタボリックシンドローム
		f 行動レベル、行動変容
	イ 地域保健にかかる法規と制度	a 地域保健法、健康増進法、歯科口腔保健の推進に関する法律
		b 母子保健
		c 学校保健
		d 産業保健
		e 成人・高齢者保健
		f 健康危機管理
	ウ 予防手段	a フッ化物応用
		b 保健指導
		c 口腔清掃
	エ 口腔健康管理	a 口腔衛生管理のための口腔ケア
		b 口腔機能維持向上のための口腔ケア
		c 病期に応じた口腔ケア
5 人体の正常構造・機能 約16%	ア 全身・口腔の構造と機能	a 生体構成成分の構造・機能
		b ゲノム、遺伝子、染色体
		c 細胞・細胞小器官の構造と機能
		d 組織(上皮組織、結合<支持>組織(血液を含む)、筋組織、神経組織)
		e 器官系(骨格系(関節を含む)、筋系、呼吸器系、循環器系<脈管系>、消化器系(歯および唾液腺を含む)、造血器系、泌尿器・生殖器系、神経系、内分泌系、感覚器系)
		f 免疫(免疫担当細胞、自然免疫、体液性免疫、細胞性免疫、粘膜免疫)

大 項 目	中 項 目	小 項 目
	イ 全身・口腔の生態系	a 常在微生物叢 b 微生物の構造・一般性状 c プラーク<口腔バイオフィルム>
6 人体の発生・成長・発達・加齢 約5%	ア 人体の発生	a 生殖形成、排卵、受精、着床 b 二層性胚盤、三層性胚盤、胚子期、胎児期
	イ 人体の発育	a 発育区分(出生前期、新生児期、乳児期、幼児期、学童期、思春期) b 発育期の特徴 c 成長・発達の特徴(身体成長、原始反射、運動の発達、社会性の発達、言語の発達、情動の発達) d 小児の生理的特徴
	ウ 口腔・顎顔面の成長・発育	a 歯・歯列の発育(発育時期、萌出時期・順序、歯の脱落・交換時期、歯齢) b 上顎骨・下顎骨の成長の特徴(成長の時期、骨形成様式)
	エ 加齢、老化	a 細胞・組織・臓器の加齢現象(歯および口腔を含む) b 高齢者の生理的特徴 c 高齢者の心理的特徴
	ア 疾病の概念	a 健康・疾病の概念
		b 先天異常
		c 損傷
		d 炎症
		e 感染症
		f 免疫異常
		g 腫瘍
		h 循環障害
		i 代謝障害、萎縮、壊死
		j 病的増殖
		k 精神・神経疾患
		l 放射線の影響
	イ 口腔・顎顔面領域の疾患と障害の概念	a 歯の硬組織疾患
		b 歯髄疾患、根尖性歯周疾患
		c 歯周疾患
		d 不正咬合
		e 咀嚼障害
		f 摂食嚥下障害
		g 先天異常
		h 損傷
		i 嚢胞(歯源性、非歯源性)
		j 腫瘍、腫瘍類似疾患
		k 顎関節疾患
		l 口腔粘膜疾患
		m 唾液腺疾患
		n 口腔・顎顔面領域に症状を伴う全身疾患
		o 薬物・放射線による有害事象
		p 精神・心身医学的疾患
7 主要な疾患と障害の病因・病態 約12%		

大 項 目	中 項 目	小 項 目
8 主要な症候 約10%	ア 全身の症候	a 発熱、全身倦怠感、体重減少・増加、ショック、意識障害、脱水、浮腫、けいれん、めまい、黄疸、呼吸困難、チアノーゼ、頭痛、動悸、息切れ、胸痛、睡眠障害、嘔吐、下痢
	イ 口腔・顎顔面領域の症候	a 一般的症候(疼痛、腫脹、腫瘍、色調の変化、熱感、出血、瘻、硬さの異常、触覚の異常、機能障害(開口障害など))
		b 歯の症候(齲蝕、硬組織欠損、変色、亀裂、破折)
		c 歯髄・根尖歯周組織の症候(自発痛、誘発痛)
		d 歯周組織の症候
		e 歯列・咬合の症候(不正咬合)
		f 口腔粘膜の症候
		g 顎骨の症候(形態の異常)
		h 顎関節の症候(関節痛、関節雑音、運動障害)
		i 筋の症候(筋痛、圧痛、運動麻痺、関連痛)
		j リンパ節の症候
		k 唾液腺の症候
		l 感覚異常(味覚、体性感覚)
	ウ 全身的疾患に関連する口腔・顎顔面領域の症候	a 貧血に伴う症候(舌炎など)
		b 出血性素因に伴う症候(歯肉出血、抜歯後出血など)
		c 急性白血病に伴う症候(歯肉出血など)
		d 後天性免疫不全症候群<AIDS>に伴う症候(カンジダ症、歯周疾患、毛状様白板症など)
		e ウイルス感染に伴う症候(水疱など)
		f 結核・梅毒に伴う症候(粘膜斑、潰瘍など)
		g 金属アレルギーに伴う症候
		h 糖尿病に伴う症候(口腔乾燥、歯周疾患など)
		i 臓器・造血幹細胞移植に伴う症候(歯肉出血、移植片対宿主病<GVHD>など)
		j 脳血管・神経・筋疾患に伴う症候(摂食嚥下障害など)
	エ 薬物に関連する口腔・顎顔面領域の症候	k 他臓器癌に伴う症候(遠隔転移など)
		l 認知症患者、要介護高齢者にみられる症候(カンジダ症、口腔乾燥、摂食嚥下障害など)
9 診察の基本 約7%	ア 診察のあり方	a 安全と感染への配慮
		b 心理社会的側面(プライバシー、尊厳)・苦痛への配慮
		c 自己紹介、患者の確認
		d 患者への説明・声かけ・例示
	イ 基本手技	a 視診、触診、打診、聴診
		b 患者の体位(立位、座位、半座位、仰臥位、側臥位)
		c 術者の姿勢・位置

大 項 目	中 項 目	小 項 目
	ウ 医療面接	a 意義、目的(医療情報の収集・提供、患者歯科医師関係の確立、患者の指導、動機付け、治療への参加)
		b マナー(身だしなみ、挨拶、態度、会話のマナー、コミュニケーションの進め方、プライバシーの保護、感情面への対応)
		c 聴取事項(主訴、現病歴、既往歴、家族歴、患者・家族の考え方・希望)
	エ 全身の診察	a 全身の外観(体格、栄養、姿勢、歩行、発語)
		b 意識状態、精神状態、認知機能
		c バイタルサイン(呼吸、脈拍、血圧、体温)
	オ 口腔・顎顔面の診察	a 顔貌、顔色、皮膚
		b 口腔粘膜
		c 所属リンパ節
		d 唾液腺
		e 顎関節・筋(下顎運動)
	カ 歯列・咬合状態の診察	a 歯列弓の形態・大きさ
		b 前歯部の被蓋・咬合状態
		c 臼歯部の咬合状態
	キ 歯・歯周組織の診察	a 歯と修復物の所見
		b 歯髄・根尖歯周組織の症状
		c 歯周組織の症状
10 検査・臨床判断の基本 約11%	ア 意義と目標	a 診断
		b 治療効果の判定、治療経過の評価
		c スクリーニング、医療情報の収集
	イ 検査の安全性	a 実施(必要性)の説明
		b 患者・検体の確認
		c 検査の合併症・リスク
	ウ 基準値と結果の解釈	a 基準範囲の概念
		b 生理的変動、異常値と原因
		c 性差、年齢差
		d 症候・病歴(既往歴、投与薬物)との関連
	エ 検体検査の種類	a 一般臨床検査
		b 血液学検査
		c 生化学検査
		d 免疫血清学検査
		e 微生物学検査
	オ 口腔・顎顔面の検査	a 硬組織・歯髄・根管の検査
		b 歯周組織の検査
		c 顎関節の検査
		d 筋の検査
		e 唾液腺の検査
		f 口腔機能の検査
		g 感覚(味覚、体性感覚)の検査

大 項 目	中 項 目	小 項 目
	カ 画像検査	a 放射線の性質と作用
		b エックス線撮影装置、検出器、撮影補助器材
		c 放射線の防護・管理
		d エックス線撮影(口内法、パノラマエックス線検査)
		e CT(単純、造影)
	キ 病理学検査	a 細胞診
		b 組織診
	ク 根拠に基づいた医療 〈EBM〉	a 意義、患者への適用
		b システマティックレビュー、メタ分析〈メタアナリシス〉
		c 診療ガイドライン
		d 臨床疫学的指標(アウトカム、リスク比、オッズ比)
		e 費用対効果
11 初期救急 約2%	ア 救急患者の診察	a 救急処置を要する症状および病態(心停止、失神、ショック、けいれん、頭痛、運動麻痺、呼吸困難、胸痛、アレルギー症状、誤飲、誤嚥)
		b バイタルサインの把握
		c 意識障害の評価
		d 病態の評価と疾患(全身的偶発症を含む)の鑑別
	イ 救急処置	a 一次救命処置〈BLS〉
		b 静脈路確保、酸素療法、救急医薬品
12 治療の基礎・基本 手技 約13%	ア 治療の基本	a 意義と目標(アウトカム)
		b 種類と特性(原因療法、対症療法、保存療法、根治療法、緩和療法)
		c 治療の場(外来、入院、在宅医療(訪問歯科診療を含む))
	イ 乳幼児・高齢者・妊産婦・障害者・要介護者の治療	a 治療環境
		b 患者の体位
		c コミュニケーション
		d チーム医療
	ウ 器械の安全な取扱法	a 歯科用ユニット
		b 治療に用いる基本的器材
	エ 消毒・滅菌と感染対策	a 消毒・滅菌法
		b 手術野の防湿・消毒、清潔操作
		c 手術室
		d 標準予防策〈standard precautions〉
	オ 注射法の種類	a 皮内
		b 皮下
		c 筋肉内
		d 静脈内
	カ 麻酔法	a 局所麻酔
		b 全身麻酔
		c 精神鎮静法
	キ 創傷の処置	a 洗浄、消毒
		b 止血
		c 縫合

大 項 目	中 項 目	小 項 目
	ク 膿瘍の処置	a 穿刺、切開、ドレナージ
	ケ 歯・歯周組織に対する基本的処置	a 抜歯
		b 歯の硬組織疾患の治療
		c 歯内療法
		d 歯周治療
		e 歯の欠損の治療
		f 不正咬合の治療
	コ 薬物療法	a 薬理作用(薬力学、主作用および副作用を含む)
		b 薬物動態
		c 薬物投与(連用および併用を含む)
	サ 栄養療法	a 経口栄養、経静脈栄養、経管栄養(経腸栄養、胃瘻<PEG>)
	シ 口腔機能のリハビリテーション	a 機能の回復(咀嚼機能、摂食嚥下機能、構音機能)
		b 口腔機能管理
		c コミュニケーションと社会参加
	ス 患者管理の基本	a 口腔環境の評価(口腔清掃状態、補綴装置の清掃状態、残存歯の状態、口腔粘膜の状態、咬合状態、補綴装置の適合状態、顎堤の状態、唾液、味覚)
		b 全身管理に留意すべき疾患・対象(皮膚・粘膜疾患、呼吸器疾患、循環器疾患、消化器疾患、血液・造血器・リンパ系疾患、泌尿器・生殖器疾患、精神疾患、神経疾患、内分泌疾患、免疫・アレルギー性疾患、感染症、小児疾患など)
		c 日常生活動作<ADL>の評価
	セ 歯科材料・機器	a 基本的性質
		b 診療用器械、切削・研削工具、研磨材
		c 印象用材料
		d 模型用材料、ワックス
		e 成形修復・予防填塞・歯内療法用材料
		f 歯冠修復・義歯用材料
		g 成形技術・機器
		h 接着用材料、接着処理
		i 歯科矯正用材料
		j 口腔インプラント・口腔外科・歯周治療用材料
13 一般教養的事項 約3%	ア 医学史、歯科医学史	
	イ 医学・医療に関する人文・社会科学・自然科学・芸術などに関連する一般教養的知識や考え方	
	ウ 歯科医療に必要な基本的医学英語	

齒科医学総論

総論 I 保健・医療と健康増進〔約21%〕

大項目	中項目	小項目	備考
1 健康の保持・増進と社会保障の仕組み	ア 健康・疾病・障害の概念	a 健康の概念	
		b 健康に関わる要因	
		c 社会環境の変化	社会的決定要因
		d 疾病の自然史と対応	
		e 障害の概念と対応	
	イ 口腔と全身の健康増進	a 口腔の環境・機能	
		b 歯への沈着物	
		c 健康診断、口腔の診察・検査、スクリーニング検査	歯科疾患のリスク評価
		d 健康教育・学習、保健指導、健康相談	
		e 禁煙指導・支援	
	ウ 保健・医療・福祉・介護の法規と制度	a 医事衛生法規	
		b 保健衛生法規	
		c 医療保障・社会福祉・介護保険関連法規	
		d 予防衛生法規	
		e 薬事衛生法規	
		f 地域保健関連機関	
		g 福祉施設、介護施設	
		h 医療施設	
		i 医療関係職種	
		j 福祉・介護の制度と職種	
		k 医療連携、チーム医療	
		l 保健・医療・福祉・介護の制度と連携	
	エ 地域保健、地域医療	a 公衆衛生活動、地域保健活動	医療政策を含む
		b 医療計画、健康増進計画	
		c ヘルスプロモーション	
		d 地域保健活動の進め方	
		e 都道府県・市町村・保健所の歯科保健業務	
		f プライマリヘルスケア	
		g かかりつけ歯科医機能	
		h 救急・災害時等の歯科保健医療対策	トリアージを含む
		i へき地医療	
		j 在宅医療	訪問歯科診療を含む
	オ 地域包括ケアシステム	a 医療と介護の連携	
		b 介護予防、生活支援	
		c 地域包括支援センター	

大項目	中項目	小項目	備考
2 ライフステージ別にみた保健・福祉の制度	ア 母子保健、母子歯科保健と児童福祉	a 現状、動向	
		b 母性保健	
		c 母子歯科保健の意義	
		d 妊産婦の歯科保健	
		e 乳幼児の歯科保健と健康診査	
		f 児童福祉制度	
		g 児童虐待への対応	
	イ 学校保健、学校安全、学校歯科保健	a 現状、動向	
		b 学校保健の領域・内容	
		c 学校保健関係者	
		d 学校歯科保健教育	
		e 学校歯科保健管理	
		f 組織活動	
		g 学校安全	
	ウ 産業保健、産業歯科保健	a 現状、動向	
		b 労働安全衛生管理	
		c 業務上疾病、作業関連疾患	
		d 健康診断、事後措置	
		e 産業歯科保健の意義	
		f 産業歯科保健活動	
		g 職業性歯科疾患	
	エ 成人保健、成人歯科保健	a 現状、動向	
		b 特定健康診査、特定保健指導	
		c 成人歯科保健、成人の口腔保健管理	
	オ 高齢者保健、高齢者歯科保健	a 現状、動向	
		b 高齢者の特性	
		c QOL<quality of life>、日常生活動作<ADL>	
		d 高齢者歯科保健、高齢者の口腔管理	
		e 日常生活支援事業、介護予防	
	カ 障害児・障害者の保健・福祉	a 現状、動向	
		b 障害児・障害者の健康保持・増進	
		c 障害の種類と支援	身体障害、知的障害、精神障害(発達障害を含む)
		d 自立支援と福祉の制度	
		e 障害児・障害者の歯科保健医療	
3 歯科法医学	ア 死因の究明	a 死体解剖と死因究明制度	
		b 死後変化	
		c 個人識別、身元確認	
4 社会保障と医療経済	ア 社会保障と医療経済	a 社会保障制度	
		b 医療保険、介護保険	
		c 医療経済と国民医療費	

大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
5 国際保健	ア 国際保健	a 世界の保健・医療の問題と方向性	
		b 国際保健、医療協力	
6 疫学と調査	ア 疫学とその応用	a 疫学の概念	
		b 疫学指標	
		c 統計解析	
		d 因果関係の成立	
		e 観察研究、介入研究	
		f 臨床疫学	
		g 歯科集団検診	
	イ 指標と調査	a 歯科領域における統計指標と疫学調査	
		b 人口統計、保健統計	
	ウ 口腔疾患の疫学要因	a 齲蝕の疫学要因	
		b 歯周疾患の疫学要因	
		c 不正咬合の疫学要因	
		d 口腔癌の疫学要因	
7 感染症対策	ア 感染症対策と疫学	a 感染症の疫学	
		b 感染症の予防	
		c 院内感染対策	
8 国民栄養と食生活・食育指導	ア 国民栄養と食品保健	a 国民栄養の現状	
		b 食事摂取基準	
		c 食生活指針	
	イ 食育と口腔保健	a 食育基本法	
		b 食の安全性と機能性	
		c 食の機能と口腔保健	
9 環境保健	ア 環境保健対策	a 環境要因と健康	
		b 地球環境の変化、健康影響	
		c 環境汚染、公害の発生要因、健康影響	
		d 環境汚染の評価と対策	
		e 廃棄物処理	
		f 放射線と健康	
		g 生活環境と健康	水、大気、温熱、騒音、振動など

総論Ⅱ 正常構造と機能、発生、成長、発達、加齢〔約17%〕

大項目	中項目	小項目	備考
1 細胞・組織・器官の構造と機能	ア 皮膚・粘膜系	a 表皮、上皮、真皮、粘膜固有層、皮下組織、粘膜下組織	
		b 付属器	
	イ 運動・骨格系	a 骨	頭頸部を除く
		b 筋	頭頸部を除く
	ウ 呼吸器・循環器系	a 気道、肺、呼吸筋	呼吸運動を含む
		b 心臓、脈管系	
	エ 消化器系	a 消化管	消化管ホルモンを含む
		b 肝臓、胆道、膵臓	
	オ 造血器系	a 骨髄	
	カ 泌尿器・生殖器系	a 腎臓、尿路	
		b 体液・電解質調節	
		c 生殖器、妊娠	
	キ 神経系	a ニューロン、グリア	神経伝達物質の合成・分泌・作用を含む
		b 感覚機能	
		c 運動機能	
		d 自律機能	
		e 高次神経機能	記憶、学習、睡眠、情動を含む
	ク 内分泌系	a 内分泌器官	
		b ホルモンの合成・分泌・作用	
2 生態系	ア 常在微生物		
3 免疫	ア 免疫系担当臓器・細胞		
	イ 抗原処理と抗原提示		
	ウ 自然免疫		
	エ 獲得免疫	a 体液性免疫	
		b 細胞性免疫	
	オ 粘膜免疫		
4 頭頸部の構造	ア 頭頸部の部位		
	イ 頭頸部の骨格系	a 頭蓋	
		b 頭蓋骨(関節、靱帯を含む)	舌骨、耳小骨を含む
		c 頸椎	
	ウ 頭頸部の筋系	a 顔面筋<表情筋>	
		b 咀嚼筋	
		c 浅頸筋	胸鎖乳突筋、広頸筋、舌骨上筋群、舌骨下筋群
		d 頸筋膜(浅葉、気管前葉、椎前葉、頸動脈鞘)	
	エ 頭頸部の脈管系	a 動脈系	
		b 静脈系	
		c リンパ系	

大項目	中項目	小項目	備考
	オ 頭頸部の内臓系	a 口腔	口唇、口腔前庭、固有口腔、口蓋、口{腔}底、頬、口峽
		b 唾液腺	
		c 舌、扁桃	
		d 咽頭、喉頭	
	カ 頭頸部の神経系	a 脳神経	
		b 脊髄神経	頭頸部に分布するものに限る
	キ 頭頸部の局所解剖	a 画像解剖	
		b 組織隙<筋膜隙>	
5 歯と歯周組織の構造	ア 歯の形態	a 基本事項	生物学的特性、生歯、歯式、方向用語、歯の外形、歯髄腔の形態、歯根の形態、三歯徴<三表徴>
		b 乳歯	
		c 永久歯	
		d 特殊な形態	
	イ 組織と性状	a エナメル質、象牙質、歯髄	
		b 歯周組織	
6 口腔・顎顔面の機能	ア 感覚	a 顔面皮膚、粘膜	
		b 味覚、嗅覚	
		c 象牙質、歯髄、歯根膜	
	イ 運動	a 反射	
		b 顎関節、下顎位、下顎運動	
	ウ 食物摂取	a 咬合接触、咬合様式	
		b 吸啜、咀嚼	
		c 嚥下、嘔吐	
	エ 発声、構音		
	オ 唾液分泌	a 唾液の性状・機能	
		b 分泌機構	
7 口腔の生態系	ア 常在微生物叢		
	イ プラーク<口腔バイオフィルム>		
8 人体の成長・発達・加齢	ア 小児の機能	a 運動・感覚機能	
		b 認知・言語機能	
		c 情緒・社会性	
	イ 発育区分における成長・発達の評価	a 身体成長の評価法	Kaup指数、Rohrer指数、BMI
		b 年齢による成長評価法	暦年齢、生理的年齢
		c 精神発達の評価法	精神年齢、発達スクリーニング検査
	ウ 口腔・顎の機能の発達	a 咀嚼・嚥下機能	
		b 唾液分泌機能	
		c 味覚	

大項目	中項目	小項目	備考
	エ 加齢・老化による 口腔・顎顔面の変 化	a 器質的変化	
		b 機能的変化	
9 口腔・顎顔面の 発生・成長・発 育	ア 頭頸部の形成	a 鰓弓<咽頭弓>	
		b 顎顔面(口蓋、顎関節を含む)	形成異常を含む
		c 舌、唾液腺	
	イ 歯・歯周組織の形 成と歯の萌出	a 初期発生	歯堤、歯胚
		b 歯の硬組織形成	
		c 歯周組織形成	
		d 歯の萌出	歯根形成を含む
	ウ 骨組織代謝	a 軟骨内<軟骨性>骨化、膜内<膜 性>骨化	
		b 形成、吸収、改造<リモデリン グ>	細胞間情報伝達を含む
		c 石灰化機構	血清カルシウム調節機構 を含む
	エ 頭部の成長・発育	a 頭蓋	
		b 歯列、咬合	

総論Ⅲ 病因、病態〔約9%〕

大項目	中項目	小項目	備考
1 病因、病態	ア 内因、外因		
	イ 細胞・組織の傷害	a 代謝障害(変性)	
		b 萎縮	
		c 細胞死	
	ウ 修復と再生	a 肥大、過形成(増生)	
		b 化生	
		c 再生	
		d 創傷治癒	
		e 異物処理	
	エ 循環障害	a 全身の循環障害	
		b 局所の循環障害	
	オ 炎症	a 概念	
		b 病因	
		c 分類と病態	
		d 炎症に関与する細胞	
	カ 感染症	a 概念	
		b 病原微生物	
		c 感染症	
	キ 免疫異常	a 概念	
		b 免疫不全	
		c 自己免疫疾患	
		d アレルギー反応(過敏症)	
	ク 腫瘍	a 概念	
		b 疫学	
		c 病因	
		d 分類と病態	
		e 組織学的構造	
		f 前癌状態、前癌病変	
		g 腫瘍と宿主の関係	
	ケ 疼痛	a 侵害受容性疼痛	
		b 神経障害性疼痛	
		c 心理社会的要因による疼痛	
		d 口腔・顔面領域の疼痛	
	コ 中毒、放射線障害	a 中毒の発生要因・病態生理	
		b 放射線の影響	
	サ 医原病	a 検査・診断に伴う医原病	
		b 治療に伴う医原病	
2 口腔・顎顔面領域の疾患の病因・病態	ア 主な病因・病態	a 先天異常	
		b 歯・歯周組織の疾患	
		c 口腔粘膜の疾患	
		d 軟組織の疾患	
		e 顎骨・顎関節の疾患	
		f 唾液腺の疾患	
		g 口腔・顎顔面領域に症状を伴う全身疾患	

大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
	イ 歯の喪失に伴う変化・障害	a 口腔の変化	
		b 顎骨の変化	
		c 顔貌の変化	
		d 顎関節の変化	
		e 全身への影響	
3 個体の死	ア 概念		
	イ 判定		

総論Ⅳ 主要症候〔約4%〕

大項目	中項目	小項目	備考
1 全身の症候	ア 一般的症候		発熱、全身倦怠感、体重減少・増加、ショック、意識障害、失神、けいれん、めまい、脱水、浮腫
	イ 皮膚・粘膜系		発疹
	ウ 呼吸器・循環器系		呼吸困難、息切れ、喘鳴、チアノーゼ、動悸、胸痛、不整脈、血圧上昇・低下
	エ 消化器系		食思<欲>不振、悪心、嘔吐、下痢、黄疸
	オ 運動・骨格系、造血器系、免疫系		貧血、出血傾向
	カ 泌尿器・生殖器系		
	キ 心理、精神機能		認知症、睡眠障害
	ク 神経系、感覚器系		頭痛、高次脳機能障害
	ケ 内分泌系(代謝、栄養を含む)		低血糖
2 口腔・顎顔面の症候	ア 歯、歯髄、根尖歯周組織		
	イ 歯周組織		
	ウ 歯列、咬合		
	エ 口腔粘膜		
	オ 顎骨		
	カ 顎関節		
	キ 舌、軟組織、唾液腺、リンパ節		
	ク 顔面		
	ケ 口腔機能障害		開口・閉口障害、咀嚼障害、摂食嚥下障害、発声・構音・発語障害、味覚障害、感覚障害、口腔乾燥

総論Ⅴ 診察〔約7%〕

大項目	中項目	小項目	備考
1 診察総論	ア 医療面接		
	イ 診察の基本		
	ウ 全身の診察		
	エ 救急時の診察		
	オ 根拠に基づいた医療<EBM>		
	カ 評価の基本	a バイタルサイン	
		b 意識レベル	Japan coma scaleを含む
		c 重症度と緊急度	
2 小児への対応	ア 身体的特徴		
	イ 心理社会的特徴		
	ウ 診察の基本		
	エ 年齢に応じた対応		
	オ 発達障害のある小児への対応	a 自閉スペクトラム症[自閉症スペクトラム障害]<ASD>	
		b 注意欠如・多動症[注意欠陥多動性障害]<ADHD>	
		c 限局性学習症[学習障害<LD>]	
3 障害者への対応	ア 障害の概念		
	イ 障害の分類	a 身体障害	
		b 知的障害	
		c 精神障害	発達障害を含む
	ウ 行動調整		
	エ 診察		
	オ 歯科治療上留意すべき事項		
4 妊婦・授乳婦への対応	ア 身体的特徴		
	イ 心理社会的特徴		
	ウ 診察		
	エ 歯科治療上留意すべき事項		
	ア 診察	a 診察時の注意	
		b 既往歴・合併症の評価	
5 高齢者への対応	イ 機能評価	a 日常生活動作<ADL>	
		b 手段的日常生活動作<IADL>	
		c 認知機能	
		d 運動機能	
		e 摂食嚥下障害	
		f 要介護度	フレイルを含む
	ウ 栄養評価	a 栄養アセスメント	
		b 栄養支援チーム<NST>	

大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
6 全身疾患を有する者への対応	ア 留意すべき疾患	a 呼吸器疾患	肺炎、慢性閉塞性肺疾患<COPD>、喘息など
		b 循環器疾患	高血圧症、心疾患、脳血管疾患など
		c 消化器疾患	肝疾患など
		d 血液・造血器疾患	
		e 泌尿器・生殖器疾患	慢性腎不全など
		f 精神・行動の障害	認知症、統合失調症など
		g 神経・運動器疾患	Alzheimer型認知症、関節リウマチ、筋萎縮性側索硬化症など
		h 内分泌・代謝疾患	糖尿病、脂質異常症など
		i 感染症	結核、ウイルス性肝炎など
		j 悪性腫瘍	
	イ 身体的特徴		
	ウ 心理社会的特徴		
	エ 医療情報の収集		
	オ 診察		
	カ 医療連携、チーム医療		

総論Ⅵ 検査〔約13%〕

大項目	中項目	小項目	備考
1 口腔検査、顎口腔機能検査	ア 口腔検査	a 歯の硬組織の検査	
		b 歯髄・根管の検査	
		c 歯周組織検査	口腔清掃状態の検査を含む
		d 舌・口腔粘膜検査	
		e 歯列・咬合の検査	
		f 口臭検査	
	イ 顎口腔機能検査	a 下顎運動検査	
		b 顎関節・筋機能検査	筋電図検査を含む
		c 咀嚼機能検査	
		d 唾液・唾液腺検査	
		e 嚥下機能検査	
		f 発声・構音・発語検査	
		g 鼻咽腔閉鎖機能検査	
		h 感覚(味覚、体性感覚)の検査	
2 画像検査	ア エックス線画像の原理	a 電離放射線	電磁放射線、粒子放射線、放射能、放射性同位元素
		b 放射線の単位・測定	
	イ 画像検査における医療情報	a 医療画像システム<PACS>	画像情報DICOM規格、デジタル画像処理
	ウ 医療放射線被曝の防護と管理	a 正当化、最適化、線量限度	被曝低減3原則
		b 患者と医療従事者の放射線防護	医療被曝、職業被曝、公衆被曝
	エ エックス線単純撮影	a コントラストと分解能	
		b 口内法エックス線検査	
		c パノラマエックス線検査	
		d 顎顔面頭蓋部エックス線検査	
	オ CT	a 原理、特徴、適応	造影CT、歯科用コーンビームCT
	カ MRI	a 原理、特徴、適応	T1強調像、T2強調像、プロトン密度強調像、脂肪抑制像、造影MRI
	キ シンチグラフィ	a 原理、種類、適応	シングルフォトンエミッションCT<SPECT>、ポジトロンエミッション断層撮像<PET>
	ク 超音波検査	a 原理、特徴、適応	ドプラ法
	ケ 画像検査の安全管理	a 強磁場・電磁波・超音波の生体作用	
		b 造影剤と副作用	
	コ 画像の鑑別診断	a 正常画像と主要疾患画像	
		b 全身疾患の画像所見	胸部エックス線写真

大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
3 検体検査	ア 検体検査	a 一般臨床検査	尿、糞便など
		b 血液学検査	血球検査、凝固・線溶系検査、血液型・輸血関連検査、赤沈など
		c 生化学検査	タンパク、生体色素、酵素、含窒素成分、糖代謝関連物質、脂質代謝関連物質、電解質など
		d 免疫血清学検査	炎症マーカー、自己抗体、血清学的診断など
		e 微生物学検査	染色法、培養検査、薬剤感受性など
		f 病理学検査	
		g 染色体・遺伝子検査	
	イ 検体の採取・保存・確認		個人情報管理
4 生体機能検査	ア 臓器機能検査	a 呼吸機能検査	パルスオキシメトリ、スパイロメトリ
		b 心機能検査	心電図、心臓超音波検査
		c 消化管機能検査	
		d 肝・胆道機能検査	色素排泄試験
		e 内分泌・代謝機能検査	
		f 腎機能検査	クレアチニンクリアランス、糸球体濾過率
	イ 電気生理学検査	a 脳波検査	
		b 筋電図・神経伝導検査	徒手筋力テスト
5 その他の検査	ア 皮膚検査	a 皮膚アレルギー検査	プリックテスト、皮内テスト、針反応テスト、パッチテスト
		b 皮膚知覚検査	二点識別検査、SWテスト
	イ 睡眠検査	a ポリソムノグラフィ	

総論Ⅶ 治療〔約16%〕

大項目	中項目	小項目	備考
1 治療の基礎	ア 治療計画	a 治療計画の立案・提示	インフォームド・コンセント
		b 治療の評価	主訴の改善
	イ 治療の種類	a キュアとケア	
		b 原因療法と対症療法	
		c 保存療法と外科療法	
		d 緩和療法	
	ウ ライフステージ別の治療	a 小児の治療	
		b 成人の治療	
		c 高齢者の治療	
	エ 全身管理に留意すべき疾患・対象	a 皮膚・粘膜系	
		b 呼吸器系	呼吸不全、気管支喘息、誤嚥性肺炎
		c 循環器系	心筋梗塞、狭心症、不整脈、高血圧症、深部静脈血栓症、心不全、心内膜炎、弁膜症
		d 消化器系	消化性潰瘍、急性・慢性肝炎、肝硬変
		e 血液・造血器・リンパ系	貧血、白血病、出血性素因
		f 泌尿器・生殖器系	慢性腎臓病
		g 精神系	認知症、統合失調症、うつ病
		h 神経系	脳内出血、脳梗塞、くも膜下出血、てんかん、Alzheimer病、Parkinson病
		i 内分泌系	糖尿病、骨粗鬆症、甲状腺疾患
		j 免疫・アレルギー	免疫不全、膠原病、アレルギー性疾患、後天性免疫不全症候群<AIDS>
		k 感染症	ウイルス感染症、細菌感染症、真菌感染症
		l 小児	
		m その他	アルコール・薬物依存症、妊婦、臓器移植患者、菌交代現象<菌交代症>
	オ 障害者の治療		
2 歯・歯周組織・咬合の治療	ア 基本的術式	a 歯の硬組織疾患の治療	
		b 歯内療法	
		c 歯周治療	
		d 歯の欠損の治療	
		e 不正咬合の治療	
3 救急医療	ア 一次救命処置	a 心肺蘇生	
		b AEDの使用	
		c 気道異物に対する対応	

大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
	イ 二次救命処置	a 高度な気道管理	
		b 静脈路確保と薬物療法	血管収縮薬、抗不整脈薬
		c 電氣的治療	
	ウ 誤飲・誤嚥に対する対応		
4 手術・周術期の管理、麻酔	ア 手術	a 手術の適応と時期	
		b 消毒と滅菌	標準予防策<standard precautions>
		c 切開法	
		d 止血法、縫合法	
		e 穿刺、切開排膿、ドレナージ	
		f 抜歯、口腔の小手術	偶発症を含む
		g 移植術、再建手術	
		h 創傷の治療	
	イ 周術期の管理	a 口腔環境の評価	
		b 全身状態の評価	
		c 全身的併発症、合併症	
		d 術前管理	
		e 術中管理	
		f 術後管理	疼痛管理、感染予防、栄養管理
		g 外科的侵襲に対する反応	
	ウ 麻酔	a 局所麻酔	局所麻酔薬、血管収縮薬
		b 全身麻酔	吸入麻酔薬、静脈麻酔薬、麻酔前投薬、筋弛緩薬とその拮抗薬、麻酔補助薬、日帰り全身麻酔
		c 術前・術中・術後管理とモニタリング	
		d 精神鎮静法	吸入鎮静法、静脈内鎮静法
5 緩和医療とターミナルケア	ア 疼痛管理とQOL<quality of life>	a 癌性疼痛	
		b ペインコントロール	オピオイド<医療用麻薬>
	イ 緩和ケア		
	ウ ターミナルケア		
6 リハビリテーション	ア リハビリテーションの概念		急性期、回復期、維持期<生活期>、自立生活支援
	イ リハビリテーションの技術	a 摂食嚥下障害のリハビリテーション	咀嚼障害、摂食嚥下障害
		b 発声・構音・発語障害のリハビリテーション	
		c 口腔機能管理	
7 放射線治療	ア 放射線治療の生物学的・物理学的基礎	a 放射線感受性、生物学的効果、放射線の治療効果	
	イ 口腔領域の放射線治療	a 治療の意義と目的	
		b 種類、適応、特徴	

大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
	ウ 放射線治療患者の有害反応と口腔管理	a 有害反応の種類と特徴	
		b 有害反応に対する口腔管理	
8 薬物療法	ア 薬物の選択	a 薬物療法の種類と特徴	
		b 薬効	薬物の作用部位・作用機序
		c 薬物動態	吸収、分布、代謝、排泄
	イ 用法と用量	a 投与経路と剤形の種類と特徴	
		b 用量と反応	
		c 服薬計画・指導	
		d 薬物の副作用・有害事象の種類・機序・対策	
		e 薬物適用の注意	薬物の連用・併用、薬物・食物・嗜好品との相互作用、薬効に影響を及ぼす身体的要因
	ウ 疾患に応じた薬物治療	a 鎮痛薬	
		b 抗炎症薬	
		c 抗感染症薬	
		d 抗腫瘍薬	
		e 代謝改善薬、ビタミン	
		f 止血薬、抗血栓薬	
		g 齦蝕予防薬	
9 その他の治療法	ア 物理療法		温熱、寒冷、電気、マッサージ、超音波治療
	イ 運動療法		筋機能療法
	ウ 凍結療法		
	エ レーザー療法		
	オ 免疫療法		
	カ 酸素療法		高気圧酸素療法
	キ IVR<Interventional Radiology>		動注化学療法、動脈塞栓術
	ク 食事・栄養療法		経口栄養、経腸栄養、経静脈栄養
	ケ 輸液・輸血療法		
	コ 精神療法		一般心理療法、カウンセリング、自律訓練法、行動療法、認知行動療法

総論Ⅷ 歯科材料と歯科医療機器〔約13%〕

大項目	中項目	小項目	備考
1 生体材料の科学	ア 材料の種類	a 有機材料	
		b 無機材料	
		c 金属材料	
		d 複合材料	
	イ 材料の性質	a 物理的性質	
		b 機械的性質	
		c 化学的性質	
		d 生物学的性質と生体安全性	
2 診療用器械・器具	ア 診療用器械	a 歯科用ユニット	
		b エアタービン	
		c マイクロモーター	
		d レーザー装置	
	イ 切削・研削工具、研磨材		
3 印象用材料	ア 非弾性印象材	a 酸化亜鉛ユージノール	
		b モデリングコンパウンド	
		c 印象用石膏、印象用ワックス	
	イ 弾性印象材	a アルジネート	
		b 寒天	
		c シリコーンゴム、ポリエーテルゴム	
	ウ 機能印象材		
	エ 印象用トレー		
	オ 咬合採得用材料		
4 模型用材料、ワックス	ア 歯科用石膏	a 普通石膏、硬質石膏、超硬質石膏	
	イ 歯科用ワックス	a インレーワックス	
		b パラフィンワックス、シートワックス、レディキャストイングワックス、スティッキーワックス、ユーティリティワックス	
5 成形修復・予防填塞・歯内療法用材料	ア 成形修復用材料	a コンポジットレジン	
		b グラスアイオノマーセメント、レジン添加型グラスアイオノマーセメント	
	イ 予防填塞用材料		
	ウ 歯内療法用材料	a 根管充填材	
		b 仮封材、裏層材、覆髄材	
6 歯冠修復・義歯用材料	ア 高分子材料	a 加熱重合型アクリルレジン、常温重合型アクリルレジン	
		b ポリスルフォン、ポリカーボネート	
	イ セラミックス	a 陶材	金属焼付用陶材を含む
		b ジルコニア、アルミナ、ガラスセラミックス	

大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
	ウ 金属材料	a 金合金	
		b 銀合金、金銀パラジウム合金	
		c 陶材焼付用合金	
		d コバルトクロム合金	
		e チタン、チタン合金	
		f ステンレス鋼、歯科用磁性合金	
	エ 複合材料	a 間接修復用コンポジットレジン	
	オ 人工歯		
	カ 義歯床用裏装材		軟質裏装材を含む
	キ 支台築造材		ファイバーポストを含む
7 成形技術・機器	ア レジンの成形技術・機器	a 加熱重合	
		b 常温重合(流し込み成形)	
		c 光重合	
		d 加熱・加圧成形	
	イ セラミックスの成形技術・機器	a 陶材の築盛・焼成	
		b 陶材と金属の接合	
	ウ 金属の成形技術・機器	a 鋳造工程	
		b 石膏系埋没材、リン酸塩系埋没材	
		c 鋳造精度、鋳造欠陥	
		d ろう付け、ろう材	
		e 溶接、鋳接	
		f 塑性加工、焼なまし	
		g 軟化熱処理、硬化熱処理	
	エ CAD/CAM		
8 接着処理・技術	ア 接着性モノマー		
	イ 歯質接着処理	a エナメル質被着面処理	
		b 象牙質被着面処理	
	ウ 歯科材料接着処理	a セラミックス被着面処理	
		b 金属被着面処理	
9 装着用材料	ア 合着・接着用セメント	a レジンセメント	
		b グラスアイオノマーセメント、レジン添加型グラスアイオノマーセメント	
		c ポリカルボキシレートセメント	
		d リン酸亜鉛セメント	
	イ 仮着用セメント		酸化亜鉛ユージノールセメント、EBAセメントを含む
10 歯科矯正用材料	ア 線材料		ステンレス鋼、コバルトクロム合金、ニッケルチタン合金、チタンモリブデン合金
	イ バンド、ブラケット、チューブ		

大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
	ウ エラスティック材、コイルスプリング		
	エ 接着用材料		
	オ 床用レジン、熱可塑性樹脂		
11 口腔インプラント・口腔外科・歯周治療用材料	ア 口腔インプラント用材料		
	イ 骨補填用材料		
	ウ 骨接合・顎骨再建用材料		
	エ 細胞遮断膜		

齒 科 医 学 各 論

各論 I 成長・発育に関連した疾患・病態〔約20%〕

大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
1 口腔・顎顔面の発育を障害する先天異常	ア 口腔・顎顔面の先天異常	a 顔面裂	
		b 口唇裂・口蓋裂	
	イ 遺伝性疾患(主に口腔に症状がみられる)	a Beckwith-Wiedemann症候群<EMG症候群>	
		b Marfan症候群	
		c Papillon-Lefèvre症候群	
		d エナメル質形成不全{症}	
		e 骨形成不全症	
		f 先天性表皮水疱症	
		g 先天性外胚葉形成不全<先天性外胚葉異形成症>	
		h 象牙質形成不全症	
		i 象牙質異形成症	
		j 低フォスファターゼ症	
	ウ 遺伝性疾患(主に頭蓋・顎顔面に症状がみられる)	a Apert症候群<尖頭合指症>	
		b Crouzon症候群<頭蓋顔面異骨症>	
		c Robin シーク エンス<Pierre Robin症候群>	
		d Treacher Collins症候群<下顎顔面異骨症>	
		e 鎖骨頭蓋骨異形成症<鎖骨頭蓋異骨症>	
		f 第一第二鰓弓症候群	Goldenhar症候群を含む
		g 軟骨無形成症	
	エ 染色体異常	a Down症候群	
		b Turner症候群	
2 歯の異常	ア 数の異常	a 過剰歯	
		b 先天欠如	
	イ 形態の異常	a 癒合歯、癒着歯、双生歯	
		b 中心結節	
		c 歯内歯	
		d 矮小歯	円錐歯
		e 巨大歯	
		f Hutchinsonian歯、Fournier歯	
		g タウロドント	
		h 歯根の異常	
		i 異所性エナメル質	エナメル滴、エナメル突起
	ウ 構造の異常	a 歯のフッ素症	
		b エナメル質形成不全{症}	Turnerの歯、エナメル質減形成症
		c 象牙質形成不全{症}	

大項目	中項目	小項目	備考
3 口腔・顎顔面の疾患	ア 歯の疾患	a 歯牙腫	
		b 異所萌出	
		c 埋伏歯	
		d 低位乳歯	
		e 早期萌出乳歯	先天歯、新生児歯
		f 萌出遅延	
	イ 口腔軟組織の疾患	a 口角びらん	
		b 先天性下唇瘻・口角瘻	
		c 萌出嚢胞	
		d 歯肉嚢胞	上皮真珠
		e Bednarアフタ	
		f 小帯異常	上唇小帯異常、舌小帯異常
		g 粘液嚢胞	粘液瘤、ラヌーラ、Blandin-Nuhn {腺}嚢胞<前舌腺嚢胞>
		h 巨舌症、小舌症	
		i Riga-Fede病	
	ウ ウイルス感染による疾患	a 単純疱疹	疱疹性歯肉口内炎、口唇ヘルペスを含む
		b 水痘・带状疱疹	
		c 手足口病	
		d ヘルパンギーナ	
		e 麻疹	Koplik斑
	エ 顎関節疾患	a 下顎頭欠損、関節突起発育不全	
		b 下顎頭肥大	
		c 顎関節疾患	顎関節強直症を含む
4 歯の外傷	ア 歯の外傷の状況と影響	a 乳歯と永久歯外傷の疫学	
		b 外傷の分類	
		c 外傷歯と後継永久歯への影響	
	イ 診察と診断、治療方針		
	ウ 乳歯・幼若永久歯の外傷の処置と経過		
	エ 小児の歯の外傷の予防	a スポーツによる歯の外傷の予防	
		b 児童虐待と歯の外傷	
5 歯列・咬合異常の予防	ア 歯列・咬合異常の要因		
	イ 保隙(静的咬合誘導)	a 保隙装置の分類	
		b 保隙装置の適応症	
		c 保隙装置の製作法	
	ウ 動的咬合誘導		
	エ 口腔習癖とその対応		

大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
6 不正咬合の病因・病態	ア 正常咬合の概念と成立の条件		
	イ 不正咬合の種類		
	ウ 不正咬合の分類		
	エ 不正咬合の原因		
	オ 不正咬合による障害		
7 不正咬合の診断	ア 診察		
	イ 検査		
	ウ 診断		抜歯・非抜歯の判定を含む
	エ 治療計画		
8 矯正力と固定	ア 狭義の矯正力		
	イ 顎整形力		
	ウ 生体反応		
	エ 固定		歯科矯正用アンカースクリューを含む
9 矯正装置	ア 唇舌側弧線装置	a リンガルアーチ<舌側弧線装置>	
		b トランスパラタルアーチ	
		c Nanceのホールディングアーチ	
		d タングクリブ	
	イ 顎外固定装置	a ヘッドギア	
		b チンキャップ<オトガイ帽装置>	
		c 上顎前方牽引装置	
	ウ マルチブラケット装置		
	エ 拡大装置	a 急速拡大装置	
		b クワドヘリックス装置	
	オ 機能的矯正装置	a アクチバトール	
		b バイオネーター	
		c Fränkel装置	
		d リップバンパー	
	カ 床矯正装置	a 咬合挙上板	
		b 咬合斜面板	
		c スライディングプレート	
	キ 保定装置	a Hawleyタイプリテーナー	
		b Beggタイプリテーナー<ラップアラウンドリテーナー、サーカムフェレンシャルタイプリテーナー>	
		c トゥースポジショナー	
		d 犬歯間保定装置	
10 不正咬合の治療	ア 不正咬合の予防		
	イ 乳歯列期・混合歯列期の不正咬合の治療		

大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
	ウ 永久歯列期の不正咬合の治療		
	エ 先天性疾患を伴う不正咬合の治療		
	オ 顎変形症の治療		
	カ 補綴・歯周治療との併用		
	キ 治療中の管理		
	ク 保定		
	ケ 偶発症		

各論Ⅱ 歯・歯髄・歯周組織の疾患〔約24%〕

大項目	中項目	小項目	備考
1 歯の硬組織疾患	ア 歯の硬組織疾患の病因と病態	a 齲蝕の病因	脱灰、再石灰化を含む
		b 齲蝕のリスクファクター	
		c tooth wear<歯の損耗>	咬耗症、摩耗症、酸蝕症、アブフラクション、くさび状欠損
		d 象牙質知覚過敏症	
		e 歯の変色・着色	
		f 歯の亀裂・破折	
	イ 歯の硬組織疾患の予防・管理	a 齲蝕の予防・管理	
		b 齲蝕の予防効果の評価	
		c 初期齲蝕の診断	
		d フッ化物応用	
		e 食生活指導	
		f 口腔清掃指導	
		g 歯の変色・着色予防	
	ウ 歯の硬組織疾患の治療	a 乳歯・幼若永久歯の歯冠修復法	
		b 永久歯の直接修復法	
		c 永久歯の間接修復法	
		d 窩洞形成法	
		e 象牙質・歯髄保護法	
		f 補修修復	
		g 歯の漂白	
		h 身体的・社会的・心理的要因と保存修復	
	エ 小児の歯の硬組織疾患	a 乳歯齲蝕	
		b 幼若永久歯齲蝕	
		c 齲蝕のリスクファクター	
		d 非齲蝕性硬組織疾患	
	オ 高齢者の歯の硬組織疾患	a 根面齲蝕	
		b 非齲蝕性硬組織疾患	
2 歯髄疾患、根尖性歯周疾患	ア 歯髄疾患・根尖性歯周疾患の病因と病態	a 歯髄疾患	
		b 根尖性歯周疾患	
		c 歯内-歯周疾患	
		d 歯の外傷	
		e 内部吸収、歯根外部吸収	
		f 根尖性歯周疾患が全身に及ぼす影響	

大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
	イ 歯髄疾患・根尖性歯周疾患の治療	a 歯髄保存療法	
		b 歯髄除去療法	
		c 根尖性歯周疾患の治療	緊急処置を含む
		d 根管処置	根管形成、根管の化学的清掃、根管貼薬、仮封
		e 根管充填	
		f 根未完成歯の治療	
		g 外科的歯内療法	
		h 内部吸収歯・歯根外部吸収歯の治療	
		i 外傷歯の治療	
		j 偶発症と安全対策	
	ウ 小児の歯髄疾患・根尖性歯周疾患	a 乳歯の歯髄疾患と治療	
		b 乳歯の根尖性歯周疾患と治療	
		c 幼若永久歯の歯髄疾患と治療	
		d 幼若永久歯の根尖性歯周疾患と治療	
	エ 高齢者の歯髄疾患・根尖性歯周疾患	a 高齢者の歯髄疾患と治療	
		b 高齢者の根尖性歯周疾患と治療	
3 歯周疾患	ア 歯周疾患の病因と病態	a 歯肉病変	
		b 歯肉病変のリスクファクター	
		c 歯周炎	
		d 歯周炎のリスクファクター	
		e 壊死性歯周疾患	
		f 咬合性外傷	
		g 歯周組織の膿瘍	
		h 歯肉退縮	
		i 歯周-歯内病変	
		j 歯周疾患と健康の関わり	
	イ 歯周疾患の予防・管理	a 歯肉炎の予防・管理	
		b 歯周炎の予防・管理	
		c 予防効果の評価	
		d 口腔清掃指導	
		e 禁煙指導・支援	
		f 生活習慣指導	

大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
	ウ 歯周疾患の治療	a 急性症状を有する歯周疾患への対応	
		b 歯周基本治療	
		c 咬合性外傷に対する治療	
		d 歯周外科治療(切除療法、組織付着療法、歯周組織再生治療)	エナメルマトリックスタンパク質
		e 歯周外科治療(歯周形成手術)	
		f 根分岐部病変の治療	
		g 口腔機能回復治療	
		h 薬物療法	
		i メインテナンス、SPT<supportive periodontal therapy>	
		j 全身疾患を有する者の歯周疾患治療	
	エ 小児期にみられる歯周疾患	a 小児の歯肉病変・歯周炎の特徴	
		b 小児の歯肉病変・歯周炎への対応	
	オ 高齢者が有する歯周疾患		

各論Ⅲ 顎・口腔領域の疾患〔約24%〕

大項目	中項目	小項目	備考
1 主として軟組織に関連する疾患の病態・診断・治療	ア 先天異常と変形を主徴とする疾患の病態・診断・治療	a 口唇裂・口蓋裂	鼻咽腔閉鎖不全、顔面裂、言語治療を含む
		b 口唇・頬部の異常	
		c 舌・口底の異常	
		d 歯肉・口蓋の異常	
		e 小帯の異常	
	イ 軟組織の損傷の病態・診断・治療	a 口腔軟組織の損傷	
		b 顔面軟組織の損傷	
	ウ 軟組織の炎症の病態・診断・治療	a 歯冠周囲炎<智歯周囲炎>	
		b 口腔軟組織の炎症	歯肉膿瘍、歯槽膿瘍、骨膜下膿瘍、蜂窩織炎<蜂巣炎>、組織隙の炎症、歯性扁桃周囲炎を含む
		c 所属リンパ節の炎症	
		d 歯性上顎洞炎	
		e 歯性全身感染症	菌血症、敗血症、歯性病巣感染、全身性炎症反応症候群<SIRS>、感染性心内膜炎
		f 肉芽腫性炎	放線菌症、口腔結核、口腔梅毒
	エ 軟組織に発生する嚢胞の病態・診断・治療	a 歯原性嚢胞	
		b 非歯原性嚢胞	
	オ 軟組織に発生する腫瘍および腫瘍類似疾患	a 歯原性良性腫瘍	
		b 非歯原性良性腫瘍	
		c 口唇癌	
		d 舌癌	
		e 頬粘膜癌	
		f 口蓋癌	
		g 歯肉癌	
		h 口底癌	
		i 上顎洞癌	
		j 軟組織の肉腫	
		k 白血病	
		l 悪性リンパ腫	
		m 悪性黒色腫	
		n 前癌病変、前癌状態	上皮異形成<上皮性異形成>
		o 腫瘍類似疾患	エプーリス、義歯性線維腫、薬物性歯肉増殖症など
	カ 腫瘍・腫瘍類似疾患に対する診断・治療	a 外科療法	再建術、頸部郭清術を含む
		b 化学療法	分子標的薬を含む
		c 放射線療法	
		d 免疫療法	

大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
	キ がん治療患者の管理	a がんの告知	
		b 治療時の患者管理・生活習慣指導	口腔衛生管理、口腔ケアを含む
		c 社会復帰	
		d 末期癌患者の管理	
		e 緩和医療	
	ク 口腔粘膜疾患の病態・診断・治療	a ウイルス性口内炎	単純疱疹、带状疱疹、手足口病、ヘルパンギーナを含む
		b 天疱瘡、類天疱瘡	
		c 多形〔滲出性〕紅斑	
		d 薬物性口内炎	粘膜・皮膚・眼症候群〈Stevens-Johnson症候群〉、中毒性表皮壊死剥離症〈TEN〉を含む
		e 全身性エリテマトーデス〈SLE〉	
		f 慢性再発性アフタ	
		g Behçet病	
		h 壊死性潰瘍性歯肉口内炎、壊疽性口内炎	
		i 口腔扁平苔癬	
		j 口腔カンジダ症〈鵝口瘡〉	
		k 白板症	
		l 紅板症	
		m 内因性色素沈着	メラニン色素沈着症、Peutz-Jeghers症候群、Addison病などを含む
		n 外因性色素沈着	
		o 色素性母斑	
		p von Recklinghausen病〈神経線維腫症Ⅰ型〉	
		q 口腔乾燥症	
		r 貧血を伴う舌炎	鉄欠乏性貧血、Plummer-Vinson症候群、Hunter舌炎を含む
		s 溝〔状〕舌	
		t 毛舌	黒毛舌を含む
		u 地図状舌	
		v 正中菱形舌炎	
		w 肉芽腫性口唇炎	Melkersson-Rosenthal症候群を含む
		x 口角炎、口角びらん	
2 主として硬組織に関連する疾患の病態・診断・治療	ア 顎顔面の変形をきたす疾患・病態・診断	a 顎変形症	
		b 下顎頭欠損	
		c 顎顔面に異常をきたす骨系統疾患・症候群	茎状突起過長症、筋突起過長症を含む

大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
	イ 顎顔面骨の変形に対する治療	a 顎矯正手術	
		b 補綴前外科手術	
		c 骨移植術<骨増量術>	上顎洞底挙上術
		d 骨延長術	
		e 下顎頭形成術	
	ウ 歯・歯槽骨・顎骨・顔面骨の損傷の病態・診断・治療	a 歯の亀裂・破折・脱臼	歯の再植を含む
		b 歯槽骨骨折	
		c 下顎骨骨折	関節突起骨折を含む
		d 上顎骨骨折	吹き抜け骨折を含む
		e 頬骨・頬骨弓骨折	吹き抜け骨折を含む
		f 鼻骨骨折	
		g 口腔上顎洞瘻	
	エ 歯槽骨・顎骨の炎症の病態・診断・治療	a 歯槽骨炎、顎骨炎	
		b 顎骨骨膜炎	
		c 顎骨骨髓炎	
		d 歯性上顎洞炎	
		e 放射線性骨壊死	
		f 薬剤関連顎骨疾患	薬剤関連顎骨壊死・壊疽・骨髓炎
		g 外歯瘻、内歯瘻	
		h 顎骨周囲軟組織の炎症	歯肉膿瘍、骨膜下膿瘍、顎骨骨膜炎、顎骨周囲炎
	オ 顎骨に発生する嚢胞性疾患の病態・診断・治療	a 歯原性嚢胞	
		b 非歯原性嚢胞	
	カ 顎骨に発生する腫瘍および腫瘍類似疾患	a 歯原性良性腫瘍	
		b 歯原性悪性腫瘍	
		c 非歯原性良性腫瘍	
		d 非歯原性悪性腫瘍	
		e 骨関連病変	外骨症、骨隆起を含む
		f 線維骨性病変	線維性{骨}異形成症、骨性異形成症、骨形成線維腫
		g 巨細胞性病変	
	キ 顎骨に発生する腫瘍・腫瘍類似疾患に対する診断と治療	a 顎骨腫瘍の外科療法	
		b 顎骨の再建	
		c 顎顔面補綴	
		d 顎顔面インプラント治療	

大項目	中項目	小項目	備考
3 主として機能に関連する疾患の病態・診断・治療	ア 唾液腺疾患の病態・診断・治療	a 発育異常	
		b 異所性唾液腺	
		c 唾液腺損傷	唾液瘻、Frey症候群、外来異物を含む
		d 唾液腺炎、唾液管炎	ウイルス性唾液腺炎を含む
		e Sjögren症候群	
		f 粘液嚢胞	粘液瘤、ラヌーラ、Blandin-Nuhn{腺}嚢胞<前舌腺嚢胞>
		g 良性腫瘍	
		h 悪性腫瘍	
		i 腫瘍類似疾患	
		j IgG4関連疾患	
		k 唾石症	
		l 口腔乾燥症	放射線障害、薬物副作用を含む
		m 流涎症	
	イ 神経疾患の病態・診断・治療	a 三叉神経痛	
		b 三叉神経麻痺	
		c 顔面神経麻痺	
		d 舌咽神経痛	
		e 舌下神経麻痺	
		f 非菌原性菌痛	
		g 外傷性神経障害	
		h 顔面けいれん	
		i 帯状疱疹後神経痛	
		j 舌痛症	
	ウ 顎関節・咀嚼筋疾患の病態・診断・治療	a 下顎頭欠損、関節突起発育不全	
		b 下顎頭肥大	
		c 関節突起骨折	
		d 顎関節脱臼	
		e 非感染性顎関節炎	外傷性{顎}関節炎を含む
		f 感染性顎関節炎	急性化膿性顎関節炎
		g 顎関節リウマチ<リウマチ性顎関節炎>	
		h 痛風性顎関節炎	
		i 腫瘍および腫瘍類似疾患	骨軟骨腫、滑膜性骨軟骨腫症を含む
		j 顎関節強直症	
		k 顎関節症	咀嚼筋痛障害、顎関節痛障害、顎関節円板障害、変形性顎関節症
		l 咀嚼筋腱・腱膜過形成	

大項目	中項目	小項目	備考
4 主として全身に関連する疾患の病態・診断・治療	ア 口腔・顎顔面に異常をきたす骨系統疾患・症候群	a Apert症候群<尖頭合指症>	
		b Beckwith-Wiedemann症候群<EMG症候群>	
		c Crouzon症候群<頭蓋顔面異骨症>	
		d Down症候群	
		e Gardner症候群	
		f Marfan症候群	
		g McCune-Albright症候群<多骨性線維性{骨}異形成症>	
		h Melkersson-Rosenthal症候群	
		i Peutz-Jeghers症候群	
		j Ramsay Hunt症候群<Hunt症候群>	
		k Robinシークエンス<Pierre Robin症候群>	
		l Sturge-Weber症候群	
		m Treacher Collins症候群<下顎顔面異骨症>	
		n von Recklinghausen病<神経線維腫症Ⅰ型>	
		o 基底細胞母斑症候群	
		p 口腔・顔面・指趾症候群<OFD症候群>	
		q 骨形成不全症	
		r 鎖骨頭蓋骨異形成症<鎖骨頭蓋異骨症>	
		s 第一第二鰓弓症候群	Goldenhar症候群を含む
		t 大理石骨病	
	イ 口腔症状を呈するウイルス感染症	a ヒト免疫不全ウイルス<HIV>感染症	後天性免疫不全症候群<AIDS>、毛状<様>白板症を含む
		b 風疹	
		c 麻疹	
		d 水痘・帯状疱疹	Ramsay Hunt症候群<Hunt症候群>を含む
		e 単純疱疹	
		f 手足口病	
		g ヘルパンギーナ	
	ウ 口腔症状を呈する細菌感染症	a 梅毒	
		b 破傷風	
		c 結核	
	エ 口腔症状を呈するアレルギー性疾患・免疫異常	a 金属アレルギー	口腔苔癬様病変を含む
		b アレルギー性紫斑病	
		c Quincke浮腫	遺伝性血管性浮腫を含む
		d 移植片対宿主病<GVHD>	

大項目	中項目	小項目	備考
	オ 口腔症状を呈する自己免疫疾患	a 天疱瘡、類天疱瘡	
		b 関節リウマチ	
		c 全身性エリテマトーデス<SLE>	
		d 特発性血小板減少性紫斑病<免疫性血小板減少性紫斑病><ITP>	
		e 悪性貧血	
	カ 口腔症状を呈する内分泌障害、代謝障害	a 先端巨大症<下垂体性巨人症>	
		b 成長ホルモン分泌不全性低身長<下垂体性小人症>	
		c 甲状腺機能亢進症	
		d 甲状腺機能低下症	
		e 副甲状腺機能亢進症	
		f Cushing病、Cushing症候群	
		g アルドステロン症	
		h Addison病	
		i 糖尿病	
		j アミロイドーシス	
		k 鉄欠乏性貧血	Plummer-Vinson症候群を含む
	キ 口腔症状を呈する栄養障害	a くる病	
		b 壊血病	
	ク 赤血球系疾患	a 貧血	鉄欠乏性貧血、再生不良性貧血を含む
		b 赤血球増多症	
	ケ 白血球系疾患	a 白血病	
		b 無顆粒球症	
		c 悪性リンパ腫	
		d 多発性骨髄腫	
	コ 出血性素因	a Osler病	
		b アレルギー性紫斑病	
		c 特発性血小板減少性紫斑病<免疫性血小板減少性紫斑病><ITP>	
		d 血小板無力症	
		e 血友病A・B	
		f 播種性血管内凝固症候群<DIC>	
	サ 赤血球系疾患・白血球系疾患・出血性素因の診断と患者に対する観血的治療、歯科治療時の留意点		
	シ 口腔・顎顔面領域に関連して現れる精神・心身医学的病態	a 気分障害	抑うつ障害、双極性障害、心的外傷およびストレス因関連障害など
		b 不安障害	
		c 身体表現性障害	身体症状症
		d 心身症	

大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
	ス 全身管理に留意すべき疾患・状態	a 呼吸器疾患	
		b 循環器・脳血管疾患	先天性心疾患、高血圧緊急症を含む
		c 消化器疾患	
		d 血液・造血器疾患	骨髄異形成症候群を含む
		e 泌尿器・生殖器疾患	
		f 精神・心身医学的疾患	
		g 神経・運動器疾患	
		h 内分泌疾患	
		i 代謝性疾患	
		j 免疫疾患	
		k 妊娠	
	セ 歯科治療時の患者管理・麻酔管理	a 術前管理	
		b 術中管理	
		c 術後管理	
	ソ 歯科における全身的偶発症とその対応	a 血管迷走神経反射	
		b 過換気症候群	
		c 局所麻酔薬中毒	
		d アナフィラキシーショック	
		e 血管収縮薬による反応	
		f メトヘモグロビン血症	
		g 誤飲、誤嚥	
		h 合併する全身疾患の増悪	
5 顎・口腔領域の疾患の予防	ア 生活習慣指導	a がんの予防	
		b 栄養障害の予防	
		c 顎関節疾患の予防	
		d 損傷の予防	マウスガードを含む
		e 口臭の予防	
		f 味覚障害の予防	
		g 口腔乾燥症の予防	
		h 口腔粘膜疾患の予防	禁煙指導・支援

各論Ⅳ 歯質・歯・顎顔面欠損と機能障害〔約24%〕

大項目	中項目	小項目	備考
1 病態	ア 咬合・咀嚼障害		
	イ 摂食嚥下障害		
	ウ 構音・発語障害		
	エ 審美障害		
	オ 心理社会的障害		
	カ 口腔機能障害・口腔顔面痛		
	キ ブラキシズム		
	ク 睡眠時無呼吸		
2 診察、検査、診断	ア 診察		
	イ 検査と評価	a 形態的・審美的評価	
		b 機能的評価	
		c 力学的評価	
		d 身体社会的・心理的評価	
		e 栄養評価	
		f 補綴装置の評価	生物学的要件、機能的要件、形態的要件、力学的要件、咬合力の支持様式、咬合様式、審美的要件、材料的要件を含む
		g 研究用模型による検査	
		h 口腔衛生状態の評価	
		i その他	
	ウ 診断		回復の到達目標を含む
	エ 治療計画の立案		治療法の選択を含む
3 クラウンブリッジによる治療	ア クラウンブリッジの設計		補綴装置の選択、診断用ワックスアップを含む
	イ 臨床操作	a 前処置	
		b 支台歯形成	
		c 支台築造	
		d 印象採得	口腔内スキャナー
		e プロビジョナルレストレーション	
		f 顎間関係の記録	
		g 患者情報の記録と伝達	
		h 口腔内試適	調整方法
		i 装着	装着材料
	ウ 技工操作	a ロストワックス法による製作	作業用模型の製作、ワックスパターン形成、埋没、鋳造、ろう付け、熱処理、前装方法、研磨
		b CAD/CAMによる製作	
4 部分床義歯による治療	ア 義歯の設計	a 設計の原則	
		b 義歯の構成要素	
		c オーバーデンチャー	

大項目	中項目	小項目	備考
	イ 臨床操作	a 前処置	
		b 印象採得	
		c 顎間関係の記録	
		d フレームワークの試適	
		e ろう義歯の試適	
		f 装着	
	ウ 技工操作	a 個人トレーの製作	
		b 作業用模型の製作	
		c 咬合器装着・調節	
		d サベイング、設計線の記入	
		e フレームワークの製作	
		f 人工歯の選択・排列・削合	
		g 歯肉形成	
		h 埋没、重合	
		i 咬合調整(削合)と仕上げ	
5 全部床義歯による治療	ア 義歯の設計		オーバーデンチャーを含む
	イ 臨床操作	a 前処置	
		b 印象採得	
		c 顎間関係の記録	
		d ろう義歯の試適	
		e 装着	
	ウ 技工操作	a 個人トレーの製作	
		b 作業用模型の製作	
		c 咬合器装着・調節	
		d 人工歯の選択・排列・削合	咬合様式を含む
		e 歯肉形成	
		f 埋没、重合	
		g 咬合調整(削合)と仕上げ	
6 インプラント義歯による治療	ア インプラント義歯の設計	a 上部構造の設計	診断用セットアップ、診断用ステントの製作、インプラント体の選択
		b 埋入計画の立案	
	イ 臨床操作	a インプラント埋入手術(一次手術)	一回法、二回法、コンピュータ支援手術、骨造成(骨増生)などの付随手術
		b オッセオインテグレーションの獲得	初期固定(一次固定)、生物学的固定(二次固定)
		c 二次手術	
		d 印象採得	オーブントレー法、クローズドトレー法
		e プロビジョナルレストレーション	荷重時期の選択
		f 顎間関係の記録	
		g 患者情報の記録と伝達	
		h 装着	口腔内試適と装着

大項目	中項目	小項目	備考
	ウ 技工操作	a セメント固定式上部構造の製作	既製アバットメント、カスタムアバットメント
		b スクリュー固定式上部構造の製作	
		c インプラントオーバーデンチャーの製作	アタッチメントを含む
7 特殊な装置による治療	ア 顎顔面補綴装置		
	イ オーラルアプライアンス		オクルーザルアプライアンス、OSAS治療用口腔内装置、下顎前方牽引(保持)装置、ナイトガード
	ウ 摂食嚥下補助床		舌接触補助床を含む
	エ 構音補助床		軟口蓋挙上装置、スピーチエイドを含む
8 指導と管理	ア 口腔衛生指導		禁煙指導・支援、インプラント一次手術前の指導と管理を含む
	イ 補綴装置に対する指導		義歯の清掃・管理、支台歯・インプラントの清掃・管理、睡眠中の管理を含む
	ウ 口腔機能向上に関する指導		機能障害の予防を含む
	エ 栄養指導	a 口腔機能に応じた栄養指導	
	オ リコールとメインテナンス	a ホームケア、プロフェッショナルケア	
		b 残存組織の変化とその対応	リベース、リラインを含む
		c 咬合の変化とその対応	
		d 機能低下とその対応	
		e 補綴装置の破損とその対応	技工操作を含む
		f インプラント支持療法	
	カ 治療効果の評価		

各論Ⅴ 高齢者等に関連した疾患・病態・予防ならびに歯科診療〔約8%〕

大項目	中項目	小項目	備考
1 高齢者等の歯科診療で注意すべき疾患・病態・症候	ア 運動障害	a 脳血管疾患	
		b 関節疾患	
		c 骨折	
		d 廃用症候群	
		e 神経・筋疾患	Parkinson病
	イ 認知障害	a 認知症	
	ウ 摂食嚥下障害	a 摂食行為・食物認知障害	
		b 咀嚼障害	
		c 嚥下障害	
	エ 誤嚥性肺炎	a 呼吸器疾患	
		b 胃食道逆流症	
2 老化による口腔・顎顔面領域の症候	ア 機能的変化	a 咀嚼機能	
		b 摂食嚥下機能	
		c 発声・構音機能	
		d 感覚機能	
		e 反射機能	
	イ 形態的变化	a 歯、歯列	
		b 歯槽骨、顎骨	
		c 口腔粘膜、舌、唾液腺	口腔乾燥
		d 顎関節、筋	
3 高齢者等に関連した臨床評価・診断・治療計画	ア 全身状態の評価	a 身体状態	日常生活動作<ADL>、手段的日常生活動作<IADL>、Barthel Index<BI>、Functional Independence Measure<FIM>
		b 認知機能	改定長谷川式簡易知能評価スケール<HDS-R>、Mini-Mental State Examination<MMSE>、Functional Assessment Staging<FAST>
		c 心理	
		d 行動	
		e 栄養	
		f 服用薬物	
	イ 口腔機能の評価	a 摂食嚥下機能	VF、VE、頸部聴診法、咳テスト、咀嚼機能検査、舌圧検査、オーラルディアドコキネシス、ブローイング時間、反復唾液嚥下テスト<RSST>、改訂水飲みテスト<MWST>、フードテスト
		b 発声・構音機能	
		c 唾液量	
		d 筋	

大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
	ウ 診断		
	エ 治療計画の策定		
4 高齢者等に関連した予防と管理	ア 歯の喪失予防	a 口腔保健指導	
	イ フレイル予防のための歯科保健管理	a 口腔衛生管理	
		b 口腔機能管理	
		c 栄養管理	
5 高齢者等に関連した歯科診療	ア 歯および歯周疾患への対応		
	イ 歯の欠損への対応		
	ウ 軟組織疾患への対応		
	エ 口腔・顎顔面の硬組織疾患への対応		
	オ 構音障害に対する対応		
	カ 周術期口腔機能管理		
6 摂食嚥下障害への対応(摂食機能療法)	ア 治療的アプローチ	a 間接訓練	
		b 直接訓練	
	イ 代償的アプローチ		
	ウ 環境改善的アプローチ		
	エ 心理的アプローチ		
	オ 栄養療法		
7 障害者の歯科治療	ア 基本的対応	a 一般的対応	
		b 行動調整	
	イ 歯科治療上留意すべき事項	a 環境への適応性	
		b 姿勢・異常反射	
		c 呼吸管理	
	ウ 口腔疾患の治療		
	エ 口腔保健指導		
8 在宅医療、在宅支援	ア 訪問歯科診療	a 訪問歯科診療器材	
		b 保健指導	
	イ 多職種協働		

主な検査項目の表記

主な検査項目の表記

出題に際して、主な検査項目の表記は以下に準拠する。また、略して表記することもある。ただし、出題範囲を示すものではない。

1 一般臨床検査

分 類	項 目
尿 検 査	肉眼的所見
	尿量
	比重
	浸透圧
	pH
	尿タンパク
	尿糖
	ウロビリノゲン
	ケトン体
	ビリルビン
	アミラーゼ
	尿潜血
	尿沈渣所見
	細菌検査
	尿細胞診
	白血球反応
	妊娠反応
	微量アルブミン
	レジオネラ抗原
	肺炎球菌抗原
	【例】尿所見：尿タンパク 1+、糖(－)、沈渣に赤血球10～20/1視野、白血球多数/1視野、赤血球円柱+。
糞 便 検 査	肉眼的所見
	顕微鏡検査(虫卵など)
	便潜血反応、免疫学的便潜血検査
	便細菌検査
喀 痰 検 査	肉眼的所見
	細胞診
	細菌検査

分 類	項 目
脳 脊 髄 液 検 査	初圧
	圧(Queckenstedt現象)
	肉眼的所見
	細胞数(種類と比率)
	タンパク定量
	糖定量
	IgG%
	ミエリン塩基性タンパク
	クロール定量
	細菌検査
	細胞診
	オリゴクローナルバンド
穿 刺 液 検 査	肉眼的所見
	比重
	タンパク定量
	細胞数(種類)
	細胞診
	細菌検査

2 血液学検査

分 類	項 目
赤 沈	赤沈
血 球 検 査	赤血球
	ヘモグロビン<Hb>
	ヘマトクリット<Ht>
	平均赤血球容積<MCV>
	平均赤血球ヘモグロビン<MCH>
	平均赤血球ヘモグロビン濃度<MCHC>
	網赤血球
	白血球

分 類	項 目
血球検査	白血球分画
	血小板
	末梢血・骨髓血塗抹
	【例】血液所見：赤血球396万、 Hb 12.9g/dL、Ht 38%、網赤血球1.2%、 白血球7,800(桿状核好中球12%、分葉核 好中球51%、好酸球2%、好塩基球1%、 単球6%、リンパ球28%)、血小板20万。
凝固・線溶・血小板機能検査	出血時間
	プロトロンビン時間<PT>(PT-INRを含む)
	活性化部分トロンボプラスチン時間 <APTT>
	血漿アンチトロンビン
	トロンビン・アンチトロンビン複合体 <TAT>
	血漿フィブリノゲン
	血清FDP
	Dダイマー
	プラスミン・プラスミンインヒビター複 合体<PIC>
	血小板凝集能
検査 関する 血液に	赤血球浸透圧抵抗試験
	Ham試験
連 輸 血 関 連 検 査	血液型
	交差適合試験<クロスマッチ>

3 生化学検査

分 類	項 目
タン パ ク ・ タ ン パ ク 分 画	総タンパク<TP>
	タンパク分画
	アルブミン<Alb>
	$\alpha_1 \cdot \beta_2$ -マイクログロブリン
	IgG、IgA、IgM、IgE
	フェリチン
	心筋トロポニンT
	心筋トロポニンI
色 生 素 体	総ビリルビン
	直接ビリルビン

分 類	項 目
酵 素 、 ア イ ソ ザ イ ム	AST
	ALT
	LD<LDH>
	ALP
	γ -GT< γ -GTP>
	コリンエステラーゼ<ChE>
	アミラーゼ
	リパーゼ
	CK
	CK-MB
含 窒 素 成 分	アンジオテンシン変換酵素<ACE>
	ペプシノゲン
含 窒 素 成 分	尿素窒素<BUN>
	クレアチニン<Cr>
	尿酸<UA>
	アンモニア
糖 代 謝 関 連	{随時}血糖
	空腹時血糖<FBS>
	ブドウ糖負荷試験<OGTT>
	HbA1c
脂 質 代 謝 関 連	総コレステロール<TC>
	トリグリセリド<TG>
	HDLコレステロール
	LDLコレステロール
電 解 質 ・ 酸 塩 基 平 衡	Na
	K
	Cl
	Ca
	P
	Mg
	浸透圧
重 金 属 、 微 量 元 素	Cu
	Fe
	Zn
	総鉄結合能<TIBC>
	不飽和鉄結合能<UIBC>

分 類		項 目
ビ タ ミ ン		ビタミンB ₁
		ビタミンB ₁₂
		葉酸
ホル モ ン	下 垂 体	甲状腺刺激ホルモン<TSH>
		成長ホルモン<GH>
		黄体化ホルモン<LH>
		副腎皮質刺激ホルモン<ACTH>
		卵胞刺激ホルモン<FSH>
		プロラクチン<PRL>
		抗利尿ホルモン、バソプレシン<ADH>
	甲 状 腺	遊離トリヨードサイロニン<FT ₃ >
		遊離サイロキシン<FT ₄ >
		サイログロブリン
		カルシトニン
	副 上 甲 状 腺 体	副甲状腺ホルモン<PTH>
	副 腎	コルチゾール
		アルドステロン
		17 α -ヒドロキシprogテストロン
		アドレナリン
		ノルアドレナリン
	消 化 管	ガストリン
	膵 島	インスリン
		グルカゴン
		Cペプチド<CPR>
	腎 臓	血漿レニン活性<PRA>
		アンジオテンシン
		エリスロポエチン
	性 腺 ・ 胎 盤	エストラジオール<E ₂ >
		エストリオール<E ₃ >
		progテストロン
		テストステロン
		絨毛性ゴナドトロピン<hCG>
	心 臓	心房性ナトリウム利尿ペプチド<hANP>
		脳性ナトリウム利尿ペプチド<BNP>

分 類		項 目
ホル モ ン	尿 中 ホル モ ン	5-ヒドロキシインドール酢酸<5-HIAA>
		遊離コルチゾール
		カテコラミン
		メタネフリン・ノルメタネフリン
		バニルルマンデル酸<VMA>
腫 瘍 マ ー カ ー		α -フェトプロテイン<AFP>
		CEA
		CA19-9
		CA125
		SCC
		PSA
マ ー カ ー	線 維 化	KL-6

4 免疫血清学検査

分 類		項 目
マ ー カ ー	炎 症	C反応性タンパク<CRP>
	感 染	プロカルシトニン
感 染 の 抗 原 ・ 抗 体		梅毒血清反応
		Weil-Felix反応
		ASO
		トキソプラズマ抗体
		寒冷凝集反応
		マイコプラズマ抗体
		ウイルス血清反応
		β -D-グルカン
		HTLV-1抗体
		HIV抗体
		HBs抗原、HBs抗体、HBc抗体
		HCV抗体
自 己 抗 体		リウマトイド因子<RF>
		抗CCP抗体
		MPO-ANCA
		PR3-ANCA
		抗核抗体

分 類	項 目
自己抗体	抗ssDNA抗体
	抗dsDNA抗体
	抗セントロメア抗体
	抗アミノアシルtRNA合成酵素抗体<抗ARS抗体>
	抗RNP抗体
	抗Sm抗体
	抗SS-A抗体
	抗SS-B抗体
	抗Jo-1抗体
	抗Scl-70抗体
	抗ミトコンドリア抗体
	抗RNAポリメラーゼⅢ抗体
	抗平滑筋抗体
	抗サイログロブリン抗体
	抗甲状腺ペルオキシダーゼ<TPO>抗体
	抗TSH受容体抗体<TRAb>
	抗GAD抗体
	抗インスリン抗体
	直接・間接Coombs試験
	抗アクアポリン4抗体
	抗アセチルコリン受容体抗体
	抗デスモグレイン1抗体、抗デスモグレイン3抗体
	抗BP180抗体
タンパク免疫	免疫電気泳動
	Bence Jonesタンパク
アレルギーに関する検査	アレルギー検査
	IgE、特異的IgE 皮膚反応(パッチテスト、プリックテスト、皮内反応)
補体	血清補体価(CH ₅₀)、C3、C4
	免疫複合体
食菌能検査・細胞免疫	リンパ球表面抗原検査
	CD4/8比
	好中球機能検査
	リンパ球刺激試験
	ツベルクリン反応

分 類	項 目
免疫移植	組織適合検査 【例】HLA-B27

5 微生物学検査

分 類	項 目
病原体検査	細菌検査(塗抹、培養、同定、薬剤感受性試験)
	結核・抗酸菌検査(塗抹、Gaffky号数、培養、感受性試験、核酸検査)
	スピロヘータ
	リケッチア
	クラミジア
	マイコプラズマ
	ウイルス
	真菌
	原虫
	寄生虫
	核酸検査

注) 細菌の学名はイタリック体で、ウイルスはローマン体で表記。

【例】 *Staphylococcus aureus*
poliovirus

6 病理学検査

分 類	項 目
光顕・電顕標本	
染色法	Hematoxylin-eosin染色<H-E染色> 【例】生検組織のH-E染色標本
	PAS染色 【例】生検組織のPAS染色標本
	PAM染色
	SudanⅢ染色
	Congo-Red染色
	Gram染色 【例】喀痰のGram染色標本
	Ziehl-Neelsen染色

分 類	項 目
染色法	Grocott染色
	May-Giemsa染色
	【例】骨髓血塗抹May-Giemsa染色
	Papanicolaou染色
	免疫組織化学
	酵素組織化学
	Gomori-Trichrome染色

7 生体機能検査

分 類	項 目
動脈血ガス分析	pH
	PaCO ₂
	PaO ₂
	HCO ₃ ⁻
	BE
	【例】動脈血ガス分析(room air) : pH 7.41、PaCO ₂ 41 Torr、PaO ₂ 83 Torr、 HCO ₃ ⁻ 25 mEq/L。
呼吸機能	%VC
	FEV ₁ %
	経皮的動脈血酸素飽和度<SpO ₂ >
心機能	{12誘導}心電図検査
	Holter心電図検査
	運動負荷心電図検査
	心臓カテーテル検査
消化器系	唾液分泌検査
	胃液検査
	食道・胃24時間pHモニタリング検査
	食道内圧検査
	肛門内圧検査
	BT-PABA試験
内分泌・代謝機能	インスリン負荷試験
	グルカゴン負荷試験
	ブドウ糖負荷試験
	絶食試験
	TRH負荷試験
	CRH負荷試験

分 類	項 目
内分泌・代謝機能	GHRH負荷試験
	LHRH負荷試験
	デキサメタゾン抑制試験
	水制限試験
	高張食塩水負荷試験
	ACTH試験
	甲状腺 ¹²³ I摂取率
	フロセミド負荷試験
	PTH負荷試験<Ellsworth-Howard試験>
	プロゲステロン負荷試験
	エストロゲン・プロゲステロン負荷試験
腎機能	ゴナドトロピン負荷試験
	クレアチニンクリアランス
	糸球体濾過率<GFR>
神経	レノグラム
	脳波検査
	針筋電図検査
	末梢神経伝導検査

8 栄養学検査

分 類	項 目
身体計測	身長
	体重
	Body Mass Index<BMI>
血液生化学検査	総タンパク<TP>
	アルブミン<Alb>
栄養評価	SGA
	MNA

9 口腔検査

分 類	項 目
歯・歯髄・根管の検査	視診
	透照診
	触診
	打診
	温度診
	麻酔診
	切削診
	歯髄電気診<電気歯髄診断>
	楔応力検査
	細菌培養検査
	レーザー蛍光強度測定
	根管長測定
	DMF
	CFI
	齲蝕リスク検査
口腔清掃状態の検査	OHI
	OHI-S
	PII
	O' LearyのPCR
	PHP
歯周組織・デンタルインプラント周囲組織の検査	動揺度検査
	歯周ポケット検査(デンタルインプラント周囲組織の検査を含む)
	GI
	BI
	SBI
	PMA Index
	GBI
	PDI
	RussellのPI
	CPI
	PPD
	CAL
	BOP
顎間関係の記録	安静空隙利用法<下顎安静位利用法>
	嚥下運動利用法
	発音利用法

分 類	項 目
顎間関係の記録	最大咬合力利用法
	習慣性閉口路利用法
	ゴシックアーチ描記法
	フェイスボウトランスファー
	下顎運動記録
唾液・唾液腺の検査	唾液分泌能検査{ガム試験、Saxonテストなどと表記}
	唾液成分検査
	唾液腺シンチグラフィ
口臭の検査	官能検査
	ガスクロマトグラフィー検査
	ガスセンサー検査

10 画像検査

分 類	検 査 名	画像名
エックス線撮影	口内法エックス線撮影	～画像 ＜写真＞
	二等分法エックス線撮影	
	平行法エックス線撮影	
	偏心投影法エックス線撮影	
	咬翼法エックス線撮影	
	咬合法エックス線撮影	～画像 ＜写真＞
	Waters法エックス線撮影	
	頭部後前方向エックス線撮影	
	頭部側方向エックス線撮影	
	正面・側面頭部エックス線規格撮影<正面・側面セファロ>	
	顎関節エックス線撮影	
	胸部エックス線撮影	
パノラマエックス線撮影		～画像 ＜写真＞
エックス線造影撮影	唾液腺造影検査	～像
	血管造影検査	

分 類	検 査 名	画像名
CT	単純・造影CT	単純・造影CT
	歯科用コーンビームCT<歯科用CBCT>	歯科用コーンビームCT<歯科用CBCT>
MR	単純・造影MRI	単純・造影MRI
超音波検査	超音波検査	～像
	ドプラ超音波検査	～像
核医学検査	骨シンチグラフィ	骨シンチグラム
	唾液腺シンチグラフィ	唾液腺シンチグラム
	シングルフォトンエミッションCT<SPECT>	シングルフォトンエミッションCT<SPECT>
	ポジトロンエミッション断層撮像<PET>	～像<PET>

11 顎口腔機能検査

分 類	項 目
咀嚼機能検査	咀嚼能力検査
	咬合力検査<咬合圧検査>
	咬合音検査
	筋電図検査
	舌圧検査
嚥下機能検査	嚥下造影検査<VF>
	嚥下内視鏡検査<VE>
	改訂水飲みテスト<MWST>
	反復唾液嚥下テスト<RSST>
	頸部聴診法
	フードテスト

分 類	項 目
発声・構音・発語検査	呼気持続時間の測定
	発声持続時間の測定
	発語明瞭度検査
	オーラルディアドコキネシス(単音節復唱検査、交互運動能力検査)
	パラトグラム検査
鼻咽喉閉鎖機能検査	ブローイング検査
	発声言語の聴覚判定
	鼻漏出検査
	鼻咽喉腔内視鏡検査
味覚検査	電気味覚検査
	濾紙ディスク法
	点滴法{滴下法、全口腔法などと表記}
皮膚知覚検査	痛覚検査
	触覚検査
	温度覚検査
	二点識別検査
睡眠検査	ポリソムノグラフィ

12 内視鏡検査

分 類	項 目
	{鼻咽喉腔内視鏡検査、顎関節腔内視鏡検査などと表記}

注) 検査名に下線がある場合は、下線部分を省いて画像名の欄の語を続ける。画像名の欄のないものは、波形名等として下線部分を省いて表記する。

【例】検査名… 超音波検査、心電図検査
画像名… 超音波像、心電図

索引

索引

A

Addison病 40, 44
ADHD 21
ADL 9, 13, 21, 49
AEDの使用 25
AIDS 6, 25, 43
Alzheimer型認知症 22
Alzheimer病 25
AMR 3
AMS 3
antimicrobial resistance..... 3
antimicrobial stewardship..... 3
Apert症候群 32, 43
ASD 21

B

Barthel Index 49
Beckwith-Wiedemann症候群.....
..... 32, 43
Bednarアフタ 33
Beggタイプリテーナー 34
Behçet病 40
BI 49
Blandin-Nuhn{腺}嚢胞 33, 42
BLS 8
BMI 16

C

CAD/CAM 29
CAD/CAMによる製作 46
COPD 22
Crouzon症候群 32, 43
CT 23
CT(単純、造影) 8
Cushing症候群 44
Cushing病 44

D

DIC 44

Down症候群..... 32, 43

E

EBAセメント..... 29
EBM..... 8, 21
EMG症候群..... 32, 43

F

FAST..... 49
FIM..... 49
Fournier歯..... 32
Fränkel装置..... 34
Frey症候群..... 42
Functional Assessment Staging
..... 49
Functional Independence Measure
..... 49

G

Gardner症候群..... 43
GCP..... 3
Goldenhar症候群..... 32, 43
GVHD..... 6, 43

H

Hawleyタイプリテーナー..... 34
HDS-R..... 49
HIV..... 43
Hunter舌炎..... 40
Hunt症候群..... 43
Hutchinson歯..... 32

I

IADL..... 21, 49
ICF..... 3
ICIDH..... 3
IgG4関連疾患..... 42
Interventional Radiology.... 27
ITP..... 44

IVR..... 27

J

Japan coma scale 21

K

Kaup指数 16
Koplik斑 33

L

LD 21

M

Marfan症候群 32, 43
McCune-Albright症候群 43
Melkersson-Rosenthal症候群
..... 40, 43
Mini-Mental State Examination
..... 49
MMSE 49
MRI 23
MWST 49

N

Nanceのホールディングアーチ ...
..... 34
NST..... 21

O

OFD症候群 43
OSAS治療用口腔内装置 48
Osler病 44

P

PACS 23
Papillon-Lefèvre症候群 32
Parkinson病 25, 49

PEG 9
PET 23
Peutz-Jeghers症候群 40, 43
Pierre Robin症候群 32, 43
Plummer-Vinson症候群 40, 44

Q

QOL 3, 13, 26
quality of life 3, 13, 26
Quincke浮腫 43

R

Ramsay Hunt症候群 43
Riga-Fede病 33
Robinシークエンス 32, 43
Rohrer指数 16
RSST 49

S

SIRS 39
Sjögren症候群 42
SLE 40, 44
SOAP 4
SPECT 23
SPT 38
standard precautions .. 3, 8, 26
Stevens-Johnson症候群 40
Sturge-Weber症候群 43
supportive periodontal therapy
..... 38
SWテスト 24

T

T1強調像 23
T2強調像 23
TEN 40
tooth wear 36
Treacher Collins症候群 .. 32, 43
Turner症候群 32
Turnerの歯 32

V

VE 49
VF 49
von Recklinghausen病 40, 43

あ

挨拶 7
アウトカム 8
アクシデント 3
悪性黒色腫 39
悪性腫瘍 22, 42, 49
悪性貧血 44
悪性リンパ腫 39, 44
アクチバトール 34
アタッチメント 48
圧痛 6
アナフィラキシーショック 45
アブフラクション 36
アミロイドーシス 44
アルコール・薬物依存症 25
アルジネート 28
アルドステロン症 44
アルミナ 28
アレルギー 25
アレルギー症状 8
アレルギー性疾患 9, 25, 43
アレルギー性紫斑病 43, 44
アレルギー反応 18
安全管理 3, 23
安全対策 37
安全と感染への配慮 6

い

医学・医療に関する人文・社会科学・自然科学・芸術などに関連する一般教養的知識や考え方 ..
..... 9
医学史 9
医科歯科連携 4
意義 7, 8
息切れ 6, 20
意義と目標 7, 8
医原病 18
医事衛生法規 12

維持期 26
意識障害 6, 20
意識障害の評価 8
意識状態 7
意識レベル 21
医事紛争 3
萎縮 5, 18
異常値と原因 7
異常反射 50
移植術 26
胃食道逆流症 49
移植片対宿主病 6, 43
異所性エナメル質 32
異所性唾液腺 42
異所萌出 33
一次救命処置 8, 25
一次固定 47
一次手術 47, 48
一回法 47
一般教養的事項 9
一般心理療法 27
一般的症候 6, 20
一般的対応 50
一般臨床検査 7, 24
遺伝子 4
遺伝子検査 24
遺伝性血管性浮腫 43
遺伝性疾患(主に口腔に症状がみ
られる) 32
遺伝性疾患(主に頭蓋・顎顔面に症
状がみられる) 32
医の倫理 3
医の倫理と歯科医師のプロフェッ
ションリズム 3
異物処理 18
医薬品、医療機器等の品質、有効
性及び安全性の確保等に関する
法律 3
医薬品医療機器による健康被害 .. 3
医薬品・医療機器の安全管理
..... 3
医薬品の臨床試験の実施の基準 ..
..... 3
医療安全対策 3
医療過誤 3
医療画像システム 23
医療関係職種 12
医療危機管理 3

医療機器の安全管理	3
医療協力	14
医療計画	12
医療経済と国民医療費	13
医療裁判	3
医療事故調査制度	3
医療事故と医療過誤	3
医療事故の発生要因	3
医療事故の防止	3
医療事故報告書	3
医療施設	12
医療者の安全管理	3
医療者の倫理	3
医療情報	23
医療情報の収集	7, 22
医療情報の収集・提供	7
医療政策	12
医療訴訟	3
医療チームの構成員と役割	4
医療と介護の連携	12
医療の質の確保	3
医療廃棄物処理	3
医療被曝	23
医療法	3
医療放射線被曝の防護と管理	23
医療保険	13
医療保障・社会福祉・介護保険関 連法規	12
医療面接	7, 21
医療用麻薬	26
医療連携	12, 22
胃瘻	9
因果関係の成立	14
インシデント	3
インシデントレポート	3
印象採得	46, 47
印象用材料	9, 28
印象用石膏	28
印象用トレイ	28
印象用ワックス	28
咽頭	16
咽頭弓	17
院内感染対策	3, 14
院内感染対策委員会	3
インフォームド・コンセント	3, 25
インプラント一次手術前の指導と 管理	48

インプラントオーバーデンチャー の製作	48
インプラント義歯による治療	47
インプラント義歯の設計	47
インプラント支持療法	48
インプラント体の選択	47
インプラント埋入手術	47
インレーワックス	28

う

ウイルス感染症	25, 43
ウイルス感染に伴う症候	6
ウイルス感染による疾患	33
ウイルス性肝炎	22
ウイルス性口内炎	40
ウイルス性唾液腺炎	42
齶蝕	6
齶蝕の疫学要因	14
齶蝕の病因	36
齶蝕の予防・管理	36
齶蝕の予防効果の評価	36
齶蝕のリスクファクター	36
齶蝕予防薬	27
うつ病	25
運動	16
運動・感覚機能	16
運動器疾患	22, 45
運動機能	15, 21
運動・骨格系	15, 20
運動障害	6, 49
運動の発達	5
運動麻痺	6, 8
運動療法	27

え

エアタービン	28
永久歯	16
永久歯の間接修復法	36
永久歯の直接修復法	36
永久歯列期の不正咬合の治療	35
栄養	7, 20, 49
栄養アセスメント	21
栄養管理	26, 50
栄養支援チーム	21
栄養指導	48
栄養障害	44

栄養障害の予防	45
栄養評価	21, 46
栄養療法	9, 27, 50
疫学	18, 33
疫学研究の倫理指針	3
疫学指標	14
疫学調査	14
疫学とその応用	14
疫学と調査	14
疫学の概念	14
疫学要因	14
壊死	5
壊死性潰瘍性歯肉口内炎	40
壊死性歯周疾患	37
壊疽性口内炎	40
エックス線画像の原理	23
エックス線撮影	8
エックス線撮影装置	8
エックス線単純撮影	23
エナメル質	16
エナメル質形成不全{症}	32
エナメル質減形成症	32
エナメル質被着面処理	29
エナメル滴	32
エナメル突起	32
エナメルマトリックスタンパク質	38
エプーリス	39
エラストティック材	30
遠隔転移	6
嚥下	16
嚥下機能検査	23
嚥下障害	49
炎症	5, 18
炎症に関与する細胞	18
炎症マーカー	24
円錐歯	32

お

黄疸	6, 20
嘔吐	6, 16, 20
オーバーデンチャー	46, 47
オーブントレー法	47
オーラルアプライアンス	48
オーラルディアドコキネシス	49
オクルーザルアプライアンス	48
悪心	20

オッズ比	8
オッセオインテグレーションの獲得	47
オトガイ帽装置	34
オピオイド	26
主な病因・病態	18
温熱	14, 27

か

加圧成形	29
外因	18
外因性色素沈着	40
壊血病	44
開口障害	6
開口・閉口障害	20
介護施設	12
外骨症	41
介護保険	13
介護保険法	3
介護予防	12, 13
外傷	3, 33
外傷歯と後継永久歯への影響... ..	33
外傷歯の治療	37
外傷性(顎)関節炎	42
外傷性神経障害	42
外傷の分類	33
外歯瘻	41
改造	17
改定長谷川式簡易知能評価スケール	49
改訂水飲みテスト	49
介入研究	14
概念	4, 18, 19
回復期	26
回復の到達目標	46
潰瘍	6
外来	8
外来異物	42
会話のマナー	7
カウンセリング	27
顔色	7
下顎位	16
下顎運動	7, 16
下顎運動検査	23
下顎顔面異骨症	32, 43
下顎骨骨折	41
下顎骨の成長の特徴	5

下顎前方牽引(保持)装置	48
化学的性質	28
下顎頭形成術	41
下顎頭欠損	33, 40, 42
下顎頭肥大	33, 42
化学療法	39
かかりつけ歯科医	4
かかりつけ歯科医機能	12
過換気症候群	45
顎外固定装置	34
顎間関係の記録	46, 47
顎関節	16, 17, 20, 49
顎関節円板障害	42
顎関節強直症	33, 42
顎関節・筋(下顎運動)	7
顎関節・筋機能検査	23
顎関節疾患	5, 33
顎関節疾患の予防	45
顎関節症	42
顎関節・咀嚼筋疾患の病態・診断・治療	42
顎関節脱臼	42
顎関節痛障害	42
顎関節の検査	7
顎関節の疾患	18
顎関節の症候	6
顎関節の変化	19
顎関節リウマチ	42
顎顔面	17
顎顔面インプラント治療	41
顎顔面骨の変形に対する治療 ..	41
顎顔面頭蓋部エックス線検査 ..	23
顎顔面に異常をきたす骨系統疾患・症候群	40
顎顔面の変形をきたす疾患・病態・診断	40
顎顔面補綴	41
顎顔面補綴装置	48
顎矯正手術	41
顎口腔機能検査	23
顎・口腔領域の疾患の予防	45
学習	15
学習障害	21
顎整形力	34
拡大装置	34
顎堤の状態	9
学童期	5
獲得免疫	15

顎変形症	40
顎変形症の治療	35
過形成	18
鰐口瘡	40
荷重時期の選択	47
過剰歯	32
下垂体性巨人症	44
下垂体性小人症	44
カスタムアバットメント	48
数の異常	32
化生	18
画像解剖	16
画像記録	4
画像検査	8, 23
画像検査における医療情報	23
画像検査の安全管理	23
画像情報DICOM規格	23
画像所見	23
画像の鑑別診断	23
家族歴	7
硬さの異常	6
仮着用セメント	29
学校安全	13
学校歯科保健	13
学校歯科保健管理	13
学校歯科保健教育	13
学校保健	4, 13
学校保健関係者	13
学校保健の領域・内容	13
顎骨	20, 49
顎骨壊死	6
顎骨炎	41
顎骨・顎関節の疾患	18
顎骨骨髓炎	41
顎骨骨膜炎	41
顎骨再建用材料	30
顎骨周囲炎	41
顎骨周囲軟組織の炎症	41
顎骨腫瘍の外科療法	41
顎骨に発生する腫瘍および腫瘍類似疾患	41
顎骨に発生する腫瘍・腫瘍類似疾患に対する診断と治療	41
顎骨に発生する嚢胞性疾患の病態・診断・治療	41
顎骨の再建	41
顎骨の症候	6
顎骨の変化	19

合併症	7, 26
合併症の評価	21
合併する全身疾患の増悪	45
滑膜炎性骨軟骨腫症	42
窩洞形成法	36
加熱・加圧成形	29
加熱重合	29
加熱重合型アクリルレジン	28
過敏症	18
仮封	37
仮封材	28
ガラスセラミックス	28
加齢	5
加齢現象	5
加齢・老化による口腔・顎顔面の 変化	17
感覚	16
感覚異常	6
感覚器系	4, 20
感覚機能	15, 16, 49
感覚障害	20
感覚(味覚、体性感覚)の検査	7, 23
環境汚染	14
環境汚染の評価と対策	14
環境改善的アプローチ	50
環境への適応性	50
環境保健	14
環境保健対策	14
環境要因と健康	14
肝硬変	25
観察研究	14
カンジダ症	6
肝疾患	22
患者・家族の考え方・希望	7
患者管理	21, 40
患者管理の基本	9
患者・検体の確認	7
患者歯科医師関係の確立	7
患者・障害者の心理と態度	3
患者・障害者のもつ心理社会的問 題と背景	3
患者情報の記録と伝達	46, 47
患者説明文書	3
患者中心の歯科医療	3
患者と医療従事者の放射線防護	23
患者の安全管理	3

患者の確認	6
患者の権利	3
患者の指導	7
患者の人権と医療	3
患者の体位	6, 8
患者への説明・声かけ・例示	6
患者への適用	8
患者満足度	3
感情面への対応	7
癌性疼痛	26
関節	4, 15
間接訓練	50
関節雑音	6
関節疾患	49
間接修復法	36
間接修復用コンポジットレジン	29
関節痛	6
関節突起骨折	41, 42
関節突起発育不全	33, 42
関節リウマチ	22, 44
感染	3, 6
感染症	5, 9, 18, 22, 25
感染症対策	14
感染症対策と疫学	14
感染症の疫学	14
感染症の予防	14
感染性顎関節炎	42
感染性心内膜炎	39
感染対策	8
感染予防	26
肝臓	15
肝・胆道機能検査	24
含窒素成分	24
がん治療患者の管理	40
寒天	28
がんの告知	40
がんの予防	45
鑑別診断	23
顔貌	7
顔貌の変化	19
顔面	20
顔面筋	15
顔面けいれん	42
顔面神経麻痺	42
顔面軟組織の損傷	39
顔面皮膚	16
顔面領域の疼痛	18

顔面裂	32, 39
管理	4, 37, 48
寒冷	27
関連痛	6
緩和医療	40
緩和医療とターミナルケア	26
緩和ケア	26
緩和療法	8, 25

き

既往歴	7
既往歴・合併症の評価	21
記憶	15
機械的性質	28
器械の安全な取扱法	8
器官系	4
気管支喘息	25
気管前葉	15
技工指示書	4
技工操作	46, 47, 48
義歯床用裏装材	29
義歯性線維腫	39
器質的变化	17
義歯の構成要素	46
義歯の清掃・管理	48
義歯の設計	46, 47
基準値と結果の解釈	7
基準範囲の概念	7
義歯用材料	9, 28
既製アバットメント	48
拮抗薬	26
基底細胞母斑症候群	43
気道	15
気道異物に対する対応	25
気道管理	26
機能印象材	28
機能障害	6
機能障害の予防	48
機能低下とその対応	48
機能的矯正装置	34
機能的評価	46
機能的変化	17, 49
機能的要件	46
機能の回復	9
機能評価	21
気分障害	44
基本事項	16

基本手技	6, 8
基本的器材	8
基本的術式	25
基本的性質	9
基本的対応	50
客観的所見	4
キュアとケア	25
嗅覚	16
救急医薬品	8
救急医療	25
救急患者の診察	8
救急・災害時等の歯科保健医療対策	12
救急時の診察	21
救急処置	8
救急処置を要する症状および病態	8
臼歯部の咬合状態	7
吸収	17, 27
急性化膿性顎関節炎	42
急性期	26
急性症状を有する歯周疾患への対応	38
急性白血病に伴う症候	6
急性・慢性肝炎	25
急速拡大装置	34
吸啜	16
吸入鎮静法	26
吸入麻酔薬	26
仰臥位	6
狭義の矯正力	34
凝固・線溶系検査	24
頬骨・頬骨弓骨折	41
胸鎖乳突筋	15
強磁場・電磁波・超音波の生体作用	23
狭心症	25
矯正装置	34
矯正力	34
矯正力と固定	34
胸痛	6, 8, 20
頬粘膜癌	39
胸部エックス線写真	23
頬部の異常	39
業務上疾病	13
局所の循環障害	18
局所麻酔	8, 26
局所麻酔薬	26

局所麻酔薬中毒	45
巨細胞性病変	41
巨舌症	33
巨大歯	32
亀裂	6, 36, 41
筋	7, 15, 49
筋萎縮性側索硬化症	22
禁煙指導・支援	12, 37, 45, 48
筋機能検査	23
筋機能療法	27
緊急処置	37
緊急度	21
金銀パラジウム合金	29
筋系	4
菌血症	39
金合金	29
銀合金	29
菌交代現象	25
菌交代現象<菌交代症>に伴う症候	6
菌交代症	6, 25
筋弛緩薬とその拮抗薬	26
筋疾患	6, 49
金属アレルギー	43
金属アレルギーに伴う症候	6
金属材料	28, 29
金属の成形技術・機器	29
金属被着面処理	29
金属焼付用陶材	28
筋組織	4
筋痛	6
筋電図検査	23
筋電図・神経伝導検査	24
筋突起過長症	40
筋肉内	8
筋の検査	7
筋の症候	6
筋膜隙	16

く

偶発症	26, 35
偶発症と安全対策	37
くさび状欠損	36
苦痛への配慮	6
くも膜下出血	25
クラウンブリッジによる治療	46
クラウンブリッジの設計	46

グラスアイオノマーセメント	28, 29
グリア	15
クリニカルパス	3
くる病	44
クレアチニンクリアランス	24
クローズドトレー法	47
クワドヘリックス装置	34

け

ケア	25
計画	4
経管栄養	9
頸筋膜	15
経口栄養	9, 27
刑事裁判	3
茎状突起過長症	40
経静脈栄養	9, 27
形成	17
形成異常	17
形態的・審美的評価	46
形態的变化	49
形態的要件	46
形態の異常	6, 32
経腸栄養	9, 27
頸椎	15
頸動脈鞘	15
頸部郭清術	39
頸部聴診法	49
けいれん	6, 8, 20, 42
外科的歯内療法	37
外科的侵襲に対する反応	26
外科療法	25, 39
血圧	7
血圧上昇・低下	20
血液	4
血液学検査	7, 24
血液型・輸血関連検査	24
血液・血液製剤の安全性	4
血液・造血器疾患	22, 45
血液・造血器・リンパ系	25
血液・造血器・リンパ系疾患	9
結核	22, 43
結核・梅毒に伴う症候	6
結果の解釈	7
血管収縮薬	26
血管収縮薬による反応	45

血管迷走神経反射	45
血球検査	24
結合〈支持〉組織	4
血小板無力症	44
血清学的診断	24
血清カルシウム調節機構	17
血友病A・B	44
ゲノム	4
下痢	6, 20
原因	7
原因療法	8
原因療法と対症療法	25
研究用模型による検査	46
限局性学習症	21
健康影響	14
健康格差	3
健康危機管理	4
健康教育・学習	12
健康支援	21
健康・疾病・障害の概念	12
健康・疾病の概念	5
健康診断	12, 13
健康増進計画	12
健康増進と疾病予防	4
健康増進法	4
健康相談	12
健康に関わる要因	12
健康日本21(第二次)	4
健康の概念	12
健康の保持・増進と社会保障の仕 組み	12
健康被害	3
言語機能	16
言語治療	39
言語の発達	5
検査	34, 46
研削工具	9, 28
検査所見記録	4
検査・診断に伴う医原病	18
検査と評価	46
検査の安全性	7
検査の合併症・リスク	7
検査・臨床判断の基本	7
犬歯間保定装置	34
原始反射	5
検出器	8
現状	13
検体検査	24

検体検査の種類	7
検体の確認	7
検体の採取・保存・確認	24
現病歴	7
研磨	46
研磨材	9, 28
原理	23

こ

コイルスプリング	30
誤飲	3, 8, 45
誤飲・誤嚥に対する対応	26
抗炎症薬	27
構音	16
構音機能	9, 49
構音障害に対する対応	50
構音・発語障害	46
構音補助床	48
口蓋	16, 17
口蓋癌	39
口蓋の異常	39
公害の発生要因	14
口蓋裂	32, 39
口角炎	40
口角びらん	33, 40
硬化熱処理	29
交換時期	5
抗感染症薬	27
高気圧酸素療法	27
口峽	16
抗菌薬の適正使用	3
口腔	5, 16
口腔インプラント・口腔外科・歯 周治療用材料	9, 30
口腔インプラント用材料	30
口腔衛生管理	40, 50
口腔衛生管理のための口腔ケア	4
口腔衛生指導	48
口腔衛生状態の評価	46
口腔・顎顔面に異常をきたす骨系 統疾患・症候群	43
口腔・顎顔面の機能	16
口腔・顎顔面の検査	7
口腔・顎顔面の硬組織疾患への対 応	50
口腔・顎顔面の疾患	33

口腔・顎顔面の症候	20
口腔・顎顔面の診察	7
口腔・顎顔面の成長・発育	5
口腔・顎顔面の先天異常	32
口腔・顎顔面の発育を障害する先 天異常	32
口腔・顎顔面の発生・成長・発育	17
口腔・顎顔面領域に関連して現れ る精神・心身医学的病態	44
口腔・顎顔面領域に症状を伴う全 身疾患	5, 18
口腔・顎顔面領域の疾患と障害の 概念	5
口腔・顎顔面領域の疾患の病因・ 病態	18
口腔・顎顔面領域の症候	6
口腔・顎の機能の発達	16
口腔環境の評価	9, 26
口腔カンジダ症	40
口腔乾燥	6, 20, 49
口腔乾燥症	40, 42
口腔乾燥症の予防	45
口腔癌の疫学要因	14
口腔・顔面・指趾症候群	43
口腔顔面痛	46
口腔・顔面領域の疼痛	18
口腔機能維持向上のための口腔ケ ア	4
口腔機能回復治療	38
口腔機能管理	9, 26, 50
口腔機能向上に関する指導	48
口腔機能障害	20
口腔機能障害・口腔顔面痛	46
口腔機能に応じた栄養指導	48
口腔機能の検査	7
口腔機能の評価	49
口腔機能のリハビリテーション	9
口腔ケア	4, 40
口腔結核	39
口腔健康管理	4
口腔検査	23
口腔疾患の疫学要因	14
口腔疾患の治療	50
口腔習癖とその対応	33
口腔上顎洞瘻	41

口腔症状を呈するアレルギー性疾患・免疫異常..... 43	抗原処理と抗原提示..... 15	喉頭..... 16
口腔症状を呈するウイルス感染症..... 43	膠原病..... 25	行動..... 49
口腔症状を呈する栄養障害..... 44	咬合..... 17, 20	行動調整..... 21, 50
口腔症状を呈する細菌感染症... 43	咬合異常..... 33	行動の障害..... 22
口腔症状を呈する自己免疫疾患... 44	咬合器装着・調節..... 47	行動変容..... 4
口腔症状を呈する内分泌障害... 44	咬合挙上板..... 34	行動療法..... 27
口腔清掃..... 4	咬合採得用材料..... 28	行動レベル..... 4
口腔清掃指導..... 36, 37	咬合斜面板..... 34	高度な気道管理..... 26
口腔清掃状態..... 9	咬合状態..... 7, 9	口内炎..... 6
口腔清掃状態の検査..... 23	咬合性外傷..... 37	口内法..... 8
口腔前庭..... 16	咬合性外傷に対する治療..... 38	口内法エックス線検査..... 23
口腔苔癬様病変..... 43	咬合接触..... 16	紅板症..... 40
口{腔}底..... 16	咬合・咀嚼障害..... 46	抗不整脈薬..... 26
口腔と全身の健康増進..... 12	咬合調整(削合)と仕上げ..... 47	高分子材料..... 28
口腔内試適..... 46	咬合の検査..... 23	咬耗症..... 36
口腔内試適と装着..... 47	咬合の症候..... 6	高齢者が有する歯周疾患..... 38
口腔内スキャナー..... 46	咬合の変化とその対応..... 48	高齢者歯科保健..... 13
口腔軟組織の炎症..... 39	咬合様式..... 16, 46, 47	高齢者等に関連した歯科診療.. 50
口腔軟組織の疾患..... 33	咬合力の支持様式..... 46	高齢者等に関連した予防と管理.. 50
口腔軟組織の損傷..... 39	高次神経機能..... 15	高齢者等に関連した臨床評価・診断・治療計画..... 49
口腔粘膜..... 7, 20, 49	硬質石膏..... 28	高齢者等の歯科診療で注意すべき疾患・病態・症候..... 49
口腔粘膜検査..... 23	高次脳機能障害..... 20	高齢者の口腔管理..... 13
口腔粘膜疾患..... 5	公衆衛生活動..... 12	高齢者の根尖性歯周疾患と治療.. 37
口腔粘膜疾患の病態・診断・治療..... 40	口臭検査..... 23	高齢者の歯髓疾患・根尖性歯周疾患..... 37
口腔粘膜疾患の予防..... 45	口臭の予防..... 45	高齢者の歯髓疾患と治療..... 37
口腔粘膜の疾患..... 18	公衆被曝..... 23	高齢者の心理的特徴..... 5
口腔粘膜の症候..... 6	抗腫瘍薬..... 27	高齢者の生理的特徴..... 5
口腔粘膜の状態..... 9	抗腫瘍薬による口内炎..... 6	高齢者の治療..... 25
口腔の環境・機能..... 12	溝{状}舌..... 40	高齢者の特性..... 13
口腔の小手術..... 26	甲状腺機能亢進症..... 44	高齢者の歯の硬組織疾患..... 36
口腔の診察・検査..... 12	甲状腺機能低下症..... 44	高齢者への対応..... 21
口腔の生態系..... 16	甲状腺疾患..... 25	高齢者保健..... 4, 13
口腔の変化..... 19	口唇..... 16	誤嚥..... 3, 8, 45
口腔バイオフィルム..... 5, 16	口唇癌..... 39	誤嚥性肺炎..... 25, 49
口腔梅毒..... 39	口唇・頬部の異常..... 39	誤嚥に対する対応..... 26
口腔扁平苔癬..... 40	口唇ヘルペス..... 33	呼吸..... 7
口腔保健..... 14	口唇裂・口蓋裂..... 32, 39	呼吸運動..... 15
口腔保健管理..... 13	構成要素..... 46	呼吸管理..... 50
口腔保健指導..... 50	酵素..... 24	呼吸器系..... 4, 25
口腔領域の放射線治療..... 26	構造の異常..... 32	呼吸器疾患..... 9, 22, 45, 49
後継永久歯..... 33	硬組織欠損..... 6	呼吸器・循環器系..... 15, 20
広頸筋..... 15	硬組織・歯髓・根管の検査..... 7	呼吸機能検査..... 24
高血圧緊急症..... 45	合着・接着用セメント..... 29	呼吸筋..... 15
高血圧症..... 22, 25	口底癌..... 39	
抗血栓薬..... 27	口底の異常..... 39	
	後天性免疫不全症候群..... 25, 43	
	後天性免疫不全症候群<AIDS>に伴う症候..... 6	

呼吸困難	6, 8, 20
呼吸不全	25
国際障害分類	3
国際生活機能分類	3
国際保健	14
国民医療費	3, 13
国民栄養と食生活・食育指導	14
国民栄養と食品保健	14
国民栄養の現状	14
黒毛舌	40
個人識別	13
個人情報管理	24
個人情報の保護	4
個人トレーの製作	47
個体の死	19
骨	15
骨移植術	41
骨延長術	41
骨格系	4, 15, 20
骨関連病変	41
骨形成線維腫	41
骨形成不全症	32, 43
骨形成様式	5
骨系統疾患・症候群	40, 43
骨髄	15
骨髄異形成症候群	45
骨性異形成症	41
骨折	49
骨接合・顎骨再建用材料	30
骨造成(骨増生)などの付随手術	47
骨増量術	41
骨組織代謝	17
骨粗鬆症	25
骨軟骨腫	42
骨補填用材料	30
骨膜下膿瘍	39, 41
骨隆起	41
固定	34
コバルトクロム合金	29
コミュニケーション	8
コミュニケーションと社会参加	9
コミュニケーションの進め方	7
誤薬	3
固有口腔	16
根管形成	37
根管充填	37

根管充填材	28
根管処置	37
根管貼薬	37
根管の化学的清掃	37
根拠に基づいた医療	8, 21
根尖歯周組織	6, 7, 20
根尖性歯周疾患	5, 36, 37
根尖性歯周疾患が全身に及ぼす影響	36
根尖性歯周疾患の治療	37
根治療法	8
コントラストと分解能	23
コンピュータ支援手術	47
根分岐部病変の治療	38
コンポジットレジン	28
根未完成歯の治療	37
根面齲蝕	36

さ

サーカムフェレンシャルタイプリテーナー	34
座位	6
災害時の歯科保健医療対策	12
鰓弓	17
細菌感染症	25, 43
剤形	27
再建手術	26
再建術	39
再植	41
再生	18
再生不良性貧血	44
再石灰化	36
在宅医療	4, 8, 12, 50
在宅支援	50
最適化	23
細胞間情報伝達	17
細胞・細胞小器官の構造と機能	4
細胞死	18
細胞遮断膜	30
細胞診	8
細胞性免疫	4, 15
細胞・組織・器官の構造と機能	15
細胞・組織・臓器の加齢現象	5
細胞・組織の傷害	18
材料的要件	46

材料の種類	28
材料の性質	28
作業関連疾患	13
作業用模型の製作	46, 47
削合	47
鎖骨頭蓋異骨症	32, 43
鎖骨頭蓋骨異形成症	32, 43
撮影補助器材	8
サベイング	47
サルコペニア	49
酸化亜鉛ユージノール	28
酸化亜鉛ユージノールセメント	29
産業歯科保健	13
産業歯科保健活動	13
産業歯科保健の意義	13
産業保健	4, 13
三叉神経痛	42
三叉神経麻痺	42
三歯徴	16
酸蝕症	36
三層性胚盤	5
酸素療法	8, 27
残存歯の状態	9
残存組織の変化とその対応	48
三表徴	16

し

仕上げ	47
シートワックス	28
死因究明制度	13
死因の究明	13
歯科医学史	9
歯科医師と患者・家族との関係	3
歯科医師のプロフェッショナルリズム	3
歯科医師法	3
歯科医療に必要な基本的医学英語	9
歯科衛生士法	3
歯科技工士法	3
歯科矯正用アンカースクリュー	34
歯科矯正用材料	9, 29
歯科口腔保健の推進に関する法律	4
歯科材料・機器	9
歯科材料接着処理	29

歯科疾患のリスク評価	12	脂質代謝関連物質	24	歯槽骨炎	41
歯牙腫	33	歯周炎	37, 38	歯槽骨・顎骨の炎症の病態・診断	
歯科集団検診	14	歯周炎の予防・管理	37	・治療	41
歯科治療時の患者管理・麻酔管理	45	歯周炎のリスクファクター	37	歯槽骨骨折	41
歯科治療時の留意点	44	歯周基本治療	38	歯槽膿瘍	39
歯科治療上留意すべき事項	21, 50	歯周形成手術	38	死体解剖と死因究明制度	13
歯科における全身的偶発症とその対応	45	歯周外科治療	38	支台歯・インプラントの清掃・管理	48
歯科法医学	13	歯周疾患	5, 6, 37, 38, 50	支台歯形成	46
歯科保健管理	50	歯周疾患と健康の関わり	37	支台築造	46
歯科保健業務	12	歯周疾患の疫学要因	14	支台築造材	29
歯科用コーンビームCT	23	歯周疾患の治療	38	疾患に応じた薬物療法	27
歯科用磁性合金	29	歯周疾患の病因と病態	37	実施(必要性)の説明	7
歯科用石膏	28	歯周疾患の予防・管理	37	失神	8, 20
歯科用ユニット	8, 28	歯周-歯内病変	37	疾病構造	3
歯科用ワックス	28	歯周組織	16, 20	疾病・障害の概念・構造	3
歯科領域における統計指標と疫学調査	14	歯周組織形成	17	疾病の概念	5
歯冠周囲炎	39	歯周組織検査	23	疾病の自然史と対応	12
歯冠修復・義歯用材料	9, 28	歯周組織再生治療	38	疾病予防	4
歯冠修復法	36	歯周組織の検査	7	歯堤	17
色素性母斑	40	歯周組織の症候	6	児童虐待と歯の外傷	33
色素排泄試験	24	歯周組織の症状	7	児童虐待への対応	13
色調の変化	6	歯周組織の膿瘍	37	指導と管理	48
糸球体濾過率	24	歯周治療	9, 25, 35	児童福祉	13
止血	8	思春期	5	児童福祉制度	13
止血法	26	耳小骨	15	歯内歯	32
止血薬	27	視診	6	歯内-歯周疾患	36
歯源性	5	歯髄	16, 20	歯内療法	9, 25
歯源性悪性腫瘍	41	歯髄腔の形態	16	歯内療法用材料	28
歯源性嚢胞	39, 41	歯髄・根管の検査	7, 23	歯肉炎の予防・管理	37
歯源性良性腫瘍	39, 41	歯髄・根尖歯周組織の症候	6	歯肉癌	39
自己抗体	24	歯髄・根尖歯周組織の症状	7	歯肉形成	47
自己紹介	6	歯髄疾患	5, 36, 37	歯肉・口蓋の異常	39
事後措置	13	歯髄疾患・根尖性歯周疾患の治療	37	歯肉出血	6
死後変化	13	歯髄疾患・根尖性歯周疾患の病因と病態	36	歯肉増殖	6
自己免疫疾患	18, 44	歯髄除去療法	37	歯肉退縮	37
歯根外部吸収	36	歯髄保護法	36	歯肉嚢胞	33
歯根外部吸収歯の治療	37	歯髄保存療法	37	歯肉膿瘍	39, 41
歯根形成	17	システマティックレビュー	8	歯肉肥大	6
歯根の異常	32	姿勢	7	歯肉病変	37, 38
歯根の形態	16	姿勢・異常反射	50	歯肉病変のリスクファクター	37
歯根膜	16	歯性上顎洞炎	39, 41	歯胚	17
歯式	16	歯性全身感染症	39	自発痛	6
脂質異常症	22	歯性病巣感染	39	指標と調査	14
歯質接着処理	29	歯性扁桃周囲炎	39	自閉症スペクトラム障害	21
		自然免疫	4, 15	自閉スペクトラム症	21
		歯槽骨	49	脂肪抑制像	23
				社会環境の変化	12

社会参加	9
社会性	16
社会性の発達	5
社会的関わり	3
社会的決定要因	12
社会と歯科医療	3
社会復帰	40
社会保障制度	13
社会保障と医療経済	13
社会保障の仕組み	12
社会保障費	3
重合	47
周術期口腔機能管理	50
周術期の管理	26
重症度と緊急度	21
修復と再生	18
主観的所見	4
宿主	18
主作用	9
手術記録	4
手術室	8
手術・周術期の管理	26
手術の適応と時期	26
手術野の防湿・消毒	8
受精	5
主訴	7
主訴の改善	25
手段的日常生活動作	21, 49
腫脹	6
出血	3, 6
出血傾向	20
出血性素因	25, 44
出血性素因に伴う症候	6
術後管理	26, 45
術者の姿勢・位置	6
出生前期	5
術前管理	26, 45
術前・術中・術後管理とモニタリ ング	26
術中管理	26, 45
主として機能に関連する疾患の病 態・診断・治療	42
主として硬組織に関連する疾患の 病態・診断・治療	40
主として全身に関連する疾患の病 態・診断・治療	43
主として軟組織に関連する疾患の 病態・診断・治療	39

ジュネーブ宣言	3
腫瘍	5, 18
腫瘍および腫瘍類似疾患	42
主要疾患画像	23
腫瘍・腫瘍類似疾患に対する診断 ・治療	39
腫瘍と宿主の関係	18
主要な疾患と障害の病因・病態	5
主要な症候	6
腫瘍類似疾患	5, 39, 41, 42
腫瘍	6
種類	23, 26
種類と特性	8
循環器系	4, 15, 20, 25
循環器疾患	9, 22
循環器・脳血管疾患	45
循環障害	5, 18
常温重合	29
常温重合型アクリルレジン	28
障害児・障害者の健康保持・増進	13
障害児・障害者の歯科保健医療	13
障害児・障害者の保健・福祉	13
障害者の歯科治療	50
障害者の治療	25
障害者への対応	21
障害の概念	5, 21
障害の概念と対応	12
障害の種類と支援	13
障害の分類	21
消化管	15
消化管機能検査	24
消化管ホルモン	15
消化器系	4, 15, 20, 25
消化器疾患	9, 22, 45
上顎骨・下顎骨の成長の特徴	5
上顎骨骨折	41
上顎前方牽引装置	34
上顎洞癌	39
上顎洞底挙上術	41
消化性潰瘍	25
床矯正装置	34
症候・病歴(既往歴・投与薬物)と の関連	7
常在微生物	15
常在微生物叢	5, 16
上唇小帯異常	33

焼成	29
小舌症	33
小帯異常	33
小帯の異常	39
情緒・社会性	16
情動	15
情動の発達	5
消毒	8
消毒と滅菌	26
消毒・滅菌と感染対策	8
消毒・滅菌法	8
小児	25
小児期にみられる歯周疾患	38
小児疾患	9
小児の機能	16
小児の歯髄疾患・根尖性歯周疾患	37
小児の歯肉病変・歯周炎の特徴	38
小児の歯肉病変・歯周炎への対応	38
小児の生理的特徴	5
小児の治療	25
小児の歯の外傷の予防	33
小児の歯の硬組織疾患	36
小児への対応	21
上皮	15
上皮異形成	39
上皮真珠	33
上皮性異形成	39
上皮組織	4
上部構造の設計	47
情報提供	4
静脈系	15
静脈内	8
静脈内鎮静法	26
静脈麻酔薬	26
静脈路確保	8
静脈路確保と薬物療法	26
床用レジン	30
初期齲蝕の診断	36
初期救急	8
初期固定	47
初期発生	17
食育基本法	14
食育指導	14
食育と口腔保健	14
職業性歯科疾患	13

職業被曝	23
食事・栄養療法	27
食事摂取基準	14
食思<欲>不振	20
触診	6
食生活指針	14
食生活指導	36
食生活・食育指導	14
食の安全性と機能性	14
食の機能と口腔保健	14
食品保健	14
食物摂取	16
食物認知障害	49
所属リンパ節	7
所属リンパ節の炎症	39
触覚の異常	6
ショック	6, 8, 20
処方箋	4
シリコーンゴム	28
自律機能	15
自律訓練法	27
自立支援と福祉の制度	13
自立生活支援	26
ジルコニア	28
歯齢	5
歯列	17, 20, 49
歯列弓の形態・大きさ	7
歯列・咬合異常の要因	33
歯列・咬合異常の予防	33
歯列・咬合状態の診察	7
歯列・咬合の検査	23
歯列・咬合の症候	6
侵害受容性疼痛	18
心機能検査	24
腎機能検査	24
真菌感染症	25
心筋梗塞	25
シングルフォトンエミッションCT	23
神経・運動器疾患	22, 45
神経・筋疾患	6, 49
神経系	4, 15, 20, 25
神経疾患	5, 9
神経疾患の病態・診断・治療	42
神経障害性疼痛	18
神経線維腫症Ⅰ型	40, 43
神経組織	4

神経伝達物質の合成・分泌・作用	15
神経伝導検査	24
人工歯	29
人工歯の選択・排列・削合	47
人口統計	14
診察	7, 21, 22, 34, 46
診察時の注意	21
診察総論	21
診察と診断	33
診察のあり方	6
診察の基本	6, 21
心疾患	22
心身医学的疾患	5, 45
心身医学的病態	44
心身症	44
新生児期	5
新生児歯	33
唇舌側弧線装置	34
心臓	15
腎臓	15
心臓超音波検査	24
靱帯	15
身体社会的・心理的評価	46
身体障害	13, 21
身体症状症	44
身体状態	49
身体成長	5
身体成長の評価法	16
身体的・社会的・心理的要因と保 存修復	36
身体的特徴	21, 22
人体の正常構造・機能	4
人体の成長・発達・加齢	16
人体の発育	5
人体の発生	5
人体の発生・成長・発達・加齢	5
身体表現性障害	44
診断	7, 33, 34, 46, 50
診断用ステントの製作	47
診断用セットアップ	47
診断用ワックスアップ	46
シンチグラフィ	23
心停止	8
心的外傷	44
心電図	24
振動	14

心内膜炎	25
腎尿路疾患	49
心肺蘇生	25
真皮	15
審美障害	46
審美的評価	46
審美的要件	46
深部静脈血栓症	25
心不全	25
心理	20, 49
心理社会的障害	46
心理社会的側面(プライバシー、尊 厳)・苦痛への配慮	6
心理社会的特徴	21, 22
心理社会的問題と背景	3
心理社会的要因による疼痛	18
心理的アプローチ	50
心理的特徴	5
心理的評価	46
心理と態度	3
診療ガイドライン	8
診療情報の開示	4
診療情報の記録と管理	4
診療に関する記録	4
診療用器械	9, 28
診療用器械・器具	28
診療録	4

す

脾臓	15
水痘・带状疱疹	33, 43
水疱	6
睡眠	15
睡眠検査	24
睡眠時無呼吸	46
睡眠障害	6, 20
睡眠中の管理	48
スクリーニング	7
スクリーニング検査	12
スクリー固定式上部構造の製作	48
頭痛	6, 8, 20
スティッキーワックス	28
ステンレス鋼	29
ストレス因関連障害	44
スパイロメトリ	24
スピーチエイド	48

スポーツによる歯の外傷の予防...	33
スライディングプレート	34

せ

生化学検査	7, 24
生活環境と健康	14
生活期	26
生活支援	12
生活習慣指導	37, 40, 45
成形技術・機器	9, 29
成形修復用材料	28
成形修復・予防填塞・歯内療法用材料	9, 28
清潔操作	8
性差	7
生歯	16
正常画像と主要疾患画像	23
正常咬合の概念と成立の条件...	34
生殖器	15
生殖器系	4, 15, 20, 25
生殖器疾患	9, 22, 45
生殖器形成	5
精神機能	20
精神系	25
精神・行動の障害	22
成人・高齢者保健	4
成人歯科保健	13
精神疾患	9
精神障害	13, 21
精神状態	7
精神・神経疾患	5
精神・心身医学的疾患	5, 45
精神・心身医学的病態	44
精神鎮静法	8, 26
精神年齢	16
成人の口腔保健管理	13
成人の治療	25
精神発達の評価法	16
成人保健	13
精神療法	27
生体安全性	28
生体機能検査	24
生態系	5, 15, 16
生体構成成分の構造・機能	4
生体材料の科学	28
生体色素	24

生体反応	34
正中菱形舌炎	40
成長の時期	5
成長・発達の特徴	5
成長ホルモン分泌不全性低身長...	44
静的咬合誘導	33
正当化	23
生物学的効果	26
生物学的固定	47
生物学的性質と生体安全性	28
生物学的特性	16
生物学的要件	46
喘鳴	20
生命倫理	3
生理的特徴	5
生理的年齢	16
生理的変動	7
世界の保健・医療の問題と方向性	14
セカンドオピニオン	3, 4
脊髄神経	16
赤沈	24
咳テスト	49
舌	16, 17, 20, 49
舌圧検査	49
舌咽神経痛	42
舌炎	6
切開	9
石灰化機構	17
切開排膿	26
切開法	26
舌下神経麻痺	42
舌癌	39
設計線の記入	47
設計の原則	46
赤血球系疾患	44
赤血球系疾患・白血球系疾患・出血性素因の診断と患者に対する観血的治療	44
赤血球増多症	44
舌・口腔粘膜検査	23
石膏系埋没材	29
舌・口底の異常	39
舌骨	15
舌骨下筋群	15
舌骨上筋群	15
切削・研削工具	9, 28

舌小帯異常	33
摂食嚥下機能	9, 49
摂食嚥下障害	5, 6, 20, 21, 26, 46, 49
摂食嚥下障害のリハビリテーション	26
摂食嚥下障害への対応	50
摂食嚥下補助床	48
摂食機能療法	50
摂食行為・食物認知障害	49
切除療法	38
舌接触補助床	48
舌側弧線装置	34
接着処理	9
接着処理・技術	29
接着性モノマー	29
接着用材料	9, 30
接着用セメント	29
舌痛症	42
セメント固定式上部構造の製作	48
セラミックス	28
セラミックスの成形技術・機器	29
セラミックス被着面処理	29
線維骨性病変	41
線維性{骨}異形成症	41
前癌状態	18, 39
前癌病変	18, 39
浅頸筋	15
線材料	29
穿刺	9, 26
前歯部の被蓋・咬合状態	7
洗浄	8
染色体	4
染色体異常	32
染色体・遺伝子検査	24
染色法	24
前処置	46, 47
全身管理に留意すべき疾患・状態	45
全身管理に留意すべき疾患・対象	9, 25
全身倦怠感	6, 20
全身・口腔の構造と機能	4
全身・口腔の生態系	5
全身疾患の画像所見	23
全身疾患を有する者の歯周疾患治療	38
全身疾患を有する者への対応	22

全身状態の評価	26, 49
全身性エリテマトーデス	40, 44
全身性炎症反応症候群	39
全身的偶発症	8
全身的疾患に関連する口腔・顎顔 面領域の症候	6
全身的併発症	26
全身の外観	7
全身の循環障害	18
全身の症候	6, 20
全身の診察	7, 21
全身への影響	19
全身麻酔	8, 26
前舌腺嚢胞	33, 42
前装方法	46
喘息	22
先端巨大症	44
先天異常	5, 18
先天異常と変形を主徴とする疾患 の病態・診断・治療	39
先天欠如	32
先天歯	33
先天性外胚葉異形成症	32
先天性外胚葉形成不全	32
先天性下唇瘻・口角瘻	33
先天性疾患を伴う不正咬合の治療	35
先天性心疾患	45
先天性表皮水疱症	32
尖頭合指症	32, 43
全部床義歯による治療	47
浅葉	15
線溶糸検査	24
線量限度	23

そ

造影MRI	23
造影剤と副作用	23
造影CT	23
騒音	14
臓器移植患者	25
臓器機能検査	24
臓器・造血幹細胞移植に伴う症候	6
早期萌出乳歯	33
双極性障害	44
象牙質	16

象牙質異形成症	32
象牙質形成不全{症}	32
象牙質形成不全症	32
象牙質・歯髄保護法	36
象牙質知覚過敏症	36
象牙質被着面処理	29
造血幹細胞移植に伴う症候	6
造血器系	4, 15, 20
造血器疾患	22, 45
創傷治癒	18
創傷の処置	8
創傷の治療	26
増生	18
双生歯	32
装着	46, 47
装着材料	46
装着用材料	29
側臥位	6
組織	4
組織学的構造	18
組織活動	13
組織隙	16
組織隙の炎症	39
組織診	8
組織と性状	16
組織付着療法	38
咀嚼	16
咀嚼・嚥下機能	16
咀嚼機能	9, 49
咀嚼機能検査	23, 49
咀嚼筋	15
咀嚼筋腱・腱膜過形成	42
咀嚼筋痛障害	42
咀嚼障害	5, 20, 26, 46, 49
塑性加工	29
その他	25, 46, 49
その他の検査	24
その他の治療法	27
尊厳	6
損傷	5
損傷の予防	45
損耗	36

た

ターミナルケア	26
第一第二鰓弓症候群	32, 43
退院時要約	4

体液性免疫	4, 15
体液・電解質調節	15
体温	7
体格	7
大気	14
胎児期	5
代謝	20, 27
代謝改善薬	27
代謝機能検査	24
代謝疾患	22
代謝障害	5, 18, 44
代謝性疾患	45
体重減少・増加	6, 20
代償的アプローチ	50
帯状疱疹	33, 40, 43
帯状疱疹後神経痛	42
対症療法	8, 25
体性感覚	6, 7, 23
態度	7
大理石骨病	43
タウロドント	32
唾液	9
唾液管炎	42
唾液腺	4, 7, 16, 17, 20, 49
唾液腺炎	42
唾液腺検査	23
唾液腺疾患	5
唾液腺疾患の病態・診断・治療	42
唾液腺損傷	42
唾液腺の検査	7
唾液腺の疾患	18
唾液腺の症候	6
唾液・唾液腺検査	23
唾液の性状・機能	16
唾液分泌	16
唾液分泌機能	16
唾液分泌量減少・増加	6
唾液量	49
唾液瘻	42
多形{滲出性}紅斑	6, 40
多骨性線維性{骨}異形成症	43
多職種協働	50
多職種連携	4
打診	6
唾石症	42
他臓器癌に伴う症候	6
脱灰	36

脱臼	41
脱水	6, 20
多発性骨髄腫	44
タングクリブ	34
単純疱疹	33, 40, 43
弾性印象材	28
胆道	15
胆道機能検査	24
タンパク	24

ち

チアノーゼ	6, 20
地域医療	12
地域歯科保健活動での職種の連携	3
地域包括ケアシステム	3, 12
地域包括支援センター	12
地域保健	12
地域保健活動	12
地域保健活動の進め方	12
地域保健関連機関	12
地域保健にかかる法規と制度	4
地域保健法	4
チーム医療	4, 8, 12, 22
チーム医療における歯科の役割	4
チーム医療の意義	4
地球環境の変化	14
築盛	29
治験	3
智歯周囲炎	39
地図状舌	40
チタン	29
チタン合金	29
チタンモリブデン合金	29
知的障害	13, 21
着床	5
着色	36
着色予防	36
注意欠陥多動性障害	21
注意欠如・多動症	21
注射法の種類	8
中心結節	32
鋳接	29
鋳造	46
鋳造欠陥	29
鋳造工程	29

鋳造精度	29
中毒	18
中毒性表皮壊死剝離症	40
中毒の発生要因・病態生理	18
チューブ	29
超音波	23
超音波検査	23
超音波治療	27
超硬質石膏	28
調査	14
聴取事項	7
聴診	6
調整方法	46
直接訓練	50
直接修復法	36
治療	3
治療環境	8
治療計画	25, 34
治療計画の策定	50
治療計画の立案	46
治療計画の立案・提示	25
治療経過の評価	7
治療効果の判定	7
治療効果の評価	48
治療時の患者管理・生活習慣指導	40
治療中の管理	35
治療的アプローチ	50
治療に伴う医原病	18
治療に用いる基本的器材	8
治療の意義と目的	26
治療の基礎	25
治療の基礎・基本手技	8
治療の基本	8
治療の種類	25
治療の場	8
治療の評価	25
治療への参加	7
治療方針	33
治療法の選択	46
チンキャップ	34
沈着物	12
鎮痛薬	27

つ

椎前葉	15
痛風性顎関節炎	42

て

手足口病	33, 40, 43
低位乳歯	33
低血糖	20
低フォスファターゼ症	32
適応	23, 26
デジタル画像処理	23
鉄欠乏性貧血	40, 44
電解質	24
電解質調整	15
てんかん	25
電気	27
電気生理学検査	24
電氣的治療	26
電磁波	23
電磁放射線	23
天疱瘡	40, 44
電離放射線	23

と

同意書	3
トゥースポジショナー	34
頭蓋	15, 17
頭蓋顔面異骨症	32, 43
頭蓋骨	15
動悸	6, 20
動機付け	7
統計解析	14
統計指標	14
頭頸部	15, 16
頭頸部の局所解剖	16
頭頸部の筋系	15
頭頸部の形成	17
頭頸部の構造	15
頭頸部の骨格系	15
頭頸部の神経系	16
頭頸部の内臓系	16
頭頸部の部位	15
頭頸部の脈管系	15
凍結療法	27
動向	13
統合失調症	22, 25
陶材	28
陶材と金属の接合	29
陶材の築盛・焼成	29
陶材焼付用合金	29

糖代謝関連物質	24
動注化学療法	27
疼痛	6, 18
疼痛管理	26
疼痛管理とQOL<quality of life>	26
動的咬合誘導	33
糖尿病	22, 25, 44
糖尿病に伴う症候	6
頭部の成長・発育	17
動脈系	15
動脈塞栓術	27
投与経路と剤形の種類と特徴	27
投与薬物	7
特殊な形態	16
特殊な装置による治療	48
特徴	23, 26
特定健康診査	13
特定保健指導	13
特発性血小板減少性紫斑病	44
徒手筋力テスト	24
都道府県・市町村・保健所の歯科保健業務	12
ドブラ法	23
トランスパラタルアーチ	34
トリアージ	12
ドレナージ	9, 26

な

内因	18
内因性色素沈着	40
内歯瘻	41
ナイトガード	48
内部吸収	36
内部吸収歯・歯根外部吸収歯の治療	37
内分泌器官	15
内分泌系	4, 15, 20, 25
内分泌疾患	9, 45
内分泌障害	44
内分泌・代謝機能検査	24
内分泌・代謝疾患	22
流し込み成形	29
軟化熱処理	29
軟口蓋挙上装置	48
軟骨内<軟骨性>骨化	17
軟骨無形成症	32

軟質裏装材	29
軟組織	20
軟組織疾患への対応	50
軟組織に発生する腫瘍および腫瘍類似疾患	39
軟組織に発生する嚢胞の病態・診断・治療	39
軟組織の炎症の病態・診断・治療	39
軟組織の疾患	18
軟組織の損傷の病態・診断・治療	39
軟組織の肉腫	39

に

二回法	47
肉芽腫性炎	39
肉芽腫性口唇炎	40
二次救命処置	26
二次固定	47
二次手術	47
二層性胚盤	5
日常生活支援事業	13
日常生活動作	13, 21, 49
日常生活動作<ADL>の評価	9
ニッケルチタン合金	29
二点識別検査	24
入院	8
入院診療計画書	4
乳歯	16
乳歯齲蝕	36
乳児期	5
乳歯と永久歯外傷の疫学	33
乳歯の根尖性歯周疾患と治療	37
乳歯の歯髄疾患と治療	37
乳歯・幼若永久歯の外傷の処置と経過	33
乳歯・幼若永久歯の歯冠修復法	36
乳歯列期・混合歯列期の不正咬合の治療	34
乳幼児・高齢者・妊産婦・障害者・要介護者の治療	8
乳幼児の歯科保健と健康診査	13
ニューロン	15
ニュルンベルグ綱領	3
尿	24

尿路	15
妊産婦の歯科保健	13
妊娠	15, 45
認知機能	7, 21, 49
認知・言語機能	16
認知行動療法	27
認知症	20, 22, 25, 49
認知障害	49
認知症患者	6
妊婦	25
妊婦・授乳婦への対応	21

ね

熱可塑性樹脂	30
熱感	6
熱処理	46
粘液嚢胞	33, 42
粘液瘤	33, 42
粘膜	16
粘膜下組織	15
粘膜系	15, 20, 25
粘膜固有層	15
粘膜疾患	9
粘膜斑	6
粘膜・皮膚・眼症候群	40
粘膜免疫	4, 15
年齢差	7
年齢に応じた対応	21
年齢による成長評価法	16

の

脳血管疾患	22, 45, 49
脳血管・神経・筋疾患に伴う症候	6
脳梗塞	25
脳神経	16
脳内出血	25
脳波検査	24
嚢胞	5
膿瘍	37
膿瘍の処置	9
ノーマライゼーション	3

は

歯	4, 5, 20, 49
---	--------------

肺	15
肺炎	22
バイオネーター	34
廃棄物処理	14
敗血症	39
胚子期	5
賠償	3
排泄	27
バイタルサイン	7, 21
バイタルサインの把握	8
梅毒	43
梅毒に伴う症候	6
培養検査	24
廃用症候群	49
排卵	5
排列	47
歯および歯周疾患への対応	50
白板症	40
歯・歯周組織・咬合の治療	25
歯・歯周組織に対する基本的処置	9
歯・歯周組織の形成と歯の萌出	17
歯・歯周組織の疾患	18
歯・歯周組織の診察	7
歯・歯槽骨・顎骨・顔面骨の損傷 の病態・診断・治療	41
播種性血管内凝固症候群	44
破傷風	43
歯・歯列の発育	5
破折	6, 36, 41
発育異常	42
発育期の特徴	5
発育区分	5
発育区分における成長・発達の評 価	16
発育時期	5
白血球系疾患	44
白血病	25, 39, 44
発語	7
発語障害	46
抜歯	9, 26
抜歯後出血	6
抜歯・非抜歯の判定	34
発声	16
発声・構音機能	49
発声・構音・発語検査	23
発声・構音・発語障害	20

発声・構音・発語障害のリハビリ テーション	26
発生要因	3
発達障害	13, 21
発達障害のある小児への対応	21
発達スクリーニング検査	16
パッチテスト	24
発熱	6, 20
歯と歯周組織の構造	16
歯と修復物の所見	7
歯の異常	32
歯の外形	16
歯の外傷	33, 36
歯の外傷の状況と影響	33
歯の亀裂・破折	36
歯の亀裂・破折・脱臼	41
歯の形態	16
歯の欠損の治療	9, 25
歯の欠損への対応	50
歯の硬組織形成	17
歯の硬組織疾患	5, 36
歯の硬組織疾患の治療	9, 25, 36
歯の硬組織疾患の病因と病態	36
歯の硬組織疾患の予防・管理	36
歯の硬組織の検査	23
歯の再植	41
歯の疾患	33
歯の症候	6
歯の喪失に伴う変化・障害	19
歯の喪失予防	50
歯の損耗	36
歯の脱落・交換時期	5
歯の漂白	36
歯のフッ素症	32
歯の変色	6
歯の変色・着色	36
歯の変色・着色予防	36
歯の萌出	17
パノラマエックス線検査	8, 23
歯への沈着物	12
パラフィンワックス	28
バリアフリー	3
針反応テスト	24
パルスオキシメトリ	24
半坐位	6
反射	16
反射機能	49

判定	19
バンド	29
反応	27
反復唾液嚥下テスト	49

ひ

鼻咽腔閉鎖機能検査	23
鼻咽腔閉鎖不全	39
非齶蝕性硬組織疾患	36
皮下	8
被蓋	7
日帰り全身麻酔	26
皮下組織	15
光重合	29
非感染性顎関節炎	42
鼻骨骨折	41
非歯源性	5
非歯源性悪性腫瘍	41
非歯源性歯痛	42
非歯源性嚢胞	39, 41
非歯源性良性腫瘍	39, 41
微生物学検査	7, 24
微生物の構造・一般性状	5
肥大	18
ビタミン	27
非弾性印象材	28
ヒト免疫不全ウイルス(HIV)感染 症	43
皮内	8
皮内テスト	24
泌尿器・生殖器系	4, 15, 20, 25
泌尿器・生殖器疾患	9, 22, 45
被曝	3
被曝低減3原則	23
皮膚	7
皮膚アレルギー検査	24
皮膚検査	24
皮膚知覚検査	24
皮膚・粘膜系	15, 20, 25
皮膚・粘膜疾患	9
ヒヤリハット	3
病因	18, 36
評価	4, 46
評価の基本	21
病期に応じた口腔ケア	4
病原微生物	18

標準予防策 3, 8, 26
 表情筋 15
 病診連携 4
 病態 18, 46
 費用対効果 8
 病態の評価と疾患(全身的偶発症を含む)の鑑別 8
 病的増殖 5
 漂白 36
 表皮 15
 病理学検査 8, 24
 病歴 7
 貧血 20, 25, 44
 貧血に伴う症候 6
 貧血に伴う舌炎 40

ふ

ファイバーポスト 29
 不安障害 44
 風疹 43
 フードテスト 49
 吹き抜け骨折 41
 複合材料 28, 29
 副甲状腺機能亢進症 44
 副作用 9, 23, 27
 副作用・有害事象への対応 3
 福祉 13
 福祉・介護の制度と職種 12
 福祉施設 12
 覆髄材 28
 服薬計画・指導 27
 服用薬物 49
 浮腫 6, 20
 不正咬合 5, 6
 不正咬合による障害 34
 不正咬合の疫学要因 14
 不正咬合の原因 34
 不正咬合の種類 34
 不正咬合の診断 34
 不正咬合の治療 9, 25, 34, 35
 不正咬合の病因・病態 34
 不正咬合の分類 34
 不正咬合の予防 34
 不整脈 20, 25
 付属器 15
 普通石膏 28
 フッ化物応用 4, 36

フッ素症 32
 物理的性質 28
 物理療法 27
 部分床義歯による治療 46
 プラーク 5, 16
 プライバシー 6
 プライバシーの保護 7
 プライマリヘルスケア 4, 12
 ブラキシズム 46
 ブラケット 29
 プリックテスト 24
 フレイル 21, 49
 フレイル予防のための歯科保健管理 50
 フレームワークの試適 47
 フレームワークの製作 47
 ブローイング時間 49
 プロトン密度強調画像 23
 プロビジュアルレストレーション 46, 47
 プロフェッショナリズム 3
 プロフェッショナルケア 48
 分解能 23
 分子標的薬 39
 分泌機構 16
 分布 27
 糞便 24
 分類と病態 18

へ

閉口障害 20
 併用 9, 27
 ペインコントロール 26
 へき地医療 12
 ヘッドギア 34
 ヘルスプロモーション 4, 12
 ヘルパンギーナ 33, 40, 43
 変形性顎関節症 42
 変色 6, 36
 変性 18
 扁桃 16
 弁膜症 25

ほ

蜂窩織炎 39
 縫合 8

縫合法 26
 方向用語 16
 報告義務 3
 防湿 8
 放射性同位元素 23
 放射線 5
 放射線感受性 26
 放射線障害 18, 42
 放射線性骨壊死 41
 放射線治療 26
 放射線治療患者の有害反応と口腔管理 27
 放射線治療の生物学的・物理学的基礎 26
 放射線と健康 14
 放射線の影響 5, 18
 放射線の性質と作用 8
 放射線の単位・測定 23
 放射線の治療効果 26
 放射線の防護・管理 8
 放射線防護 23
 放射線療法 39
 放射能 23
 萌出 17
 萌出時期・順序 5
 萌出遅延 33
 萌出嚢胞 33
 疱疹性歯肉口内炎 33
 放線菌症 39
 蜂巣炎 39
 訪問歯科診療 4, 8, 12, 50
 訪問歯科診療器材 50
 ホームケア 48
 保管 4
 保隙 33
 保隙装置の製作法 33
 保隙装置の適応症 33
 保隙装置の分類 33
 保健・医療・福祉・介護の制度と医療経済 3
 保健・医療・福祉・介護の制度と職種 3
 保健・医療・福祉・介護の制度と連携 12
 保健・医療・福祉・介護の法規と制度 12
 保健衛生法規 12
 保健指導 4, 12, 50

保健統計	14
保健・福祉の制度	13
歩行	7
母子歯科保健と児童福祉	13
母子歯科保健の意義	13
ポジトロンエミッション断層撮像	23
母子保健	4, 13
補修修復	36
補償	3
母性保健	13
保存	4
保存修復	36
保存療法	8
保存療法と外科療法	25
発疹	20
保定	35
保定装置	34
補綴・歯周治療との併用	35
補綴前外科手術	41
補綴装置に対する指導	48
補綴装置の清掃状態	9
補綴装置の選択	46
補綴装置の適合状態	9
補綴装置の破損とその対応	48
補綴装置の評価	46
頬	16
ポリエーテルゴム	28
ポリカーボネート	28
ポリカルボキシレートセメント	29
ポリスルフォン	28
ポリソムノグラフィ	24
ホルモンの合成・分泌・作用	15

ま

マイクロモーター	28
埋入計画の立案	47
埋伏歯	33
埋没	46, 47
マウスガード	45
膜内〈膜性〉骨化	17
麻疹	33, 43
麻酔	26
麻酔管理	45
麻酔前投薬	26
麻酔法	8
麻酔補助薬	26

末期癌患者の管理	40
マッサージ	27
マナー	7
摩耗症	36
マルチブラケット装置	34
慢性肝炎	25
慢性再発性アフタ	40
慢性腎臓病	25
慢性腎不全	22
慢性閉塞性肺疾患	22

み

味覚	6, 7, 9, 16, 23
味覚異常	6
味覚障害	20
味覚障害の予防	45
水	14
身だしなみ	7
身元確認	13
脈拍	7
脈管系	4, 15
民事裁判	3

む

無顆粒球症	44
無機材料	28

め

メンテナンス	38, 48
メタアナリシス	8
メタ分析	8
メタボリックシンドローム	4
滅菌	8, 26
滅菌法	8
メトヘモグロビン血症	45
目の保護	3
めまい	6, 20
メラニン色素沈着症	40
免疫	4, 15
免疫・アレルギー	25
免疫・アレルギー性疾患	9
免疫異常	5, 18, 43
免疫系	20
免疫系担当臓器・細胞	15
免疫血清学検査	7, 24

免疫疾患	45
免疫性血小板減少性紫斑病	44
免疫担当細胞	4
免疫不全	18, 25
免疫療法	27, 39

も

毛状〈様〉白板症	6, 43
毛舌	40
目的	7
目標	7, 8
模型	4
模型用材料	9, 28
モデリングコンパウンド	28
モニタリング	26

や

焼なまし	29
薬剤感受性	24
薬剤関連顎骨壊死・壊疽・骨髄炎	41
薬剤関連顎骨疾患	41
薬剤耐性	3
薬事衛生法規	12
薬物依存症	25
薬物・食物・嗜好品との相互作用	27
薬物性口内炎	40
薬物性歯肉増殖症	39
薬物治療	27
薬物適用の注意	27
薬物動態	9, 27
薬物投与	9
薬物に関連する口腔・顎顔面領域の症候	6
薬物の作用部位・作用機序	27
薬物の選択	27
薬物の副作用・有害事象の種類・機序・対策	27
薬物の連用・併用	27
薬物副作用	42
薬物・放射線による有害事象	5
薬物療法	9, 26, 27, 38
薬物療法の種類と特徴	27
薬力学	9
薬理作用	9

薬効	27
薬効に影響を及ぼす身体的要因...	27

ゆ

有害事象	5, 27
有害事象への対応	3
有害反応に対する口腔管理.....	27
有害反応の種類と特徴	27
有機材料	28
ユーティリティーワックス.....	28
誘発痛	6
輸液・輸血療法	27
輸血関連検査	24
癒合歯	32
癒着歯	32

よ

要介護高齢者にみられる症候....	6
要介護度	21
幼児期	5
幼若永久歯齲蝕	36
幼若永久歯の根尖性歯周疾患と治 療	37
幼若永久歯の歯冠修復法	36
幼若永久歯の歯髄疾患と治療...	37
溶接	29
用法と用量	27
用量と反応	27
抑うつ障害	44
予防衛生法規	12
予防効果	36
予防効果の評価	37
予防手段	4
予防填塞用材料	28
予防と健康管理・増進	4

ら

ライフステージ別にみた保健・福 祉の制度	13
ライフステージ別の治療.....	25
ラップアラウンドリテーナー..	34
ラヌーラ.....	33, 42

り

リウマチ性顎関節炎.....	42
力学的評価.....	46
力学的要件.....	46
リコールとメンテナンス....	48
リスク.....	7
リスク比.....	8
リスク評価.....	12
リスクファクター.....	36, 37
リスクマネジメント.....	3
裏層材.....	28
立位.....	6
リップバンパー.....	34
リハビリテーション.....	9, 26
リハビリテーションの概念....	26
リハビリテーションの技術....	26
リハビリテーションの理念....	3
リベース.....	48
リモデリング.....	17
留意すべき疾患.....	22
粒子放射線.....	23
流涎症.....	42
良性腫瘍.....	42
ライン.....	48
リンガルアーチ.....	34
リン酸亜鉛セメント.....	29
リン酸塩系埋没材.....	29
臨床疫学.....	14
臨床疫学的指標.....	8
臨床研究.....	3
臨床試験・治験と倫理.....	3
臨床操作.....	46, 47

る

類天疱瘡	40, 44
------------	--------

れ

レーザー装置	28
レーザー療法	27
暦年齢	16
レジンセメント	29
レジン添加型グラスアイオノマー セメント	28, 29
レジンの成形技術・機器	29
レディキャストリングワックス	28
連用	9, 27

ろ

瘻	6
老化	5
老化による口腔・顎顔面領域の症 候	49
ろう義歯の試適	47
ろう材	29
ろう付け	29, 46
労働安全衛生管理	13
ロストワックス法による製作 ..	46

わ

矮小歯	32
ワックス	9, 28
ワックスパターン形成	46

歯科医師国家試験制度改善検討部会報告書

平成 28 年 3 月 29 日

目 次

I	はじめに	1
II	歯科医師国家試験について	1
III	多数回受験者への対応について	4
IV	共用試験、診療参加型臨床実習及び臨床実習終了時の態度・技能評価について.....	5
V	受験資格認定について	6
VI	その他	6
VII	おわりに	6

I はじめに

歯科医師国家試験は、歯科医師法第9条に基づき、「臨床上必要な歯科医学及び口くう衛生に関して、歯科医師として具有すべき知識及び技能」について行われており、歯科保健医療及び歯学教育の変化に合わせて概ね4年に1度改善を行っている。直近では、「歯科医師国家試験制度改善検討部会報告書（平成24年4月）」を踏まえ、第107回歯科医師国家試験（平成26年）から歯科医師国家試験出題基準（以下、「出題基準」という。）や合格基準の改善等が行われた。

その後も我が国の状況は急速に変化しており、少子高齢化に伴い、今後も国民の医療や介護の需要の増加が見込まれ、地域包括ケアシステムの構築が求められている。歯科医師も他職種と連携し、地域住民へ歯科保健医療を提供することが不可欠である。また、歯科医療機関を受診する患者の年齢構成だけではなく、疾病構造や治療に対するニーズも大きく変化しており、歯科医師に求められる診療内容も大きく変化してきている。

こういった社会情勢の変化に対応できる歯科医師を確保するため、医道審議会歯科医師分科会歯科医師国家試験制度改善検討部会を平成27年10月に設置し、ワーキンググループを含め計7回の会議で現行の歯科医師国家試験とその改善事項等について議論を重ね、今般、改善事項を取りまとめたので、ここに報告する。

II 歯科医師国家試験について

1. 出題内容等

（1）出題基準について

出題基準については、将来を見据え、社会情勢の変化に合わせて、次の項目の充実を図る。

- ・ 高齢化等による疾病構造の変化に伴う歯科診療の変化に関する内容
- ・ 地域包括ケアシステムの推進や多職種連携等に関する内容
- ・ 口腔機能の維持向上や摂食機能障害への歯科診療に関する内容
- ・ 医療安全やショック時の対応、職業倫理等に関する内容

なお、具体的な見直しの際は、現在の教育の状況や歯科診療における実施状況等も踏まえ、早期に出題基準に盛り込むべきものと中長期的に出題基準に盛り込む必要があるものを分けながら、ブループリント（歯科医師国家試験設計表）における各項目の区分けや内容、出題比率、大項目・中項目・小項目としての位置づけ等、出題基準の改定を行う必要がある。

また、出題基準の改定を行う際は、平成26年度から実施している厚生労働科学研究の結果や、歯学教育モデル・コア・カリキュラム※¹との整合性、歯科医

師臨床研修の到達目標との整合性等を踏まえ、実施する必要がある。

(2) 出題内容について

具体的な出題内容は、出題基準を踏まえ、歯科医師試験委員が作成するが、社会情勢の変化に対応し、必要な出題を行うべきである。なお、出題内容は、歯科医師臨床研修において、指導歯科医の下で診療に従事するのに必要な知識及び技能を問う水準とするべきであり、引き続き出題内容の検討を十分に行う。

また、先進的であるものや限られた歯科大学・歯学部でしか教育されていないものを国家試験に出題することは適當ではないが、歯科医師として必要な内容については、大半の歯科大学・歯学部で教育されていることを前提に国家試験で問う必要がある。

なお、診療参加型臨床実習で得た能力をより適切に評価できる出題を推進し、タクソノミー※²の高い出題を今後も継続すべきである。

これらの必要な出題を行うためにも歯科医師試験委員会について、多様な意見が取り入れられるよう構成や運営方法を改善すべきである。

2. 出題方法等

(1) 出題数・出題構成について

現在の歯科医師国家試験の問題数を各試験問題の解答時間や統計的な信頼性等を踏まえ検討し、必修問題 80 題、一般問題（総論）100 題、一般問題（各論）80 題、臨床実地問題 100 題の計 360 題に見直し、併せて解答時間を受験者の負担も踏まえ見直しを行う。

また、出題構成は、問題冊子で必修問題及び一般問題又は臨床実地問題と分かれているが、一般問題と臨床実地問題を含む連問や診断・治療計画を論理的に思考し一連の診療行為を問うため冊子をまたいだ連問等を出題できるよう、各冊子に必修問題、一般問題、臨床実地問題を出題するよう見直しが必要である。

(2) 出題形式について

現在の歯科医師国家試験では、A タイプ（5つの選択肢から1つの正解を選ぶ形式）、X2 タイプ（5つの選択肢から2つの正解を選ぶ形式）、XX タイプ（5つの選択肢から正解数を指定せずに正解を選ぶ形式）、LA タイプ（6つ以上の選択肢から1つの正解を選ぶ形式）及び計算問題（数値を解答させる非選択形式）が採用されている。

試験問題に多様性を持たせ、また、論理的な思考力をより適切に評価できるようにするため、必要に応じ、X3 タイプ（5つの選択肢から3つの正解を選ぶ形

式)、X4 タイプ (5つの選択肢から4つの正解を選ぶ形式) 及び順序問題 (治療手順等を解答させる非選択形式) を使用できることとする。

なお、XX タイプは、正答及び誤答を正しく把握しなければならない問題等に使用すべきである。また、X3 タイプ、X4 タイプ、LA タイプ、計算問題及び順序問題を使用する際も、問題の質を十分に考慮することが必要である。

3. 合格基準

現在の合格基準は、必修問題の得点、一般問題及び臨床実地問題の出題領域に応じた領域別の得点、禁忌肢選択数及び必要最低点という複数の基準から構成されている。一般問題及び臨床実地問題は、問題の難易度による合格状況の大きな変動を防ぎ、一定の知識及び技能を有する受験者が基準を満たせるように平均点と標準偏差を用いた相対基準で評価を行っている。

(1) 必修問題について

必修問題は、歯科医師として必ず具有すべき基本的な最低限度の知識及び技能を有する者を識別する目的で出題されており、引き続き絶対基準での評価を継続する。

また、必修問題は、出題基準の「必修の基本的事項」から出題されるが、この項目に準拠し、必修問題としての目的を踏まえた出題となるよう歯科医師試験委員会で十分に精査を行った上で出題を行うべきである。また、歯科医師国家試験終了後の歯科医師国家試験 K・V 部会での問題の評価を行う際も、特に慎重に行う必要がある。

(2) 一般問題と臨床実地問題について

臨床実地問題は、一般問題に比べ臨床における問題解決能力をより必要とすることから、引き続き配点に重みを置く。

相対基準の評価方法については、受験者の質の変動に左右されず、歯科医師として具有すべき知識及び技能を有している者を適切に評価するために採用している現在の方法を引き続き採用する。

(3) 禁忌肢選択数について

歯科医師国家試験で禁忌肢を含む問題を出題することについては、昨今の歯科医師国家試験の合格状況下で受験者に必要以上の緊張感を与えているとの意見やここ数年間の運用状況を踏まえると他の合格基準で歯科医師として必要な知識及び技能については確保されている点、限られた歯科医師国家試験の出題範囲内で一定数の禁忌肢を含む画一的でない多様な問題を作成することが歯科医師試験委員の負担にもつながっている等の意見があった。一方で、必要な医療安全

の知識を習得することは、安心・安全な歯科医療を提供するため不可欠であるとの意見もあり、禁忌肢を継続するか否かについて、慎重に議論を行った。

その結果、禁忌肢を含む問題は出題を行わないこととした。なお、これまで禁忌肢を含む問題で出題されてきた患者に対して重大な障害を与える治療や手技、ショック時等の緊急時における誤った対応、法律に抵触する行為、職業倫理に反する行為等に関する内容は安心・安全な歯科医療を提供する上で必要な知識であることから、今後も内容を充実させた上で、引き続き出題を行う必要がある。

(4) 必要最低点について

バランスの取れた知識及び技能を有している歯科医師を確保する観点から歯科医師国家試験の領域を構成するグループ別に必ず得点しなければならない最低点を設けているが、これまでの運用状況を踏まえると、他の合格基準で歯科医師として必要な知識及び技能については確保されており、複雑な合格基準を見直す観点からも今後はこの基準の運用を行わないこととする。

(5) その他

医療安全を充実させるため引き続き禁忌肢として出題を行ってきたような内容は出題を行うものの、禁忌肢選択数としての合格基準は見直すこととした。また、必要最低点についても見直しを行うこととしたが、バランスのとれた知識及び技能は不可欠であることは言うまでもない。なお、これらの合格基準が歯科医師国家試験の合格状況に与える影響は非常に小さいことから、今般の見直しによって合格状況が大きく変化することは予想されない。

4. 公募問題

良質で画一化されない試験問題を一定数プールする目的で開始された問題の公募であるが、実際に出題する際、歯科医師試験委員会で推敲に要する負担も大きいことから、今後は、視覚素材を中心とした公募に見直しをすべきである。

なお、視覚素材の公募に際しては、試験問題に適する良質な視覚素材を多数確保する観点から、視覚素材を公募する際の注意点をある程度明確にする必要がある。

Ⅲ 多数回受験者への対応について

対応方法について、受験回数制限や卒後一定期間経過している受験者に臨床に関する試験を実施する方法等、複数の方法について検討を行った。一定数の多数回受験者がいることを踏まえると、緊急性を要する課題であるが、導入をする際には、検討をすべき事項もあることから、引き続き検討を行う。しかしながら、次回の議論の際に

一定の結論を出せるよう、厚生労働科学研究等を活用し、様々な立場の意見も踏まえ、データを蓄積する必要がある。

また、合格発表の際、卒業年次別受験者数・合格者数・合格率が公表されているが、それらの内容を多数回受験者への対応の検討に資する内容にすべきである。なお、これらの情報は厚生労働省のホームページに掲載するなど、関係者が容易にアクセスできる環境も整える必要がある。

多数回受験者であっても、歯科医師国家試験合格後は歯科医師臨床研修を実施する必要があり、歯科医師臨床研修が円滑に実施できるよう、継続的な臨床技能の研鑽が行われることに期待する。

IV 共用試験、診療参加型臨床実習及び臨床実習終了時の態度・技能評価について

歯科医師国家試験は、学校教育法に基づく大学において、歯学の正規の課程を修めて卒業した者等が受験できるが、それまでの一連の歯科医師養成過程において実施される、共用試験、診療参加型臨床実習、臨床実習終了時の態度・技能評価についても非常に重要であるので、様々な関係者が議論に参加し、次に示すような改善が進められることに期待する。

なお、各歯科大学・歯学部で実施される共用試験 CBT^{※3}や OSCE^{※4}についても、それぞれの試験としての重要性を改めて認識し、厳正な実施に努め、歯学生の質の向上のため、更なる充実に向けた取組みが重要である。

1. 共用試験 CBT、診療参加型臨床実習について

診療参加型臨床実習を進めるためには、患者の協力が不可欠である。患者の協力を得て、充実した診療参加型臨床実習を行う上で、患者にとって客観的に安心・安全を確保することが求められることから、共用試験 CBT の統一基準について議論が進められるべきである。

また、共用試験 CBT は歯科医師国家試験と密接に関連することから、公益社団法人医療系大学間共用試験実施評価機構と国は、情報の管理は徹底しつつ、共用試験 CBT と歯科医師国家試験の実施や評価に係る事項等について定期的な情報交換を行うべきである。

2. 臨床実習終了時の態度・技能評価について

臨床実習開始前の OSCE の実施について10年以上の実績がある公益社団法人医療系大学間共用試験実施評価機構において、医学系と同様、全ての歯科大学・歯学部における統一的な技能試験を含む臨床実習終了時の態度・技能評価を導入する準備が進められている。安心・安全な歯科医療の提供に向けて、歯科医師としての臨床技能を確

保するためにも、必要な内容の議論をしっかりと行い、実施時期を定めて、全ての歯科大学・歯学部での臨床実習終了時の態度・技能評価の導入を進めていくことが重要である。

V 受験資格認定について

受験資格認定は、外国歯科大学を卒業し、又は外国において歯科医師免許を得た者が、日本の歯科医師国家試験の受験資格を有するか否かについて審査するものである。その審査は、日本の歯科大学を卒業した者と同等以上であるか否かについて認定基準に基づき行われている。

日本の歯科大学・歯学部の学生は共用試験を受験し、一定の基準を満たした上で診療参加型臨床実習を行っていることから、認定基準として共用試験 CBT の活用も検討すべきである。併せて、筆記試験と実地試験で構成される歯科医師国家試験予備試験については、実地試験を主体とする試験とする等、その内容を充実させる必要がある。

なお、具体的な運用については、医道審議会歯科医師分科会において、共用試験 CBT の成績を活用する際の認定基準やこれまでに歯科医師国家試験予備試験の受験資格認定がされた者への対応等について審議を行うべきである。

VI その他

コンピュータを試験に活用することによって、動画や多様な視覚素材等を用いることができ、より臨床現場に即した出題が可能となるという指摘もある。一方で、コンピュータの特性を活かした出題手法の開発、試験実施の際のトラブルを回避するための方法及び諸経費等について検討が必要である。

共用試験 CBT を実施する公益社団法人医療系大学間共用試験実施評価機構にも協力を得ながら、必要な課題等の整理を行うべきである。

VII おわりに

本部会の提言事項については、医道審議会歯科医師分科会の意見を踏まえ、可能な事項については早期に改善を行い、出題基準の改定状況を踏まえつつ、第 111 回歯科医師国家試験（平成 30 年）からの運用を目指して改善すべきである。今後も歯科医師国家試験について定期的に見直しを議論し、改善していくことが必要である。

また、歯科医師国家試験の問題は、主に歯科大学・歯学部で臨床及び教育に従事する教員によって構成される歯科医師試験委員会が度重なる熟慮の上、歯科医師として必要な内容を出題している。合格発表と合わせて正答の公表が行われているので、合

否に関わらず、受験者には改めて歯科医師国家試験の内容を確認し、知識及び技能の確認を行うことを期待する。

※1 歯学教育モデル・コア・カリキュラム

歯学生が卒業時まで身に付けておくべき必須の実践的能力(知識・技能・態度)の到達目標を示したもの。平成13年3月に策定され、平成19年度・22年度に改訂された。

※2 タクソノミー (taxonomy、評価領域分類)

教育目標毎に問題の解答に要する知的能力のレベルを分類したもので、一般に認知領域ではⅠ・Ⅱ・Ⅲ型に分類される。Ⅰ型は単純な知識の想起によって解答できる問題であり、Ⅱ型は与えられた情報を理解・解釈してその結果に基づいて解答する問題であり、Ⅲ型は設問文の状況を理解・解釈した上で、各選択肢の持つ意味を解釈して具体的な問題解決を求める問題である。

※3 共用試験 CBT

公益社団法人医療系大学間共用試験実施評価機構により臨床実習開始前に実施されている共用試験のうち、コンピュータを活用した総合的理解力の評価(Computer Based Testing)のこと。平成17年度から正式に実施されている。

※4 OSCE

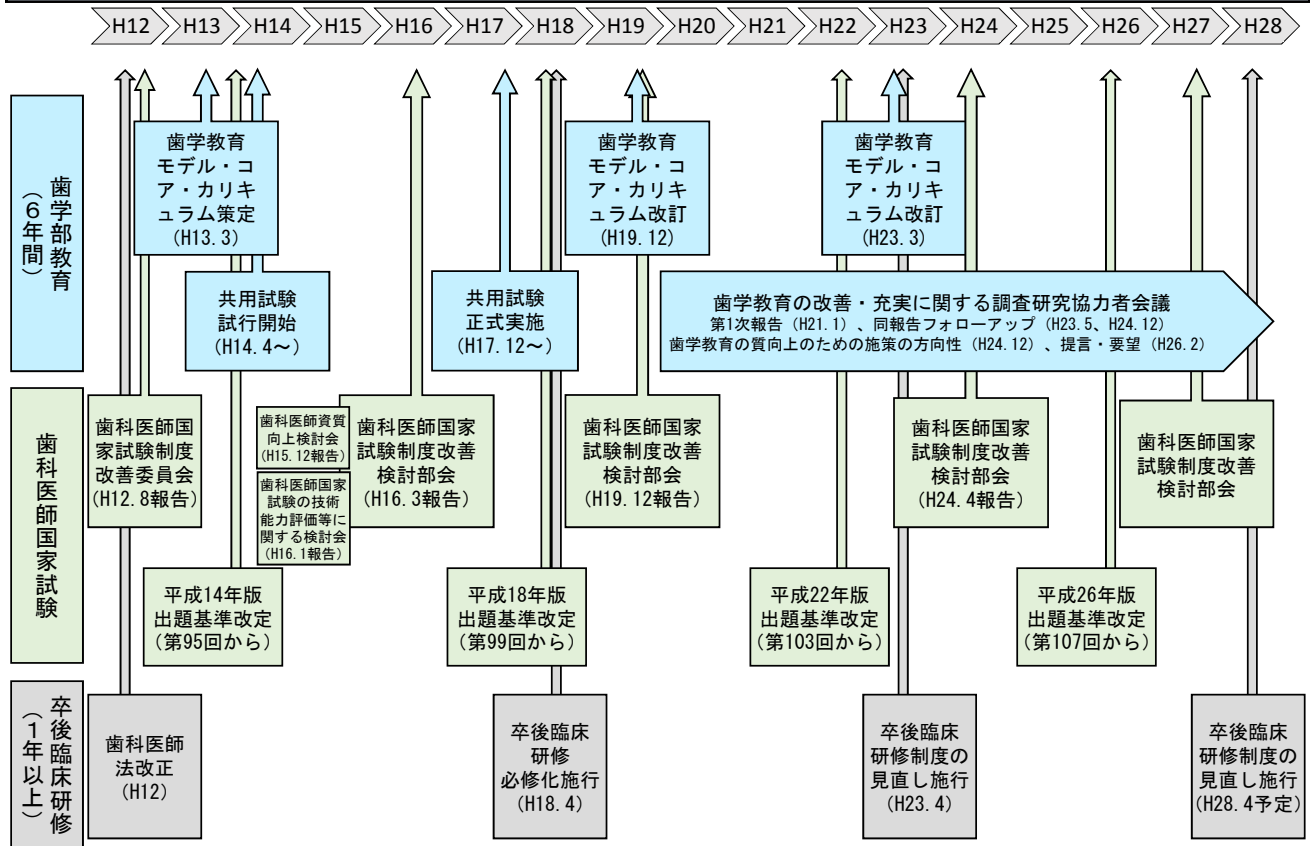
Objective Structured Clinical Examination (客観的臨床能力試験) の略。

医 道 審 議 会 歯 科 医 師 分 科 会
歯科医師国家試験制度改善検討部会委員

石川 博之	福岡歯科大学 学長
伊東 隆三	伊東歯科口腔病院 病院長
植田 耕一郎	日本大学歯学部 教授
宇佐美 慧	筑波大学大学院人間総合科学研究科 准教授
岸本 裕充	兵庫医科大学 主任教授
嶋田 昌彦	医療系大学間共用試験実施評価機構 歯学系C B T問題評価・プール化小委員会委員長
角 保徳	国立長寿医療研究センター 歯科口腔先進医療開発センター長
◎ 田上 順次	東京医科歯科大学 副学長
西原 達次	九州歯科大学 学長
橋本 修二	藤田保健衛生大学 教授
三浦 宏子	国立保健医療科学院 国際協力研究部長
宮崎 隆	昭和大学 歯学部長
○ 矢谷 博文	大阪大学大学院歯学研究科 教授
柳川 忠廣	日本歯科医師会 副会長
山口 育子	NPO 法人ささえあい医療人権センターCOML 理事長
(オブザーバー)	
寺門 成真	文部科学省高等教育局医学教育課長

※◎は部会長、○は部会長代理。敬称略、50 音順。

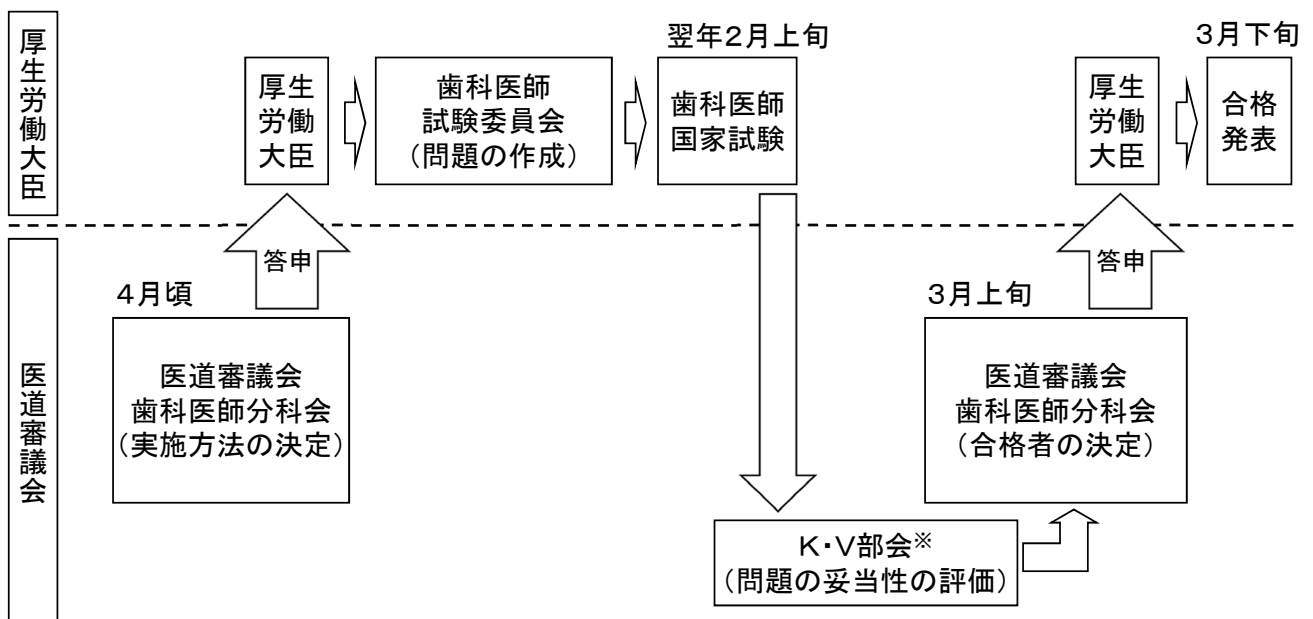
卒前・卒後の歯科医学教育を巡る近年の動き



1

歯科医師国家試験の実施・見直しに関する大まかな流れ

おおむね4年に1度国家試験の実施方法を改善し、その後、おおむね4年に1度出題範囲(出題基準)の内容を改善を行っている。今年度、実施方法の改善については議論が行われている。



※K・V(Key Validation)部会: 医道審議会歯科医師分科会の下に設置されており、試験の実施結果を踏まえ、問題の妥当性を検討している。

2

平成26年版歯科医師国家試験出題基準(概要)

歯科医師国家試験は、歯科医師法第9条に基づいて、「临床上必要な歯科医学及び口く衛生に関して、歯科医師として具有すべき知識及び技能について」行われる。第9条にいう「知識と技能」とは、臨床研修歯科医師として歯科医療に第一歩を踏み出し、指導歯科医の下でその任務を果たすのに必要な基本的知識及び技能であるとする。

その内容を具体的な項目によって示したのが、歯科医師国家試験出題基準(ガイドライン)である。歯科医師国家試験の妥当な内容、範囲及びレベルを確保するため、歯科医師試験委員は、この基準を踏まえて出題する。ただし、出題内容に関する最終的な判断は、試験委員会が行うものとする。

ブループリント(歯科医師国家試験設計表)

「必修の基本的事項」(約20%)		「歯科医学総論」(約30%)	
1 医の倫理と歯科医師のプロフェッショナリズム	約2%	総論Ⅰ 保健医療論	約12%
2 社会と歯科医療	約2%	総論Ⅱ 健康管理・増進と予防	約9%
3 予防と健康管理・増進	約5%	総論Ⅲ 人体の正常構造と機能	約5%
4 歯科医療の質と安全の確保	約7%	総論Ⅳ 歯・口腔・顎・顔面の正常構造と機能	約9%
5 診療記録と診療情報	約2%	総論Ⅴ 発生、成長、発達、加齢	約3%
6 人体の正常構造・機能	約14%	総論Ⅵ 病因、病態	約9%
7 人体の発生・成長・発達・加齢	約7%	総論Ⅶ 主要症候	約4%
8 医療面接	約4%	総論Ⅷ 診察	約7%
9 主要な症候	約10%	総論Ⅸ 検査	約16%
10 診察の基本	約4%	総論Ⅹ 治療	約13%
11 検査の基本	約10%	総論Ⅺ 歯科材料と歯科医療機器	約13%
12 臨床判断の基本	約2%		
13 初期救急	約1%	「歯科医学各論」(約50%)	
14 主要な疾患と障害の病因・病態	約12%	各論Ⅰ 歯科疾患の予防・管理	約6%
15 治療の基礎・基本手技	約12%	各論Ⅱ 成長発育に関連した疾患・病態	約19%
16 チーム歯科医療	約2%	各論Ⅲ 歯・歯髄・歯周組織の疾患	約23%
17 一般教養的事項	約4%	各論Ⅳ 顎・口腔領域の疾患	約23%
		各論Ⅴ 歯質・歯・顎顔面欠損による障害と その他の口腔・顎顔面の機能障害	約23%
		各論Ⅵ 高齢者の歯科診療	約6%

3

歯科医師国家試験制度改善の概要(出題数・出題内容・合格基準)

制度改善の項目		平成19年12月 (平成22年(第103回))	平成24年4月 (平成26年(第107回))	平成28年 (平成30年(第111回))
出題数 (必修問題)		365題を維持 (50題→総数の2割程度)	現行通り365題 (70題)	360題 (80題に増加)
出題内容 (全体)		口腔と全身との関わりや高齢者・全身疾患を有する者等への対応、歯科疾患の予防管理等についての内容を充実。社会保障制度等についても出題範囲に含める。出題基準の項目の包括化する。ブループリントをより詳細にする。基礎領域については臨床との関連性を踏まえた内容にする。	高齢者等への対応に関する出題、歯科疾患の予防管理に関する出題、社会保障制度に関する出題、口腔と全身疾患との関係に関する出題、救急災害時の歯科保健対策・法歯学に関する出題を充実。	将来を見据え、社会情勢の変化に合わせて、次の項目の充実を図る。 ・高齢化等による疾病構造の変化に伴う歯科治療の変化に関する内容 ・地域包括ケアシステムの推進や多職種連携等に関する内容 ・口腔機能の維持向上や摂食機能障害への歯科治療に関する内容 ・医療安全やショック時の対応、職業倫理等に関する内容
合格基準	必修問題	現行の基準を基本とし、絶対基準で評価すべき	絶対基準での評価を継続	絶対基準での評価を継続
	一般問題 臨床実地問題	新卒受験者の知識・臨床能力等の水準を基本としつつ、新卒受験者間でも知識・臨床能力に差があることに留意する。臨床実地問題はより配点に重みを置く。	受験者の質の変動に左右されず、歯科医師として具有すべき知識・技能を有している者を適切に評価すべき。	受験者の質の変動に左右されず、歯科医師として具有すべき知識及び技能を有している者を適切に評価するために採用している現在の方法を継続。
	禁忌肢問題	継続して採用 偶発的な要因で不合格とならないよう配慮	従来通り運用 偶発的な要因で不合格とならないよう配慮	禁忌肢を含む問題は出題を行わない。患者に対して重大な障害を与える治療や手技、ショック時等の緊急時における誤った対応、法律に抵触する行為、職業倫理に反する行為等に関する内容は今後も内容を充実させた上で、引き続き出題。
	必要最低点		歯科医師国家試験の領域を構成するグループ別に必ず得点しなければならない最低点を設定すべき	他の合格基準で歯科医師として必要な知識及び技能については確保されており、今後は運用を行わない。

4

試験の時間割と解答時間

・幅の広い出題を可能にするため、午前の冊子、午後の冊子ともに必修問題・一般問題・臨床実地問題を均等に出题させる。

	現在		見直し案
	出題数		出題数
必修問題	70問		80問
一般問題	190問		180問
臨床実地問題	105問		100問
合計	365問		360問



試験日	出題区分と試験時間		合計時間
1 日目	A (135分)	B (135分)	4 時間30分
2 日目	C (135分)	D (135分)	4 時間30分
出題内容 問題数	必修問題・一般問題：合計65問 (1 問当たり約65秒) 臨床実地問題：25問 (1 問当たり約2分40秒)		

5

歯科医師国家試験における問題の形式

<Aタイプ>

5つの選択肢の中から1つの正解を選ぶ形式

<X2、X3、X4タイプ>

5つの選択肢の中から2～4つの正解を選ぶ形式

<XXタイプ>

5つの選択肢の中から複数の正解を選ぶ形式

<LAタイプ>

6～10の選択肢から1つの正解肢を選ぶ形式

<計算問題>

医薬品の処方（用法・用量等）や検査値等、数値を計算により解答させる形式

<順番問題>

治療手順等を正しい順に解答させる形式

6

歯科医師国家試験の変遷

回 数			79～82	83～86	87～90	91～94	95～98	99～102	103～106	107～110	111～		
年			61～H 1	2 ～ 5	6 ～ 9	10～13	14～17	18～21	22～25	26～29	30～		
年間試験実施回数			1 回	1 回		1 回	1 回	1 回	1 回	1回	1 回		
筆記試験の実施日数			1. 5 日	1. 5 日		2 日	2 日	2 日	2 日	2 日	2 日		
試験内容	試験科目	基 礎	(臨床系学科に含まれる)		(総論に含まれる)		歯科医学・歯科保健医療総論、歯科医学・歯科保健医療各論（科目別出題の廃止）			歯科医学総論、歯科医学各論			
		臨床学 説	7 科目（口腔外科、保存、補綴、矯正、口腔衛生、小児歯科、歯科放射線）		8 科目（口腔外科、保存、補綴、矯正、口腔衛生、小児歯科、歯科放射線、歯科医学・医療総論）								
			昭和57年に廃止、昭和58年以降は臨床実地										
		臨床実地	60問		60問		80問	100問	105問		100問		
		必修						30問	50問	70問	80問		
		計	科 目	7	8		平成 9 年に科目別出題が廃止、平成10年以降は領域別出題						
			設問数	260問	280問		280問	330問	365問	365問	360問		
	試験方法	解答形式		昭和51年以降は客観的多肢選択形式を採用、105回に計算問題を採用									X3、X4、順序問題を追加
		実技試験（実地）	口腔外科	昭和50年に廃止、昭和58年以降は臨床実地問題を採用									
			保 存	昭和57年に廃止、昭和58年以降は臨床実地問題を採用									
			補 綴	昭和57年に廃止、昭和58年以降は臨床実地問題を採用									
	禁忌肢							平成14年より導入				廃止	

7

歯科医師国家試験の合格基準

一般問題(必修問題を含む)を1問1点、臨床実地問題を1問3点とし、以下の全てを満たすことが必要。

① 領域A(総論)

② 領域B(各論Ⅰ～Ⅲ)

③ 領域C(各論Ⅳ～Ⅵ)

相対基準

受験者の質の変動に左右されず、歯科医師として具有すべき知識及び技能を有している者を適切に評価するために採用している現在の方法を引き続き採用する。

④ 必修問題

絶対基準

必修問題は、歯科医師として必ず具有すべき基本的な最低限度の知識・臨床能力を有する者を識別する目的で出題されており、引き続き絶対基準での評価を継続する。

⑤ 必要最低点

他の合格基準で歯科医師として必要な知識及び技能については確保されており今後は運用しない。

⑥ 禁忌肢問題選択数

禁忌肢を含む問題は出題を行わない。患者に対して重大な障害を与える治療や手技、ショック時等の緊急時における誤った対応、法律に抵触する行為、職業倫理に反する行為等に関する内容は今後も内容を充実させた上で、引き続き出題する。

8

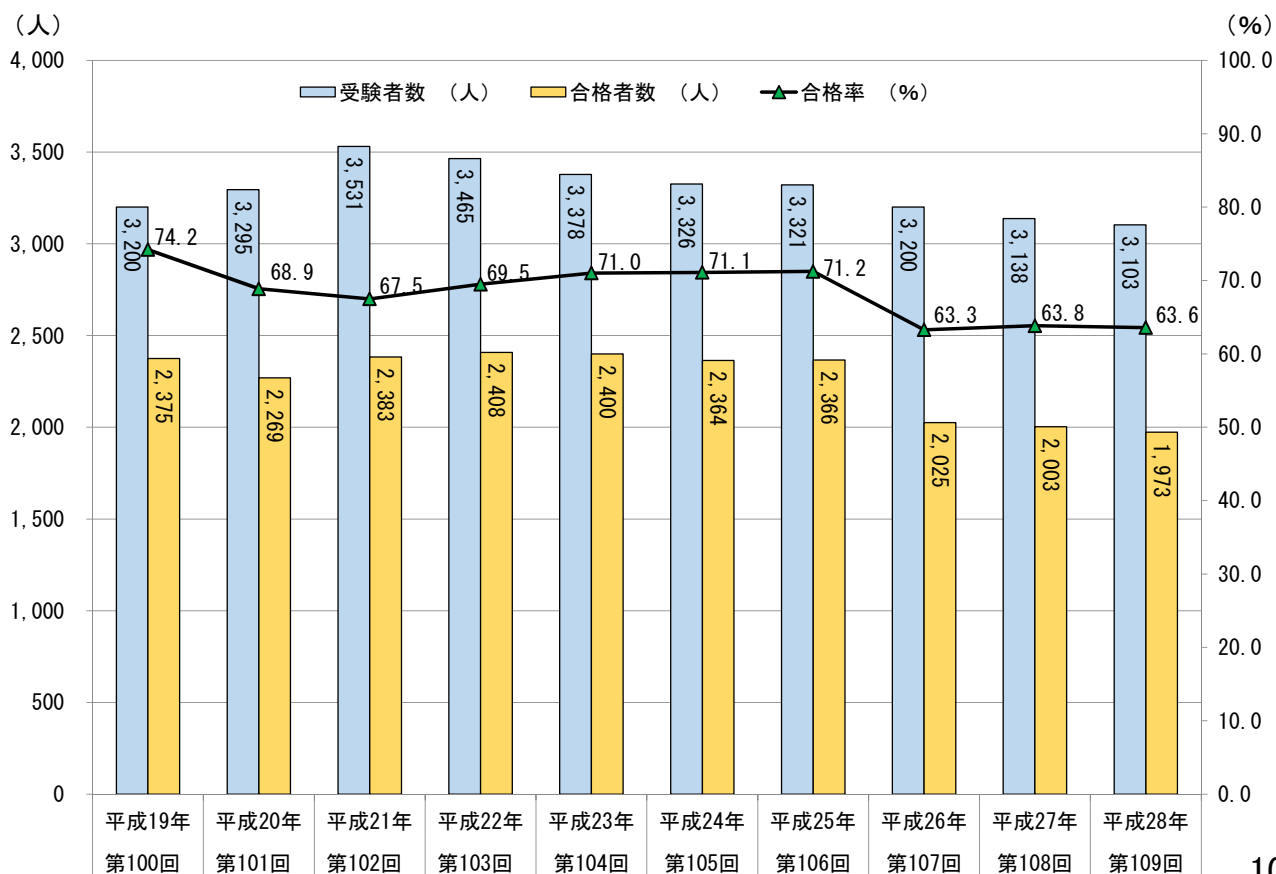
歯科医師国家試験 合格者数等の推移

回 数	施行年月日	受験者数 (人)	合格者数 (人)	合格率 (%)
第100回	平成19年2月10～11日	3,200 (2,580)	2,375 (2,087)	74.2 (80.9)
第101回	平成20年2月9～10日	3,295 (2,487)	2,269 (1,948)	68.9 (78.3)
第102回	平成21年2月7～8日	3,531 (2,516)	2,383 (1,915)	67.5 (76.1)
第103回	平成22年2月6～7日	3,465 (2,355)	2,408 (1,921)	69.5 (81.6)
第104回	平成23年2月5～6日	3,378 (2,356)	2,400 (1,928)	71.0 (81.8)
第105回	平成24年2月4～5日	3,326 (2,311)	2,364 (1,882)	71.1 (81.4)
第106回	平成25年2月2～3日	3,321 (2,373)	2,366 (1,907)	71.2 (80.4)
第107回	平成26年2月1～2日	3,200 (2,241)	2,025 (1,642)	63.3 (73.3)
第108回	平成27年1月31日～2月1日	3,138 (1,995)	2,003 (1,457)	63.8 (73.0)
第109回	平成28年1月30～31日	3,103 (1,969)	1,973 (1,436)	63.6 (72.9)

※ () 内は新卒者を示す

9

歯科医師国家試験の合格率等の推移



10

歯科医師国家試験 男女別合格者等の推移

					男女別合格率(%)	
回数		総数	男性	女性	男性	女性
第105回 (平成24年)	受験者数(人)	3,326	2,056	1,270	68.3	75.6
	男女比(%)		(61.8)	(38.2)		
	合格者数(人)	2,364	1,404	960		
	男女比(%)		(59.4)	(40.6)		
第106回 (平成25年)	受験者数(人)	3,321	2,035	1,286	68.3	75.9
	男女比(%)		(61.3)	(38.7)		
	合格者数(人)	2,366	1,390	976		
	男女比(%)		(58.7)	(41.3)		
第107回 (平成26年)	受験者数(人)	3,200	1,998	1,202	59.8	69.1
	男女比(%)		(62.4)	(37.6)		
	合格者数(人)	2,025	1,194	831		
	男女比(%)		(59.0)	(41.0)		
第108回 (平成27年)	受験者数(人)	3,138	1,955	1,183	58.9	72.0
	男女比(%)		(62.3)	(37.7)		
	合格者数(人)	2,003	1,151	852		
	男女比(%)		(57.5)	(42.5)		
第109回 (平成28年)	受験者数(人)	3,103	1,984	1,119	59.6	70.6
	男女比(%)		(63.9)	(36.1)		
	合格者数(人)	1,973	1,183	790		
	男女比(%)		(60.0)	(40.0)		

11

第109回歯科医師国家試験 卒業年次別受験者数・合格者数・合格率

卒業年次		受験可能回数	受験者数(人)	構成比(%)	合格者数(人)	合格率(%)
新卒	平成27年4月～ 平成28年3月	1回	1,969	63.5	1,436	72.9
既卒	平成26年4月～ 平成27年3月	2回	576	18.6	361	62.7
	平成25年4月～ 平成26年3月	3回	216	7.0	113	52.3
	平成24年4月～ 平成25年3月	4回	103	3.3	38	36.9
	平成23年4月～ 平成24年3月	5回	41	1.3	9	22.0
	平成22年4月～ 平成23年3月	6回	35	1.1	4	11.4
	平成21年4月～ 平成22年3月	7回	23	0.7	2	8.7
	平成20年4月～ 平成21年3月	8回	43	1.4	3	7.0
	平成19年4月～ 平成20年3月	9回	25	0.8	3	12.0
	平成19年3月以前	10回以上	72	2.3	4	5.6
	計		1,134	36.5	537	47.4
総計			3,103	100.0	1,973	63.6

12

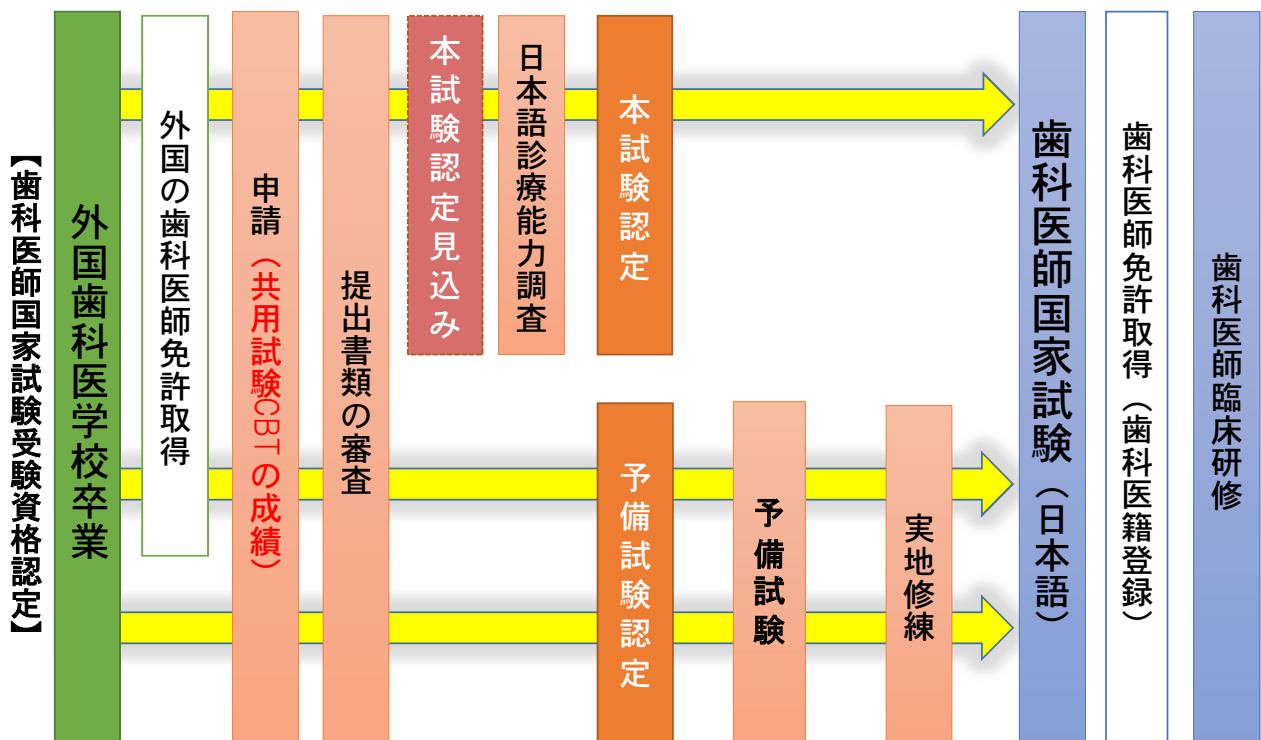
合格基準の禁忌肢選択数及び必要最低点の状況

患者に対して重大な障害を与える危険性のある誤った治療（診断）等の誤った知識を持った受験者を識別する目的で運用されている「禁忌肢選択数」やバランスの取れた知識・技能を持った歯科医師が求められていること等から導入された「必要最低点」の合格基準を満たさない大多数の受験者は、他の合格基準も満たしていない。

	禁忌肢選択数が合格基準を満たさなかった受験者数	必要最低点が合格基準を満たさなかった受験者数
第107回	1名 (うち、禁忌肢選択数以外の合格基準も満たさない受験者数：1名)	143名 (うち、必要最低点以外の合格基準も満たさない受験者数：122名)
第108回	1名 (うち、禁忌肢選択数以外の合格基準も満たさない受験者数：1名)	111名 (うち、必要最低点以外の合格基準も満たさない受験者数：110名)
第109回	14名 (うち、禁忌肢選択数以外の合格基準も満たさない受験者数：14名)	43名 (うち、必要最低点以外の合格基準も満たさない受験者数：43名)

13

外国歯科医師による日本の歯科医師免許取得の流れ



14

97

歯科医師国家試験受験資格認定の基準について

		歯科医師国家試験受験資格認定	歯科医師国家試験 予備試験受験資格認定
外国 歯科医 学校の 修業年 数	歯科医学校の 入学資格	高等学校卒業以上（修業年数12年以上）	
	歯科医学校の教育 年限及び履修時間 （大学院の修士課程、 博士課程等は 算入しない）	6年以上（進学課程；2年以上、専門課程；4年以上）の一貫した専門教育（4500時間以上）を受けていること。 ただし、5年であっても、5500時間以上の一貫した専門教育を受けている場合には、基準を満たすものとする。	5年以上（専門課程；4年以上）であり、専門科目の履修時間が3500時間以上で、かつ一貫した専門教育を受けていること。
	歯科医学校卒業ま での修業年限	18年以上	17年以上
歯科医学校卒業からの年数		10年以内（但し、歯科医学教育又は歯科医業に従事している期間は除く）	
専門科目の成績		良好であること	
教育環境		大学付属病院の状況、教員数等が日本の大学とほぼ等しいと認められること	大学付属病院の状況、教員数等が日本の大学より劣っているものでないこと
歯科医学校卒業後、当該国の 歯科医師免許取得の有無		取得していること	取得していなくてもよい
日本語能力		日本の中学校及び高等学校を卒業していない者については、日本語能力試験N1（平成21年12月までの認定区分である日本語能力試験1級を含む。）の認定を受けていること	
共用試験CBTの成績		具体的な基準は医道審議会歯科医師分科会の審議を踏まえて決定する。	

15

歯科医師国家試験予備試験について

○ 試験科目

(1) 学説試験第一部試験

解剖学（組織学を含む。）、生理学、生化学（免疫学を含む。）、薬理学、病理学、微生物学および衛生学

(2) 学説試験第二部試験

口腔外科学、保存学、補綴学、矯正学および小児歯科学

(3) 実地試験

口腔外科学、保存学、補綴学および矯正学

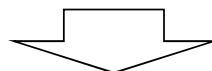
○ 試験内容

(1) 学説試験

各科目につき、多肢選択式問題20題と用語の組合せや穴埋め等の問題となっている。

(2) 実地試験

人工歯を用いた根管孔明示や総義歯の人工歯排列、エックス線写真・口腔内写真や歯列模型等を用いた診断や治療方針等を問う問題となっている。



歯科医師国家試験予備試験を実地試験を主体とする試験へ見直し

16

歯科医師国家試験受験資格認定等の状況

年度	受験資格認定の状況		予備試験の実施状況								
	本試験 認定数 (名)	予備試験 認定者数 (名)	学 説 試 験 第 一 部 試 験			学 説 試 験 第 二 部 試 験			実 地 試 験		
			受験者数 (名)	合格者数 (名)	合格率 (%)	受験者数 (名)	合格者数 (名)	合格率 (%)	受験者数 (名)	合格者数 (名)	合格率 (%)
平成18年度	5	5	5	2	40.0	2	2	100.0	2	1	50.0
19	2	1	3	1	33.3	1	0	0.0	1	1	100.0
20	0	3	4	1	25.0	2	2	100.0	2	1	50.0
21	1	0	3	0	0.0	0	0	－	1	0	0.0
22	1	5	4	2	50.0	2	1	50.0	2	1	50.0
23	1	0	4	0	0.0	0	0	0.0	1	0	0.0
24	6	2	3	1	33.3	1	1	100.0	2	1	50.0
25	1	2	3	1	33.3	1	1	100.0	2	2	100.0
26	1	3	3	1	33.3	1	1	100.0	1	1	100.0
27	3	4	3	2	66.7	2	2	100.0	2	2	100.0

